
ハロウ・ストームの冒険 色鳥飛行

渡志路

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハロウ・ストームの冒険 色鳥飛行

【NZコード】

N2016G

【作者名】

渡志路

【あらすじ】

何もできない青年詩人ハロウ・ストームが、これまで出合ったこともない人々に出会い、旅する、いくつかの箱をめぐる冒険。

まえがき

彼が突然ぼくのドアを叩いたのは4年も前の話だ。ぼくはその頃まる一年かけて赤毛の青年の物語を語り終えたばかりだったので、その青白い、深刻そうな顔をした青年のことがさっぱりわからなかつた。「あなたはだれ?」とぼくが聞いても、彼は暫くのあいだ応えてくれなかつた。ただ邪魔にもならなかつたので、ぼくは彼をそのままぼくのドアの内側にほうつておいた。

そうしていふと彼はだんだん自分のことをぽつりぽつりと話し始めた。

彼はまず自分の名前を語り、

彼をとりまく人々について語り、

彼自身の思うことを語つた。

そして彼自身の物語について3年もかけて少しづつぼくに話をしてくれた。

ぼくが相変わらずぼくのドアの内側で彼とぼんやりしていると、彼は黙つて立ち上がってそつとドアに手をかけた。

「行くのかい」と僕が言つと、彼は見間違いかもしれないと思うくらいかすかに頷いて、きゅつと帽子を田深に被り、こつこつとくつの音を控えめに立てて歩き出した。

ここからは彼のものがたりなのだ。

問題です

(1)

その時ハロウ・ストームが思ったのは、はたしてどこから首をそ
れに入れるかということだった。シャンティアにうまく縄がかかっ
たところまでは良かったのだが、実際に自分がそこにたどり着く経
路というものがどうしても見つからなかつたのだ。ハロウの体はそ
こにすでにぶら下がつている縄がそうであつたようには軽くもない
し、投げ上げてくれる人もいない。

結構難しいものだな。

かといってナイフで手首やら首やら腹やらを切る気もない。痛そ
うだし血は嫌いだ。考えるだけで貧血を起こしそうになる。そもそも
も手元にナイフがない。

さて、それなら

シャンティアの下、見事な黒々としたグランドピアノ（だが埃は
1センチほど積もつていて）の上に立つてハロウは考えていた。正
面の大きな重い櫻の扉には、先日からのハロウの奇行に何かを感じ
取つたナニーが、外からキッチリと鍵をかけてしまつっていた。軟禁
状態というわけだ。

本当に感心するけど、ナニーはどうしてあんなにカンがいいんだ
ろう。

後はシャンティアのさらに上にある通気孔がわりの丸い天窓と、
かつては貴賓室であったこのだだつぴろい部屋を取り囲むはめ込み
のステンドグラスだけ。

ステンドグラスには昔話の挿絵のような月や太陽、花や獅子や鳥
のモチーフが刻まれている。一番大きい部分には黄色の髪の姫君と
姫君に跪き手を取る騎士の姿がある。
さて。

ハロウはもう一度シャンデリア（とそれにぶら下がる首吊り縄）を見上げ、もう一度回りを見渡すと、ぱたぱたと体についた埃を払つた。きちりと着込んでいた黒いコートが灰色になりそうなほどだつた。グランドピアノを磨いておくべきだったのだ。それでもまだ兄から誕生日にプレゼントしてもらつたシルク・ハットは汚れていない。

吐く息が白くなってきた。これは自主的に暖炉の火を消していたことによる。凍えたくはなかつた。まだ体が温かいうちに。ハロウはグランドピアノに添えられていた（そしてかつて彼の母親がそこに座つてピアノを奏でていた）重い黒檀の椅子を振り上げ、振り下ろした。

(2)

ストライクはその時とても急いでいた。

だが急いでいるといつても油断してはいけない。いつどこから細い鋭い矢が飛んできても不思議ではないのだ。この街もそろそろ出なくてはならない。でもその前に一仕事しなければ。まだもうしばらくは大丈夫だろう。

大通りは夕暮れの薄闇の中活気に満ちていた。あと一週間で新年を迎えるとあって、街には新年の飾りや縁起物のクッキー、魔よけのヒイラギの枝なんかを売り歩く人々とそれらに足を止める人々、あるいは足早に歩き去る人々が溢れていた。忙しそうなトレンドチコートの男。まつげの優雅な獣人の占い娘。親とはぐれて泣いている子供。ころころと太つて買い物袋を胸に抱えたウサギ顔のおばさん。長く白い耳がスカーフからはみ出ている。

その隙間を縫うようにストライクは歩いていた。遅くもなく早くもなく、誰からも注目されないように。

と、その時前方に一人の男が見えた。こちらに向かつて歩いてく

る。

いかにもひょろひょろと歩いている。背が高いので余計にふらふらとして見える。これからパーティにでも行くみたいにシルク・ハットを被つている。あとは黒尽くめだ。何か考え方でもしているみたいに目深に帽子を被つた上に俯いている。

ストライクはきゅっと紺色のフード付きのマントを引き締めると、その変な男に軽くぶつかった。

「すみません！」

あくまでも自然に謝罪してそのまま直進する。あくまでも歩調を変えない。

男はぶつかられたことさえ気がつかない様子でそのまま歩いて行つた。

鈍い！

笑いを押し殺して小さな路地に入ると、ストライクは自分の手に残つたものを取り出した。

結構入っているな。

・・・・・結構ビビりじゃない。

ちょっと信じられないくらい入つている。

紙幣をいちにいさんと数えているとあたりが騒がしくなった。でもストライクには関係ない。100パーセントあの男は自分が俺に財布をすられたことに気がついていない。気がつくにはもう暫くかかるはずだ。だから今ここで起きている騒ぎにはとりあえず自分は関わらなくてもいい。

さて、金だけ頂いてこの財布を早く川かどこかに捨ててしまわないと顔を上げようとした瞬間、ストライクは路地から少しばかり広い通りに引き摺り出された。

「こいつだっ！」

掴まれた手首が痛かった。見ると大きな黒い猫の手がツメを出して自分の手首を掴んでいる。その黒い手の主を見ると、やはり黒猫

顔の獣人の青年？で（獣人の年齢は人間からはわかりにくい）、その黒猫はもう片方の手でさつきの黒い服でシルクハットの変な男を捕まえていた。

「どうやら見つかったらしい。」

おまけにちょうど掴まれたその手に今まさにその黒服男の財布まで持っているのだ。ストライクはいろいろと諦めてため息をついた。やっぱり俺にはこんな大金縁がないのかあ。

「わかったよ・・・うつせえな。返せばいんだろ？」

とつとと次の街に行つておきやあよかつたよな。

財布を黒服の男につき返しても、男はなんだかぼんやりしていた。記憶喪失にでもなつたみたいに不思議そうに財布を見て、ゆっくりと手を伸ばした。苦労してなさそうな細い綺麗な指だった。ストライクにはなんとなく癪に障つた。

「もういいだろ。じやーな」

黒猫から手を振り切つて走る。なんだよ。持つてるやつからもらつて何が悪いんだ。あんな・・・のほほんと生きてる金持ちのボンボンから取つて何が悪いんだ。・・・・悪いことなんかわかってるよ。でも俺は

かなり滅茶苦茶に走つていた。気がつくと街のはずれの森の近くまで来ていた。ちょうどいい。このままこの森を抜けて隣の街まで行つてしまおう。

日はすでに落ちていて、森の中はぞつとするほど暗かつた。街の明かりが見えなくなるとあたりは真の闇に包まれ、さすがにストライクは進むのをやめた。焚き火を始めても食べるものも飲むものもない。少しくらい何か揃えられるだろうと思っていたのに、あの黒い服の男と黒猫面の青年のおかげで、本当に体一つで逃げる羽目になってしまった。

死にはしないけども・・・

森の中は静か過ぎる。冬だからのかふくろうさえも鳴かない。

雪の中にいるふくろうの絵を見たような気がするのに、冬はほんとうはふくろうどこかに行ってしまっているのだろうか。マントを体にしっかりと巻きつけても、寒氣はじわじわと染み込んで来る。寒さにあまり気をとられないうに、ストライクは耳を澄ますことに集中した。

枝が風に煽られざわざわと揺れている。風の冷たさを思つとその風に吹かれているわけでもないのに体がすくんだ。パキ、ポキと軽い音が混ざる。風で枝が折れているのだろうか。まだ木にしがみ付いていた葉が落ちる音だろうか。

ちがう。何かが近づいてきている

ストライクはそれに気がついた瞬間に飛び起きて焚き火を踏み消した。あたりは真っ暗の闇に戻る。

まだそんなに近くには来ていはないはずだ・・・・。
でもストライクは油断するわけにはいかなかつた。この暗闇の中でもあるいは細い矢が過たず飛んでくるかもしれないのだ。そうであつても不思議ではないのだ。

音のしたほうとは逆の方向に手探りで数メートル移動し、もう一度耳を澄ました。人の話声がする。「ここから邊だな」

どこかで聞いたことのある声だと思った。

タン と何かが地を蹴る音がした。

と同時にドカンと自分の頭の上に何か大きなものが落ち、木全体がわっさわっさと揺れた。

「うわっ！」

ストライクが思わず腕で頭を庇うと、その腕にまたツメが食い込んできた。

痛い。

「よ。さつきのスリ師。焚き火消しちゃつたりして無駄だから。

俺夜目が利く生き物。わかる？」

暗闇の中に緑色の大きな目がきらきらと光つて見えた。

(3)

3人はとても狭くて薄暗くてじめじめしていてやかましい酒場に腰を下ろした。もう少しマシな場所もありそうだったが、黒服の男が「人気のないところ」と言ったので黒猫がここにしたのだ。ほどんど獣人専用の店らしく、人間はストライクと黒服の男しかいない。「人気がない」というわけだ。かわいらしいボメラニアーン顔のウェイタレスが注文を取りにやってきた。

「マタタビビール3つ」黒猫は当然のように言つた。

「で?」

ストライクが不機嫌に口を開くと、なんと驚いたことに黒猫まで「それで?」と男を見上げた。もう何がなんだかわからない。

「それで」

黒服の男はシルク・ハットを取つてそつとひざの上に置いた。口一ト掛けなんていう氣の利いたものはない。

「さつきあなたは僕の財布を取つたわけですよね。すげく上手に。僕はぜんぜん気がつかなかつた。」

(黒猫が「俺が気づいてやつたんだぜ!」と猫背を伸ばした)

「そうだよ。でもその後ちゃんと財布も返したし、あんたも文句付けなかつたじゃないか」

今さら文句を言つたために俺をまた捕まえたのかよ、と、ストライクは最高にイライラしてきた。自分は法律に守られている、財産に守られていると思っている世間知らずは大嫌いだ。身包みはがされて放り出されてしまえよと思う。はがしそこなつたわけだが。

「財布の中身は少ないですか?」「は?」

しかもイヤミか? とんでもございません、たいそうな大金でござ

いましたとでも言えばいいのだろうか。これだから「教養のおありになる金持ちのボンボンなんてものは性根がお腐りになつていらつしやるのだ。

露骨に嫌な顔をしたのがこの人の目を見ない（先ほどから彼は、目の前の木製のテーブルにある木星のクレーターみたいな木のこぶの模様を熱心に見詰めているように見える）黒服の男にもわかつたようで、うつむいて、そのしじうがみたいな、薄い黄色の髪の色しかわからなかつた顔を、少しだけ上げてストライクを見た。

「実は・・・あなたのようないい人でないとお願いできなことがあります。せつかくお知り合いになれたので・・・お話をできればと思って。して・・・」

貧血でぶつ倒れそうな顔をしていた。好意的に見るなら、とても切羽詰つた顔をしていた。

「こちらの黒猫さんに頼んであなたを追いかけてもらつたんです」

黒猫はフンと鼻を鳴らす。

「無論俺だつてタダじゃねーよ。そもそもがスリ師をとつ捕まえてやつて、財布の中身を何割かもりうつもりだつたんだよ。そしたらそこに一ちゃんが『もういちど彼を捕まえてくれな いと払いません』とか言い出しからよ」

「そうでしたね。あなたにもお支払いしないといけない」「そーそー。早くね」

マタタビビールが運ばれてきた。試しに一口飲んでみると意外と口当たりがいい。黒猫はくびくびとうまそうに半分ほど飲んだ。どうやら財布を掏つたことに関しても何かあるのではないからしい。意外なことだが。むしろその技能を認めて何か頼もうとしているのだ。いつたいどれだけ甘ちゃんなんだこのボンボンは。

しかしストライクはこの街にもういるわけにはいかなかつたし、手ぶらで街を出る気もなくなつていた。

もうへまはしない。

「とりあえずその『お願い』の中身を聞いてみねえど。」

黒服の男はまるで熱いカップでも持つみたいに、ビールジョッキを両手で包むよじにして話し始めた。

「ある家にあるあるは「こ」を盗み出して欲しいのです。」「はー?」

「そうです。パンドラ・ボックスというのを「こ」存知でしょうか。最近若い女性の間で流行っている一種の伝言ボックスです」「ああ、あの恋人同士の合言葉がないと箱が開かなくて、入ってる伝言もきけないってヤツか」

黒猫青年がなぜか一緒に聞いている。

「そう。それを一つ盗んで欲しいのです」

「ふーーーん・・・まあ、あのね、相手にもよるし、場所にもよる。もちろんモノによる。あなたが出金額にもよる。わかるよな?」

黒服の男はかすかに頷いた。頷いたんだかなんだかわからないくらいかすかだつた。

「その箱はからくり師のリシュリュー・エウリディクの家にあるはずなんです。隣町に家と工房があり、恐らく家の「こ」かにあると思います。モノはまあパンドラ・ボックスですから・・・15センチほどの立方体でしょうか」

男は泡の消えかけたビールから手を離して空中に四角い形を描いた。

「お出しできるのはその財布全部です。もちろん黒猫さんにお渡しする分を引いてですが。あいにくそれ以上は持ち合わせがないので」

「ぜんぶ?」

男はまたほんのちょっとだけ頷いた。

無表情すぎて冗談なのかどうかもわからない顔をしていた。

「この男は目が灰色だなあ、とストライクはその時気がついた。

(4)

3人は夜の森をひたひたと歩いていた。黒猫が小さなランプを片手に持つて先導する。なんだか知らないけどこの猫は付いてくることに決めたらしい。黒服の男は左手に小さめのトランクを持って、まるで喪中みたいに俯いて黙々と従つている。トランクは凝つたつくりでゼンマイや歯車が見え、どこから開けるものなのかよくわからぬ。

ストライクはさらにその後ろからついて歩いていた。

見ず知らずの俺みたいなやつに（自分に危害を加えたスリ師に）いきなり大金をかけて頼み」とをするなんて、よほど困っているのか、あるいはただの道楽なのか、本物のバカなのか

「それにして、あんた困らないのか？有り金全部つて、その後はどうするんだ？他にアテがあるとか？」

ストライクはかまをかけるつもりで声を掛けたみた。

だつてもしトランクの中身も金目のものだつたら、それはそれで考えなければならない。

「無いですね。何も。一つあるけれど、それはパンドラ・ボックスが手に入つたらのことです」

「でも、金がないと生きていけないんだぜ。本当は何かあるんだろう？」

「こいつももつと叩けるに違いないと踏んでストライクがたたみかけると、男は実にあつさりと

「お金がないと生きていけないかもせんが、僕はそれでいいんです」

と言つた。

ストライクにはそれがどうこう意味なんかわからなくて、とりあえず話題を変えることにした。このことについてはまた後で聞き出すことにしよう。

「盗んで欲しいって言う箱とやらは、何かとくべつなもののかい？ 例えば・・・すい宝箱が埋め込んであるとか？ 金でできるとか？」

「とてもとくべつなものです。ただ、金田のものではないんじゃないでしようか？」

「ないんじゃないでしようかつてなんだ。」

「・・・あんた現物を知ってるんじゃないのか？」

「僕も自分で買つたことがないのでどれくらいするものなのかわからりませんが露天やおもちゃやさんなんかで買えるものだと思つので・・・」

「ま、小遣いで買えるくらいだよ。14・5歳の女の子が好き好んで買うようなもんだ。普通のパンドラ・ボックスならね」

黒猫が口をはさんだ。

「はつきり言つてしまえば子供のおもちゃつてこいつた。友達同士の間でひみつの伝言を传えたり小物を入れてやつたりするためのな。鍵つきのおもちゃ箱つてとこか」

「つまり、ただのおもちゃを一個盗んでほしいってことかよ？」

ストライクの声が暗い森に風船が割れた音みたいにはつきり響いた。

近くにいた鳥があつと飛び立つた。黒猫の青年がきゅっと耳を伏せた。

「わうにうことですね」

男はストライクの方を見ようともしないで言つた。
本気なのかよ？ なんだつていうんだ？

「でもよ黒服の兄さん、あんたその『子供のおもちゃ』に大金を払おうとしてるんだろ？ それに俺が言えたことじゃないけど泥棒つて

言つのは、警官に下手すると捕まつちゃうからこのことなんだ。何があるんだろう?」

たとえばその箱に入つてゐる「ひみつの伝言」とやらがすごいものだとか。でかいダイヤモンドが入つてるとか。宝の地図が入つてたつて構わない。

「なあ?」「

黒服の男は応えなかつた。

(5)

「どうする?」

黒猫がひたひたと歩きながら緑色の田をこちらに向けた。
夜はとつぱりと更けてもう真夜中のはずだ。

「ちょっと休もう」

音を上げたのはストライクだった。寒かつたのだ。

ストライクが乾いた木を集めて火をつけるのを、猫と黒服の男はただ眺めていた。黒猫は自前の毛皮を着てゐるし暗くても困らないからだろうが、黒服のほうはたぶん不慣れで何をしたらいいかわからないのだろう。

火が安定してちらちらと燃え出ると、3人はそつと周りを囲んだ。ストライクも少しからだが暖まつてきてほつと息をついた。

変な眺めだ。

改めてそう思つた。

どうして俺はこんなとこでこんなことをしているのだろう。

ほんとうは、その男の「お願い」とやらを聞いてやつた振りをして、どこかで財布を掏り取つて逃げるつもりだつた。ところがその「お願い」とやらの報酬がその財布だという。

どうしようか？

まだ何かありやうなんだ。でもここまでで逃げておけよ、と、スリ師のカンみたいなものがつぶやいている。じつに開わるとぐくなことにならないぞ。

どうこうわけか猫までついているんだ。財布をすらせてもくれないだらうし、殴り倒してかつぱらうみたいな強盗みたいな真似は嫌だ。もうそれとの変なパーティを抜けてどつかの街に潜りこんだほうがいい。

とはいつもの、田の前にだいぶ入った財布がぶらぶらしている。「お願い」を聞いてやれば平和に金が手に入るかも知れないうまく盗めれば。

じつに開わるところにならないぞ。

なぜか嫌な予感がする。

ストライクは黒服の方を見た。

黒服の男はトランクに手を伸ばすと、あちこちのボタンを押し、ツマミをひねり、ゼンマイを回してこんなこと側面を呂く。次の瞬間トランクはまるでアコードィオンみたいにぱりぱりと上下に開いた。開いたすきまからチヨコレートや飴玉が転がり落ちて散らばる。

ハトでも出でくるんじゃないかな？

男が首をかしげながらさらにネジをぐるぐると回すと、トランクのしきりのようなものがぱたぱたと回転して折りたたみの傘が出てきた。

「どうに行つてしまつたのかな」

せりに別のところにつっていたネジを回すと今度は長靴がぼとり

と落ちた。あんな薄っぺらいトランクによく入っていたなと感心していると、おたまだの小瓶だと一緒に毛布があふれ出た。

「あ、やっぱり入つてました」

男はその毛布をストライクに手渡した。

「え？」

「寒そうですから」

ストライクは返す言葉もなくそれを肩にかけた。

それを見ていた黒猫が言つ

「あんた手品師？」

「ぜんぜん。これはこのトランクの仕掛けなんです。あるからくり師の人がこういう手品を見て、仕掛けを考えて、試作品を僕にくれたんです。まだ使い慣れなくて・・・」

黒服の男は毛布が出てきたときに一緒に地面に落ちた干しふじの袋を拾い上げて

「食べます？」

と言つたので、3人で火を囲んで干しふじを黙々と食べた。

ますます光景がおかしい

ストライクはなんだかもうどうでもよくなつてきた。

(6)

ひとの気配にストライクがはつと目を覚ますと、黒猫が小さくなつてしまつた火に枝を入れているところだつた。

なんだかとてもよく眠つた気がする。

黒猫の後ろに、木に寄りかかつたままやすやと眠つてゐる黒服

の男が見えた。帽子がちょっと右にずれている。右手は冷たい地面に投げ出され、左手は軽く握られて腹の上に置いてある。

「今こいつを殺して全部持つて行つてもわからないよな

黒猫が低い声でつぶやいた。

「だろ？よく寝てる。誰もいない森の中だ。財布にはたっぷり入ってる。難しいことなんて何もない。だろ？あんた考えただろ？」

さつきまで見てたといい夢の気配が一気に全部ふつ飛んだ。

「考えたのはお前だる。一緒にするなよ」

そこまでは考えてない。

「お前スリ師だろ。追いはぎまで毛う一本じやねえか」

猫の緑の目がガラス玉みたいにきらきら光る。本物のガラス玉みたいだ。

「違うよ。俺は人殺しはしねえ」

「どうだかなあ。二ングンってのはうそつきなんだよ。しねえつつてやるんだよ。

条件さえ整つてりやあいことより悪いことやんのが二ングンなんだよ。

特にあんたみたいに何かわりいことをやって生きてる人間なんてゆるいんだ。わかるか？ゆるいんだよ。」

「うるせえ。しねえつつてんだ」「

なんでこんなクソ猫にからまれなきゃいけねえんだよ。

しかも黒服の男を起こさないようにヒソヒソと喧嘩とかあほらしくて泣きそうだ。

「俺はね、あんたどビール飲んだ時から、あんたはこいつの話をマジメに聞く気なんかねえなと思ったよ。金だけもらえりやいいぜつて顔してたもんな。俺はこのままこの兄ちゃんと一緒に行くぜ。ぜ。前の兄ちゃんのことは殺せても、猫殺せねえだろ。本気で俺ら猫系獣人が戦うなり逃げるなりしたら、人間が敵うもんじゃないなん

てわかつてんだろ?」

「殺したりしねえって言つてゐるじゃねえか」

ぱひぱち、と木がはぜた。

黒服の男は自分のことが話しかわれているなんて全く関係なしに、ほんとうに妙らかに眠つていた。

「わかつたらもう行けよ」

「は?」

「箱取つて来る氣ないんだる。だつたらもうソレアメはないぜ。どつか行けよ」

「取つてくる氣ねえなんて言つてねえだ」

「スリ師にコソ泥の真似ができるわけねえだろが。どつか行けよ」

「できるよ」

「できねえよ」

「できるよ」

「口こてねえでどつか行けよ」

「うつせーよクソ猫が。わかつたよ。そんなんに言つたら取つて来てやるよ。絶対に。」

「言つちまつたな、とストライクは呪つた。俺はどつして頭に血が上りやすいんだろ。」
やれやれだ。

それにして猫に追い払われそくなるなんてね。

(7)

ハロウ・ストームが目を覚ました時、まだ辺りは真っ暗だった。

黒猫とフードのついたマントの男がとても険悪に睨み合っていたので、声を掛けられずにはいる。黒猫がぱっと振り向いて

「もうすぐ街にはつくはずだ」

と言った。

おもむろにフードの男が立ち上がり毛布を投げて寄りしたので、畳んでかばんに元通りにしまっていたら、その間に黒猫とフードの男は焚き火を消して歩き出してしまった。

なんだか機嫌がよくないみたいだ。

「僕はどれくらい眠ってしまったんだよ？」

小さな声でそっと聞いてみると

「ちょっとだよ。30分も寝てたかな」と黒猫が前を向いたまま応えた。

首が痛くなつて指先がとても冷えていた。外で寝るところになると黒猫が前を向いたまま応えた。肩もかちかちに固まつてしまつている。

今頃家では騒ぎになつてゐるのかまだばれてないのか。

まあ、ばれているな。

なんだか家を出たあたりのところからずっと夢を見ているような気がする。

猫の言つたとおり、街にはすぐ着いたので、3人はランプを消してかさこじと目的の家を探した。まだ街にはだれもない。

「お前どこだかわかんねーのかよー」

黒猫がひげを神経質そうにぴくぴくさせながら言つた。

「すみません。ちょっと歩いて来た事がなかつたので・・・」

おまけにこんなに暗いうちに來た事がなかつたので、まるで初めて來た場所みたいに思えた。でものんびりと探している暇はない。

「なんかねーの? どつかの建物の近くにあるとか、見た目がこんな」とか、「

「なんだかたくさんお店が並んでるところの近くにあつたんですが・

・見た目は普通のお店で」

「なんだっけ？何屋の家つった？」

「からくり師です。自宅と工房が同じ敷地にあつて別棟で建つているんです」

反射的に応えると、フードの男はふんふんと2・3度頷いて一直線に大通りを下つていった。あまりの迷いのない足取りに慌てて後を追うと、街灯の中に雑多な家々が現れだした。通りの両側をずらりとあまり背の高くない店が埋めている。

「ここらが職人町。からくり師なんだろう。この辺に住んでるんじゃないかな」

あたりを見回すと確かに見覚えがある。時計屋。宝飾店。古い菓子店。そして小さな教会・・・いつも車はあの教会を左に折れて

「そこを左に」

そこに女性用の洋服屋があつてもつと奥にくつ屋。「そのくつ屋の突き当たりを左です」

すると正面に『からくり細工』の文字。

鉄の柵がウインドウに下りている。あたりまえだけど。夜中だから。いつもは開いている扉もがつちり閉まっている。でも扉をノックするわけにはいかない。

「ここか。裏には回ねえのか？」

「この工房を通過すれば。」

そりやあそだうよ、ヒフードの男は呆れたようにつぶやいた。
「中の様子は知ってるのか？つまり・・・間取りとか人がいるかいないかとか」

「工房には今は誰もいません。工房を抜けると渡り廊下があつて、それを抜けると自宅のほうのエントランスに繋がっています。エントランスの左に客間があつてその手前に階段があつて、あとはよくわかりませんが、ここのご家族が寝室で寝てるんじゃない

でしょつか。階段を上ってすぐの部屋が子供部屋です

「子供部屋がどうしたってんだよ」

「箱がたぶん子供部屋に」

フードの男はちょっと首をかしげて考えるよつねじぐわをした後、気を取り直したみたいにきっと顔を上げて、マントの下から hari がねのようなものを取り出すと、街灯の明かりしかない中鍵穴にそれを差し込んで、器用にかちやりと鍵を開けた。

「お前コソ泥のほうもプロだつたのか」

黒猫が本当に感心したみたいに声を掛けた。

「つるせえ。足音を立てるなよ」

誰もいない真っ暗な店の中に忍び込む。黒猫の後を慎重に追いかける。なにしろ商品や工具がそこらじゅうにあるから、この暗闇の中何かにぶつからないで歩くなんてできない。店をなんとか無事に通り過ぎて渡り廊下を通るともう一枚ドア。街灯すらないのにフードの男は全くの手探りで今度もちゃんと鍵を開けた。

「しつぽ掴みな」

黒猫が小さな声で囁く。ふさふさのしつぽを握ると何かのゲームをしているみたいだ。階段の段差にちょっと足踏みした以外は、おかげで難なく子供部屋にすべり込むことができた。

子供部屋の中はひつそりとしていた。

子供部屋からは通りからは見えなかつた庭が見え、その庭に置いてある天使のかたちの外灯（ハロウは、それが夜9時になるとオルゴールを鳴らしてくるぐるぐると回るのを知っていた）が、カーテンの隙間から白い光をそっと投げ入れていた。その光はとてもささやかだったが、それでも人がその部屋に毎日のように入り、掃除をし、空気を入れ替えているだろうというのがわかつた。テーブルはほこり一つなく光を返し、ベッドは今すぐでも眠れるようにふかふかに整えられていた。でもこの部屋にはベッドにもどこにもだれもい

ない。

「これじゃないか？」

黒猫がそのベッドにつかつかと（とはこゝもの足音は聞こえない）歩み寄り、深い小物入れの付いたベッドボードの奥、人間の目には見えない暗がりから、一つの立方体を取り出した。

「これ

ハロウはそれを手渡されてすぐにスイッチを押そうとしたので、フードの男が手をやつてそれを制止した。

「逃げるのが先だ。窓から行くぞ」

黒猫がそつと窓を開けてそのままひらりと飛び降りる。

無理だ。ハロウが言葉を無くすと、フードの男が軽くハロウの肩を叩いた。

「安心しな。お前にやれとは言わねえよ」

男は心を読んだみたいに低く言い、またマントの中から長いロープを引き出してベッドの足にくへつけ、ハロウにもう一方のはしを手渡した。

「降りろ」

これもまた無理です。

とは言いくつかったので、とつあえずトランクと箱を先に下の猫に受け取つてもうひとつ、ハロウは恐る恐る足を踏み出した。

「下を見るな。ロープにしがみつくな。足を使うんだよ。手の力だけで降りようとする怪我するぜ」

足を使うという意味が全くわからなかつたので、結局するすると手の皮が剥けそうな降り方をした上に、着地と同時にへたりこんでしまつた。

「へたくそ」とそれを見ていた黒猫が言った。

なんとか立ち上がりながら上を見る。フードの男がロープを回収してマントの中に元通りしまい、黒猫がやつたみたいにふわっと飛

び降りてきた。

「同じ人間じゃないみたいだ」

黒猫が追い討ちをかける。でもまったくそのとおりだなあと、ハロウは箱をトランクに入れながら心から関心した。

庭はちょうどフードの男の背丈くらいの塀で囲まれていて、黒猫がひょいと上つて道がある部分を確かめ、フードの男がかがんで踏み台になつてハロウを塀の上に持ち上げてくれた。

「どうもすみません、ありがとうございます」

「うるせえよ。終つてからにしな」

職人町の通りの裏の細い道に出るともう夜が明けかかっていた。

水銀灯の光がそろそろ空の明るさに埋もれようとしている。

「仕事だったな。どちらに行く? とりあえず街から出なきゃだめだ」

「次の街に俺の知り合いがいる。そこに行こう」

黒猫が言いながら次の街に進路を取つて歩き始めた。

「お前スリ師の上にコソ泥もできるなんて、妙な方向に便利なヤツだな」

まだ声を潜めたままで猫が言つと、フードの男は「いろいろあんだよ」と独り言みたいつぶやいた。

ハロウは自分の手にできたまめをちらりと見てみた。ロープにはさんだのか血豆になつていて、とても見た目はよくない。今はじんじんしているけど、時間がたつたらすごく痛くなるんだろうか。前を見ていなかつたのでそのまま思い切り黒猫にぶつかつた。

「あ、ごめんなさい」

でも黒猫はぶつかれたことを全く気にせずに、耳をぴくぴくくるぐると動かしている。しつぽがそれに合わせるみたいにぴつぴつと左右に振れる。

「おいスリ師、何かいるぞ」

フードの男は弾かれたみたいに体を反転させ、次の瞬間風を切るような鋭い音が顔の側を通つた。

「うつ」

と思つたらフードの男は足を押さえてその場に崩れ落ちた。

右の足の太もものあたりに細くて長い棒のよつなものが突き立つてゐる

「・・・やばい。見つかった・・・逃げねえと殺される」

「なん・・・何言つてんだ? おいスリ師」

「逃げよつ。殺されるんだつてば」

フードの男は壁に手を付いてようようと立ち上がる

「おい兄ちゃん、そのスリ師に肩貸してやんな 倭じや体が小さすぎる」

黒猫がハロウの手からトランクをもぎとつて歩き出したので、ハロウは黒猫に言われるままにフードの男の腕を首に回して体を支え、それを追いかけた。

「・・・いやいや、ほんとにマズい・・・な、んでこいつは正面に人影が見えた。こちらに歩いてくる。

黒猫のしつぽが「ぼつ」と太くなつた。

その人影はなんだか見覚えがあつた。マントが風にはためいている。

「その男を置いていけ」

声にはますます聞き覚えがあつた。

「でないとお前らにも怪我をさせなければいけなくなる」

人影はおもむろにマントの中から小型の弓を取り出して、足にくりつけられている筒から矢をつがえた。

そのじぐさが

そしてその顔が

「あいつはマジでやるんだつてー逃げろよー」

ハロウははつと我に返るとなるべくでかい声で叫んだ

「警官の方ー泥棒です! だれか来てくださいーー!」

男は一瞬ひるみ、新聞配達か何かの自転車が通りに踊りこんできたのを見て、身を翻してどこかに消えた。

「よかつた
ハロウが言つと

「よかあねーよ。泥棒は俺たちだ」

黒猫は真剣に困った顔をしてあたりを見回した。

(8)

水はくさくて汚くて最悪だった。

ちようどひざ下くらいの流れは緩やかだけど泡だの油だのが浮いている。しかも一步踏み出すごとに妙にぬるつとしてふかふかとして、何が自分の足の下にあるのか考えたくもない。これが犬系獣人の多い警官をまく唯一の方法なんだ、と猫は言った。

「やつらは暗いところで田が見えねえ。近眼だしな。でも鼻でみてやがるんだよ。だからな、道路をいくら速く走って、いくつ角を曲がつたつてあいつらは追いかけてこれるんだよ。地上を逃げたつてダメだ」

だからつて下水道に潜ることあねえだり、とストライクは思つた。

矢が刺さったままの足は冷たくて自分の足じゃないみたいだ。ズボンがびっしょりと濡れているが、それがこの下水の水でなのか自分の血でなのがわからなかつた。どっちにしろ不衛生なこと極まりない。

黒服の男は文句の一つも言わずに肩を貸してくれていた。でも無事な方の左の足ももう思うように動かない。水が重い。さつきからかちかちと歯が鳴つて仕方がない。震えているのだ。

そんなに寒いかな

わからない。彼が追いかけてきていそだから震えているのかも

しれないし、本当に単純に寒いのかもしない。全然わからない。
それでもまさかこんなことに巻き込まれてる最中に見つかる
なんてね。

「おい、大丈夫か？」

黒猫が顔を覗き込んでくる。

頼む。前に立たないでくれ。立ち止まるのがおっくうなんだ。

「・・・だいじょうぶ・・・す、進んでくれ。はやく」

口がうまくまわらない。歯の根が合わない。

右の足だけどくんどくんと言っている。ここだけ火がついてるみたいだ。出血はだいぶひどいんだろうか。

肩が潰れて死んだやつを知っている。傷自体は死ぬほどじやなかつたのに、血が出すぎて死んだ。顔色が石膏みたいに白くなつてた。死ぬ前は指先がもう死んでた。冷たくて。

黒服の男の肩に回された自分の左手を握りこんでみる。力が入らなくて指が少し動いただけだった。でもまだ手のひらがほんの少し温かいのがわかつた。まだたぶんだいじょうぶ。
だいじょうぶだいじょうぶ。

自分がどこを歩いているのかふつと忘れた。かたんと体が崩れるたびに男が体を立て、猫が顔を引っぱたいてきた。
出たら顔が引っかき傷だらけじゃねえか。
出られたらだけど。

「・・・だから・・・れ・・・」

黒猫が何か言っている。よく聞き取れない。
だいじょうぶ。だいじょうぶだよレイン。
なんとかやつていけるよ。

「大丈夫？」

「だ・・・いじょぶ・・・」

全然大丈夫じゃないけど。

「レイ・・・ン」

寒いね。雨が降ってるんだ

ぼくたちもう死んじゃうのかなあ

だいじょうぶ、待つてトレイン

だいじょうぶだよ

「しつかりしろよー！」

猫パンチが来て我に返った。さすがに痛かった。これは確実に流血している。顔も。視線がぐらぐらしている。遠近感がおかしくなっている。地面が動いているみたいだ。ストライクはちょっと頭を振つて焦點を合わせた。

「あの・・・こんな時にこうこうことを伺うのは大変恐縮なんですが」

「んだよ・・・」

黒服の男が前にじりじりと進みながら言つた。

「こういう時つて痛みを感じないって本当ですか？」

「痛えよー！」

「こいつ一回死ねよ

と思つたけど、そこまでだつた。

「われものではありません

(1)

温かい手が前髪をかきあげ、額を覆ったのを感じて目を開けると、
「目を覚ましたのね」

と柔らかくささやくような声が聞こえた。
額に置かれた手には白く細い腕が続き、半そでの白い服がさらに
その先に見える。淡い金色の髪がボーネテールに結い上げられてい
る。白い肌にピンク色の唇が瑞々しい。大きくて優しげな緑の目が
見えた。かわいい。なんでこんな美女がいきなりいるんだろう。慌
てて起き上がろうとして、そつと肩を抑えられ、何か液体の入った
吸い口を差し出された。

「まだ動かないで。ゆっくり飲んでくださいね。おいしいから」
口に運ばれるままに飲み込む。甘酸っぱい。本当においしい。
ストライクが思わず喰らいつくみたいに全部飲んでしまうと、女
性はくすくすと笑つて
「お代わりを持ってきますね」

と言つて、甘い匂いを残して手すりの向こうに消えた。そ
こに階段があるらしい。

白衣の天使というヤツか。

とは言うものの病院という雰囲気ではない。部屋の隅には木箱が
いくつか積み上げられていて、天井には梁が見えた。屋根裏部屋ら
しい。でも大きな窓からはこれでもかと光が入り、部屋は明るくて
清潔で暖かかった。

どうなつたんだこれ？

ストーブにはやかんが乗せられ、こんこんと湯気を吐き続け、自
分は白いシャツを着せられて、手編みらしい毛糸のブランケットに
包まれていた。呆然としていると階下から話し声が近づいてきた。

「犬のおまわりさんに追い掛け回されたってワケだな」「まあそういうことだな」

やがて黒猫と一緒に、ワイン色に近いくらい赤い髪をモップみたいに伸ばした、目が空みたいに青い若い男が顔を出した。ちょっとキツネっぽいが男前だ。液体の入った吸い口を持っている。

「さつきの美人じゃなくて残念でした」

赤毛の男はにこにこと吸い口を差し出しながら言った。猫は木箱を足で蹴つて運んでくるとそれに腰を下ろした。今度の液体はまだ温かくて、からだに一気にしみこんで来る。

「俺の知り合いの家だよ」と黒猫が言い、

「チップの雇い主のルーってんだ」と男が続けた。

「チップ？」

「言つてなかつたな。俺はチップ。この人間がルー。そんでさつきここにいた女の子がスウ」

そしてさらに階下からぞうぞろと人が上つてきた。黒服の男（でも今はシルク・ハットもかぶつていなし、白地に灰色のストラップが薄く入つたシャツを着ている）とさつきの美女だった。美女はお茶のカップを5客とティ・ポットとクッキーをお盆に載せていた。

「せつかくだからお茶にしましょう。ルー、テーブルを出してくれる？」

部屋の隅に折りたたまれていた木製のテーブルを、黒猫のチップと赤毛のルーが行儀よく出す。

「椅子は適当にその辺の箱に座つてくれよ」

チップが木箱を蹴りだして黒服の男が受け取り、テーブルに添えると美女に先に座らせてやつた。

「あらどうもありがとう」

午後のいっぱいの日差しの中で行われるそれはまるでしあわせな寸劇のようだった。
どうなつてんだこれ。

「クッキー食べられる？あなた、足の怪我は大丈夫だけど、栄養失調と寝不足と貧血ですってお医者様が」

スウというらしい美女は、ベッドのサイドボードに、紅茶の入ったカップとクッキーを少し取り分けて置いてくれた。「砂糖入れる？」

「そういえば足は、とブランケットをめくつてみたら、トランクス一枚しか下につけていなくて顔から火が出そうになつた。足には包帯が巻かれ、少しだけ血が滲んでいた。

「迷惑を掛けたみたいで・・・」

やつとそれだけ言うと、ルーが「いつものことだから」と言った。

「こいつはいつも人間拾つて来るんだよ。昨日も朝っぱらから、裏口ガンガン叩いてな。しかも全員ドブ水でどろどろ」

「ルーだつていつも面白がってるじゃねえか。トントンだり

「チップちゃん、マタタビパウダー入れる？」

「入れる」

黒猫はスウから小瓶を受け取ると、茶色っぽい粉を紅茶とクッキーにぱらぱらと振りかけた。

「んあんたらは一体誰なんだ？」

黒服の男が話し出す様子が全くないので（全然聞こえなかつたみたいに彼は紅茶を飲んでいた）ストライクはしうがなく話した。

「俺はストライクって言つんだ。今はスリ師。昔は泥棒もやつてた」

「・・・・・」

「それで終わり？」

「終わり

いかにも不満だという風にチップがしつぽを大きく左右に振る。

「あの弓野朗は？」

「知り合い

「知り合いが殺しに來るのかよおめーは」

「いろいろあるんだよ」

紅茶を一口飲んでやつとひげが伸びかけていることに気が付いた。担ぎ込まれたのが昨日の朝なら丸一日以上寝ていたことになる。

「ま、いいじゃねえかチップ。しゃべりたくないんならさ。そっちのお兄ちゃんは？」

黒服の男は水を向けられてやつと少し顔を上げた。

「僕はハロウ・ストームという者です」

「…………」

ハロウという男は、これで話は終つたと言わんばかりに、またティ・カップを口に運んだ。

「あら？ そのお名前聞いたことがあるわ……お仕事は？」

スウが遠慮がちに尋ねると、ハロウは難しい顔をしてもう一口紅茶を飲んだ。でもルーはそれを聞いてまたにこにこ笑い出した。

「詩人のハロウ・ストーム。あんた今日の新聞に載ってるぜ。『新進気鋭の詩人ハロウ・ストーム、自宅より忽然と姿を消す』って。こんなところで何してるんだ？」

「どうしても手に入れたいものがあつたので」

新聞記事によると失踪中のハロウ・ストームはもじもじと答えた。チップが助け舟を出した。

「あの箱か？」

「箱？」

「そう。この兄ちゃんがそつちの元泥棒に頼んで人んちに盗みに入つて持つてきた箱があるんだよ」

ハロウは無表情のまま本当にかすかに頷いた。

ストライクはとりあえずクッキーを全部食べた。

(2)

箱のスイッチは緑色で、まるでつま先をあてたみたいな銀色の立方体に控えめに付いていた。

「俺はパンドラ・ボックスと言つたらもうど『ゴテゴテ』してるもんだと思つてた」

とチップが言つた。

スウも頷いている。「かなりシンプルね」

ハロウが少し逡巡した後スイッチに触ると、パンドラ・ボックスは一瞬全体を白く光らせ、「パスワードをどうぞ」と機械的な女の声で言つた。

「…………」

「…………」

「…………は？」

「わかりません」

「そこは隠さなくていいだろお？」

「はつきりと聞かなかつたので……たぶんこいつパスだらうな、とこいつもしかわからんないです」

暫くするとパンドラ・ボックスは怒ったように赤く一瞬光り、「パスワードエラー」と言つて沈黙した。

「それがお前の欲しかつたもの？」

ストライクが呆れて言つと、ハロウは真顔で「そうです」と言つた。

「あら。もう少しでお店の時間だわ。片付けてくるね

スウがティ・カツプやポットや、ほとんどストライクが空にしたクッキーの小鉢やらを持って階下に下つてしまい、チップは猫らしくうまく木箱の上で丸くなつた。すぐに寝息を立て始める。ルーはとても優しくチップの頬を撫でた。

「スリ師で泥棒だつて。珍しいな。こいつはそういう人は連れてこなかつたんだよ。そつちのお兄さんみたいなのはっかりだつたんだ」

「金持ちしか連れてこなかつたのか？」

ストライクが慄然として言つと、ルーはまあそつかもな、と笑つて言つた。

「スレでない人間が好きなんだなこいつ。そういうイキモノって人間の中にしかいないつて前に言つてた。何もできなくてお人よしで世間知らずで頭悪いイキモノが人間の中にはいる、それでも生きてる、スゲー！つて」

「それって人間つてバカだつて言つてね？」

ストライクも笑つてしまつたが、ハロウだけ微妙な顔をしてチップを見ていた。

「弱くても生きていけるのは人間だけだつて。だからそういう人間を見ると感動するんだと」

「ふうん」

「これ見てみな」

ルーが眠るチップのあごに指先を突つ込んだ。よく見るとチップの首に、ふさふさの真っ黒な毛に埋もれるようにして、これまたふさふさのベルベットの真っ黒な首輪が巻かれていた。今までチップが首輪をつけることなんて全然気が付かなかつた。ルーがちよつとそれをずらすと、首輪の下はすっかり禿げ上がつて、ピンク色の柔らかそうな皮膚が露出していた。

「この首輪・・・外した方がいいんじゃねえの？禿げちまつてるぜ」

「ここの首輪は俺が買つてやつたんだ。このハゲ隠しに」

チップがうるさそうに耳をぱたぱたと振つたので、ルーは首輪から手を離した。

「俺んちにこいつが転がり込んできた時もうこうなつてた。いろいろあつてそう思うようになつたんだろ。詩人の兄さん、氣を悪くしないでくれよ。こいつは別に馬鹿にしてるわけじゃないんだ」

ハロウは眠つているチップをじつと灰色の瞳で見ていた。相変わらず何を思つているのかわからないような無表情だったが、どういうわけか悲しそうに見えなくもなかつた。

「雪がな」

チップは自分のことが話されてるなんて気が付かない風に、ルーの手が頬に触れるたびぴくぴくとひげを動かし、くの字に曲げた腕の中に鼻先をきゅうっと抱き込んだ。

「ある日の朝起きて雪が積もって、もし足跡一つついてないなら、そのままにしておきたいんだーって言つてた。」「俺は喜んで一番最初に足跡をつけるな」

ストライクが言つと、ルーは「どっちの気持ちもわかる」と言つてまた少し笑つた。

(3)

ハロウが1階に下りると、すでにスウが準備を整えて店を開けるところだった。

「ハロウさん。今日は何してもらおうかな」

皿洗いは・・・チップがやるか。料理は私とルーがやるし、配膳は・・・これも私がやるかなあ・・・

健康的に色白でかわいらしこそ女性はハロウの顔を見て暫く考え込んでいた。

昨日の夜もハロウは、昼間はカフェ、夜になるとそれにちょっとお酒も出す、このルーとスウの店を手伝おうと、いろいろやらせてもらつたのだが、皿を洗えばすぐに手をすべらせるし（泡がこんなにすべるものだなんて。）、野菜を切つてと言わればどれくらいの大きさに切るか考え込んでしまうし、これをあの何番のテーブルに運んでと言わても、テーブルに辿り着くまでにどうこうわけかコップからは中身が零れてしまつし、無愛想だと客に絡まれるしで正直何もできなかつたのだ。

「じゃあね、お客様が帰つたテーブルを綺麗にしてくれます？お

皿をそのお盆でここまで運んで、そつちのふきんでテーブルを拭いて、そしてふきんを洗つてね。いい？」

でもそれも今ひとつうまくいかなかつた。

ハロウがきちんと片付けるよりも客の回転が速かつたのだ。

皿をこすりながら降りてきたチップは慌ててテーブルを片付けて、席があくのを待つていた客を座らせた。

「お前、筋金入りの役立たずだな？」

チップが残りものの載つた皿を芸術的に両手に積み上げながら言った。

「でも、お皿も割らなかつたしちゃんとテーブルも拭けてたわよ。ちょっと慣れてないだけよ」

スウがまるで積み木遊びでもしてゐみたいに皿を洗い、ステンレスの檻のようなものに泡の付いた皿を綺麗にしまい、檻にざつとお湯をかけて食器を真っ白に洗い上げながら言つた。

「ま、ちょうどいいや。ストライクにゴハンもつてつてやってくれよ」

ルーが魔法みたいに、目玉焼きをフライパンからレタスとトマトとハンバーグの載つたバンズの上にひよいと載せながら言つた。きゅつと上からバンズを押さえて出来上がり。

「これはあんたが食つて。ストライクにはポタージュが作つてある」この人たちは天才だと思いながらハロウが屋根裏部屋に行こうとしたら、ストライクが階段の手すりにしがみついていた。

「・・・・・トイレ」

肩を貸してトイレに連れて行くとやつと一つ仕事をした気になつた。

ストライクは部屋に戻るとポタージュを一瞬で飲み干し、付け合せのライ麦パンで皿までピカピカにし、「ひとつちー」と言ってハロウのハンバーガーを取つて一口で半分食べた。一口には違ひない。ストライクが箱を開けて見せてほしいと言つので、ハロウは暫くパスワードを考えてみた。考え付く限り唱えてみる。

ひまわり。ゴリの花。クリスマス。天使のランプ。

おひさま。チューーリップ・・・はダメなんだつた。こうして見てみると僕は彼女のこと何も知らない。

オルゴール。あとは何が好きだつただろう。キヤンディ。チョコレート。えーと、ベンジャミンの木が綺麗で好きだと言つていた。オリオン座。星の中で一番好き。でも冬しか見られないから、パパもママもあまり見せてくれないの・・・・・鳥の声が好き。空の青い色が好き。お姉ちゃんからもらった指輪が宝物なの。なんだつたかな、白いスイトピーを持つていつたとき、いいにいだと喜んでいた。

「開かねえな」
「開きませんね」
「なんでお前開けられねえの？」
「それは」

「ハロウ・ストームがここにいるつてほんと？」

突然名前を呼ばれて顔を上げると、オレンジ色の髪の大人っぽい女性と、サングラスを微妙に下にずらした、短い髪が鮮やかな緑色をした黒人の男が部屋を覗き込んでいた。髪が緑で肌が見事にこげ茶色なので、ハロウは「木だ」ととっさに思った。

(4)

その大木みたいな男と（実際体もでかかつた）オレンジの髪の女は、ルーとスウとチップの友人らしかつた。女は白いジャケットに、薄紫色とエメラルドグリーンが複雑に絡んだ色の、膝よりも少し長いスカートを身に付け、かかとのあるくつを履いていた。男の方はカーキ色のコートを着てるので、ますます森の中にいたら溶け込

みそうに見える。女のほうがハロウの横にきちんと背筋を伸ばして立つた。

「私ラ・ベルつていう女性雑誌の編集者をしているの。あなたはあなたの詩集の出版パーティで会い損なったことがあるわよ」

「僕がいかなかつたパーティですね」

ハロウはいつもの無表情のくせにいつもの倍くらい無愛想になつた。

「このニュースは記者に渡していくの？ 警察に渡すべきなの？ それともあなたのお父様に電話するのがいいのかしら」

女編集者はからかつてゐるみたいに楽しそうに笑つて言つた。

「チップも面白いのを拾つてくるようになつたな」

黒人の男は勝手に木箱を転がしてどっかりと上に腰を下ろし、ベッドに半身を起こしているストライクと、その横で箱を手に持つて俯いているハロウを交互に眺めた。

「俺はアルフ。タクシー運転手。この町のことならネズミより詳しいぜ。そっちのうるさいのがキャリー。俺の彼女」

「俺はストライク。拾われた一人だよ」

おう、と言つてアルフと言う男はひょとストライクの手を掴み、ぶんぶんと握手した。手がでかい。

「あんた結構有名人だつたのか」と、ストライクが箱しか見なくなつてしまつたハロウに声を掛けると、ハロウはかなり考え込んだ様子で「僕が有名なのではないです」と言つた。

「そちらのキャリーさんはご存知だと思いますが、僕が詩集を出したのは僕の父が出版社に無理に出させたというのが本当のところで、僕は本当なら、いなくなつたくらいで新聞に載つたりしない人間です」

キャリーは苦笑いして名刺をハロウに差し出した。

「ともあれ、キャリエッタ・スワングです。お知り合いになれて光栄です、ハロウ・ストームさん」

ハロウは下を向いたまま目の前に差し出された名刺を受け取り、

暫く眺めていた。

「ちょうど昼間に編集部の子があなたの行方不明事件のことを持っていた矢先だつたから、驚いたわ。あなたの追っかけ記者の人気が、各局に電話をかけまくつてるらしいわよ」

「ウォラ・デイモンが？」

ハロウはその時初めて顔を上げた。

「ええ。かなり必死みたいだつたつて。すごいわね。1作しか出版してないのに、張り付き記者がいるなんて大物ですね。残念ながら私はハロウさんの詩集を拝読していないのでけど」

アルフがあぐびをひとつした。キャリーとハロウの話がつまらなかつたようで、ストライクに話しかけてきたが、ストライクはハロウとキャリーが気になつて仕方なかつた。

もしかして最初に思つていたよりもこいつ金づるなんじやないか？

生返事を返すとアルフは、「堅い話嫌いなんだよー」とブツブツいいながら階下に降りていつた。

「ウォラ・デイモンと連絡を取ることはできますか？」

ハロウが決心したように言つた。

「私は彼女のこと直接は知らないのよ。だから・・・編集の子に連絡してもらうしかないわね。ここにいるつて教えてあげるの？」

「できればここにいることは伏せたいのですが」

キャリーは何度が頷いて、脇に挟んでいた大きめの白いがばんから手帳を取り出すと、何かをさらさらと書き付けた。

「でもね、折り返し電話をもらわないといけないかもしれないから、こここの電話番号はバレると思うわよ。あなたが一番知つてると思うけど、電話番号がばれたら、まあウォラ・デイモンなら、住所割り出して駆けつけてくるかもしれない。すぐに。それでもいい？」

ハロウは目の錯覚かと思う程度に少しだけ頷いた。

「それに、私だつてうちの記事としてすっぱ抜けるもんならそういうのよ。行方不明の詩人ハロウ・ストーム発見！てね。だから悪いけど記者の子には言うわよ。あなたがここにいるからって。その

子が取材に来ることになるかもしれない。それでもいい？」

ハロウはちょっとだけ考えて「お願ひします」と言った。

「でもその前に僕が逃げ出しているかもしませんよ」

キャリーは冗談だと思つたようでははと笑つたが、あの箱を人の家からかつぱらつたことを考へると、ストライクには冗談には聞こえなかつた。しつとした顔してゐるけど前科一犯だぞこいつ。人のこと言えないけど。

アルフがビールを半ダースとスライスしたサラミを持つて戻つてきた。階下からルーの声が聞こえた。（「アルフ！ そいつはピザ用だ」）

「ところでアルフさん」

「なんでしょうハロウさん」

「その髪は地毛ですか？」

アルフは飲みかけたビールの最初の一囗を思い切り鼻に逆流させた。

(5)

やがて電話の音がして、ルーがそれを取つた。

ルーも電話がかかってくるということはキャリーから聞いていたので、恐らくそのキャリーの会社の知り合いだか知らない人だかだろう、と思つて取つたら、電話の相手はものすごく苛々とした調子で「ユージーンと言つものですが、ハロウ・ストームをお願いします」と言つた。

チップに言つて電話ごと屋根裏部屋に持つていつてもらおう、と思つたんだけどコードが短すぎたので、ハロウには2階と1階の間の階段の途中で電話を受けてもらつことにした。

キャリーが会社の子とやらに電話を掛けに行っている間、緑色の髪が地毛でないことを説明すると、ハロウは実に残念そうな顔をした。

「でも草や木は緑色になるのどうして人の髪はならないんでしょうか」

「どうしてでしょうね？」

アルフは確実にハロウを面白がってニヤニヤと調子を合わせていた。

ストライクがサラミを一枚もらって齧っていると、チップがやって来てハロウに電話だと言つた。

「なんかウォラとかなんとか言う人じゃないぜ。ゴージーン?とかなんかそんなかんじ」

「ゴージーン?誰かしら」

キャリーが首をひねるのをよそに、ハロウはすたすたと電話口まで歩いていき、アルフはそれをニヤニヤしたままおっかけ、(たぶん盗み聞きする気だらう)ストライクも釣られてベッドを降り足を引きずりながら階段の手すりから覗き込んでみた。

ハロウは一階の厨房のほうに顔を向け(つまりストライクたちに背を向け)、受話器を右手に持つてじっと見つめていた。(電話機の使い方を知らないんじゃないか、とストライクは少し不安になつた。)

そして無表情のままひとつ深呼吸をすると(ため息だったのかもしれない)、斜め上に顔を上げて耳に当つた。ちゃつかりチップがその横に座つている。

「もしもし」

ハロウは暫くは立つたままで電話を受けていたが、少しするとチップと並んで階段に腰を下ろした。ときどき女の詰問するような高い声が漏れてストライクのところまで届いた。かなり長い間、ハロ

ウはただその相手の言つことを黙つて聞いていた。

後ろから見ていると、ハロウがどんな顔をしていてどんな話をしているのか（されているのか）全くわからない。黄色の髪の後頭部をこちらに向け、肩を落としているのだけが見える。壊れたあやつり人形みたいだった。その人形は糸が切れているから使えないんです。

でもハロウはちゃんと生きた人間だったので、「ところで」と声を出した。

「ところでゴージー、あなたのお母様の名前を教えてくれないか」

「あんたなんか死んでしまえばよかつたのよ」

その声は電話器から出たなんて信じられないくらいでかく、はつきりとストライクにも聞こえた。それに続いて、壊れちゃったんじゃないかと思うべりい破壊的な音を立てて電話が切られた。電話の向こうで相手が受話器を叩きつけたんだろう。

ハロウは無表情のままだった。

(6)

受話器を置くとすぐに次の電話がかかってきたので、そのままハロウがほとんど反射的に出た。

「もしもし、・・・チップさん、izzieでしたでしょうか」

でもチップが店の名前を言つよりも早く、相手がハロウを遮つたようだつた。

「・・・・・ハロウ・ストームは僕です」

それにしてみどりしてみんなハロウをフルネームで呼ぶんだろう？

ハロウはさつき以上にほんやりと話を聞いていたが、今日は3回ばかり丁寧に相槌を打つと、「それでは」と言つて電話を切つた。

平和的な電話であつたらしい。

「さて」

ハロウはチップに向き直つて「電話をどうもありがとうございました」と言い、とつと元の位置に戻つたアルフとキャリーとストライクを尻目に、さつさと上着を着てコートを着てシルク・ハットを被つてトランクに箱をつめ、すつと向き直つた。

「ウォラ・デイモンはこちらに来ると思ひます。僕は彼女と会いたくはないのでお暇致します」

そしてストライクに約束どおり財布ごと手渡した。

「ストライクさん、どうもありがとうございました。あなたに会えて僕は本当に幸運だつたと思います」

ストライクはどういたしましてと言つべきなのかわからなかつた。

「キャリーさんもお手数をお掛けして申し訳ありませんでした」

キャリーは営業的笑顔で「どういたしまして」と言つた。

「アルフさんにも出会えてよかつた。僕はその緑色の髪の毛が好きです」

アルフは腹を抱えて笑いながら「そりやどうも」と言つた。

言つだけ言つたという感じでハロウはまたぐるりと身を返すと、1階に振り向きもせずに降りていつてしまつた。

「本当に逃げるらしいな?」

アルフはまだ半分笑つていた。

「まあいいわ。本人を私が確認したんだから記事にはできるでしょ」
キャリーがビジネスライクに言つた。

これでおしまい。

いや、それでいいんだけど。金ももうたしむしろ言つことない。ストライクは何かひどくむずがゆいような気分だった。それでいいんだけど、何もハロウのことについて半端じゃないか。

箱も開かなかつた。なんであんな箱がほしいのかもわからなかつた。さつきのものすごい電話はありや何だよ。くそボンボンめ。

まあいいけど。どうでも。

「ま、なんかの縁だからその辺まで車出してやるよ。外は寒いしもう暗いしな」

アルフが階下に下つていくとキャリーとストライクは一人きりになつてしまつた。話すことがないので、ストーブにかけてあるやかんが蒸気を上げる音がやけに耳についた。もう中の水はあらかた蒸発しているらしい。

「あの・・・ハロウってそんなに有名なやつだったのか」「すつごく有名なのよ」

「詩人で? そんなになんつーの・・・すげえの?」

キャリーは言いようのない苦笑いをした。

「詩はね・・・んー、私も読んだことないからなんだかんだ言えないんだけど、詩の中身の方はあんまり有名じやないのよ。有名なのは本人もちょっと言つてたけど、お父様ね。知らないかしら、ロメオ・オーギュスト・オルフェリウス・・・・普通の人は知らないかな」

「ぜんぜんしらない、きいたこともない」

「古くから続いている家柄で、貿易会社の社長さんよ。というかもう何やってる人かわからないわね。最初は貿易会社の社長だつたんだけど、今は新聞社も広告会社も劇場経営も飲食店もなんでもやつてるはずよ。つまりどこにでも顔が利く大物なのね。ハロウ・ストームはそのオルフェリウス氏の次男で、オルフェリウス氏の斡旋と宣伝力で詩集を売り上げたのよ」

「すげえ。ひどい。ズルい。汚い。おぼっちゃまめ

「・・・そうなの。そんな風にやつぱりね、世間も反応して、暫く各紙面でやりあつてたのよ。親の七光りだつて。本人は全然顔

出さないし、電話でさえ何も話してくれなかつた。ハロウ・ストームの顔を知つてゐる記者なんて、ウォラ・ディモンと今の私くらいじゃないかしさ」

そうだつたのかあ。

でもならなんであんな職人町の、まあ貧乏ではなさうにしちゃう一般的な家の、ただのおもちゃを欲しがつたりしたんだらう。

まあいいや。なんでも。とりあえずハロウとはもう会つこともないんだらう。町でもし見かけたつてそんなボンボンに声を掛けられるもんか。

「ま、関係ないけどな」

その時いきなりがちゃんと大きな音がして、一面が暗闇になつた。

「あつ・・・何？」

キャリーががたんと木箱にぶつかりながら立ち上がる音がした。まさか

「おい！まずいぞキャリー、伏せるんだ」

ばんと窓が開く。冷たい冬の風が小雪と一緒に吹き込んでくる。外の街灯の明かり、家々の明かりが

「何？だれか！アルフ！」

「ストライク、早く来るんだ。お前が暴れなければ何もしない」明かりが黒い影を作つてゐる。

足が

影が一步近づいてくる

足を庇いながらベッドを降りる

暗闇になかなか目が慣れないのにどこに何があるかわからない

「もう片方の足にも射て欲しいのか」

「キャリー、階段だ！速く逃げろ！」

俺は

俺はどうする？

もう一步。

キャリーがほとんど転げるよつに階段を降りていく

足は

大丈夫

動け

近くにあつた何かよくわからないものを掴んで力任せに投げつけると、ストライクは階段の方に走った

「ルー！スウ！来るんじやねえっ」

ストライクはほんとうに階段を転げ落ちた。

アルフが拾い上げるみたいにひょいとストライクを起こし、そのまま横つ腹に抱えて

「ちょ！アルフ！ビヒヒ」

「あんたも面白いやなあ」

ルーがひらひらと手を振つて見せたのが目の隅に映つた。そのまま裏口から外に出るとアルフはストライクを車の後部座席に押し込んだ。ハロウがお行儀よくすでに座っていた。

「おう、待てよ！」

チップまで転がるように走つてきた。

「ストライク、その格好は犯罪だ」

「あ」

チップはストライクの服と、マントと、ベルトにつけていた道具一式を持ってきてくれていた。

「あんたは？彼女なんだろ？キャリーさんて！ルーとスウがやばいし」

「落ち着け落ち着け。あの階段は一階にドアがあつて閉められるんだよ。なんだか知らないけどあの入ってきた変なやつはルーにもスウにもキャリーにも会えねえってこと。賢いヤツなら諦めるね。屋根裏と二階にやなんもねえしな。窓からヤツが飛び出す頃には犬のおまわりさんが來てるって」

言つなりアルフはがんとアクセルを踏んで、雪がうつすらと積もつてゐる夜の街の中に、ハロウとストライクとチップを乗せたまま飛び出した。

「さて。どこに行く? 言つたと思つけど俺はネズミよりこの町の道には詳しいんだぜ。やれやれ。「どうしてまたこのメンツで一緒に逃げなきゃいけないんだ」

ストライクは思わず言つと、「車が1台で済むじゃねーか。なんならもう一人乗せてもいいぜ5人乗りだ」とアルフが言った。

夜に飛ぶ鳥

(1)

ストライクはハロウとチップに挟まれて、ちょうどフロントガラスの真正面にいたので、うつすらと雪の積もった、青い夜の中を、アルフの運転する車が潜り込むように進んでいくのがよくわかつた。雪はガラスに迫つては次々に左右に逸れ、まるで次から次に白い大きな花が

暗闇に溶けていくみたいに見える。チクタクとワイパーが時計のように鳴つている。

「ところでストライク、その足はどうしたんだよ？」

アルフが不意に声を掛けた。

チップから手渡された服を着てみると、なんとアイロンが当たつた上に、スポンの矢が刺さつたはずの穴がきれいに縫つてあつた。スウさんがやつたんだろう。美人な上に器用なのか。ルーが羨ましい。

「刺さつたんだよ。矢が」

「矢？あの弓矢の矢？アーチェリーとかの矢？」

「そう。その矢」

「間違つて的の前でも歩いてたのかよ」

アルフがバックミラーからニヤニヤしていた。くそ。

「なんか変なヤツが出てきてよ、いきなり撃つてきたんだよ」

チップは自分が射られたわけでもないのにブンブン怒りながら言った。

「こいつは知り合いとか言つてたけどさ。セツキルーの店に来たのもそいつなんだろ？一体なんなんだよ」

「ふーん」

ストライクが黙り込むとアルフは下にずれているサングラスにち

よつと触れた。夜なんだしづつとずらしておなら外せばいいのに。

「『』? で矢? ねえ。そいつはアレっぽいな。最近いわゆる裏街道の皆さんが矢で暗殺されてる話」

「なんだそれ?」

「今時さ、『矢でアンサツなんて流行んねえだろー。でもここー、2年かな。ナントカカントカの親玉とか、ウンタラカンタラの若様とか、そーゆー怖いお兄さんたちが矢でポックリ殺されて道に転がるつてのが何件かあつてな。ま、そういう世界じゃ珍しい話じゃないんだろうよ。でもなかなか弓矢使うやついないだろ。だからその『魔弾の射手』は誰のかつてウワサになってるんだ」

「へー、そういうえばそんな事件あつたような気もするな」

「あつたんだよ。キャリーが特集記事組んだよ。なんもわかんなかつたらしいけどな。わかつたのは異様にウデがいい射手だつてことくらい。ぜんぶ一撃必殺だつたらしい。な、ストライク、知り合い?

「知り合い」

フロントガラスのほかの窓はすっかり曇つてしまつていた。ワイヤーの動く音が聞こえる。

「俺を追いかけてくるのはその魔弾の射手だ。降ろしてくれてもいいぜ」

すれ違う車のヘッドライトが車の中をなめるように照らしていく。アルフが方向指示器を付けながら言つた。

「チップは本当に面白いの拾つてくるよつになつたよなあ」「なんでそんなヤツに追われてんだ?」

ストライクは言いたくなかったので黙つていた。全然会話に参加しないハロウを見てみると、ハロウはハロウで箱を一心に見つめて何か考えているようだつた。

「ま、殺されないうちにどうか行くぜ。ビルに行く?」

「どうかのおもちゃ工場に

いきなりハロウがとてもはつきりとした声で言った。

「できればパンドラ・ボックスを作っているような所に。お願ひします」

ストライクは「降ろしてくれ」と言こそびれた。

(2)

おもちゃの工場ねえ、と言つてアルフはちょっと首を回した。

「あるよ。あるけど、なんでそんなところなんだ?なんかあんの?」

「こいつ箱開けたいんだよ」とチップが言つた。

「箱?」

「パンドラ・ボックス。」といつ隣町でかつぱらつてきたんだよ。しかも自分で開けられねーの

「はははは。お坊ちゃまっぽいのに泥棒とは大胆だね。中身入りか。ちょっと見せてみな

ハロウがパンドラ・ボックスをシート「」しに渡すと、アルフは片手できゅっとハンドルを切り、車を脇に寄せて止めた。

「なんかずいぶん何にもなくないか?」

ストライクも覗き込んでみた。確かにその箱には何もない。スイッチが一つだけ。あとはただの、金属のつぎのあたつた銀色の箱だ。

「メーカー名もないぞ。なんだこれ」

アルフがぽちっとスイッチを押す。車の中が一瞬白い光に満たされる。

「パスワードをどうぞ」

「うーん、メーカーがわかればな。どつかおもちゃ屋にでも寄つて聞いてみるか?」

アルフの手の中で箱は赤く光つて黙った。パスワードホール。

「お願いします」

ハロウはとても真剣な顔をしていた。

車は10分もしないうちにわりと大きめのおもちゃ屋に着いた。おもちゃ屋は大きめとはいえ、外からでも十分に、棚にあふれんばかりにあらゆるおもちゃが載っているのが見えた。箱がたくさん並んでいるブースもある。きっとあれがパンドラ・ボックスなんだろう。ぜんぶ。

ストライクは歩くのが面倒だったので、みんなの帰りを車の中で待つことにした。

店員らしい男が見えた。メガネをかけている。アルフと何事か話した後、ハロウのハンドラ・ボックスを手にとつて、つくづく眺めていた。メガネを付けたりはずしたりせわしない。10分ほどもそんなことをしていて、車の中が寒くなってきたころ、3人が戻ってきた。

「すげえよ。メーカー製じゃないよ」

アルフがにやにや笑いながら言つた。

「困ったな」

ハロウがはつきりとため息をついた。よほど期待していたのか。

「まあ、盗みに入った家がからくり師の家だもんな。からくり師が作つたのか・・・」

チップまで残念そうにしている。

「もう壊して無理に開けちまえば?」

「ダメなんだよ。やっぱ、おもちゃなわけじゃん。入ってる記録装置がちゃちいから、開けてる間に壊れて記録は消えちまうだろうつて。まあこれ手作りだとしたらどんな記録装置が入ってるのかわかんないから、もしかしたら大丈夫かもしれないけど」「あのからくり師の家に訪ねていって聞くか。『どうやって開けるんですか』」

チップが言つて力力力と笑つた。

「行つてもたぶん開けてくれないですし、恐らくこれを作つたのはリシュリュー・ハウリディクでしょうが、彼もパスワードをご存知ないと思います」

「開けてくれないつてのはドアを？箱を？」

「両方です」

まあ、盗んだ家に玄関から入りなおして頭下げるつてのは無しだらうよ。

「パスワードを誰か知らないのか？」の箱を開じたヤツはからくり師とは別なんだろ？」

ストライクが聞くと、ハロウは感情が蒸発してしまつたよつこじゅつと無表情になつた。「困つた」も「残念」もなかつた。

「……その人はパスワードそのものは教えてくれませんでした。パスワードは『私のお気に入り』だと」

ひまわり。ゆりの花、キヤンティ、チョコレート。オリオン座。そういうことか。

「『私のお気に入り』って一回言つてみたら？」

チップが言つたので、ハロウはスイッチを押して言つてみた。「

パスワードをどうぞ」

「私のお気に入り」

次の瞬間、

車がふらつと右に大きく揺れたので、ハロウはストライクとチップに潰されることになつた。

「あぶねえあぶねえ」

アルフは運転席から飛び出して車の後ろに走つていつた。誰かを轢きかけたらしい。

箱は赤く光つた。パスワードエラー。

「おい、怪我してねえか？」

ちょうど後部座席の真後ろにいるのでアルフの声はよく聞こえた。

「いや、あのね、俺は怖くないから。な、大丈夫？立てる？」

チップが外に飛び出して行った。「どうしたんだ？」

「こにゃこにゃと二人で話しこんすぐちップは小さな女の子？を助手席に連れて来た。女の子？はその体にしてはでかい袋を抱えてひどく震えている。ハロウがまたえらく面倒な手順を踏んで、アメ玉やら紙ふぶきやらを散乱させながら（「それ片付けろよ」とアルフが釘をさした）毛布を取り出して渡してやつた。

「そのトランク使いにくくな？」

「でもものがたくさん入るんです」

「そうだね。とりあえず紙ふぶきとかを入れておくのをやめりよ。ついでにハロウは出てきたアメ玉を女の子とチップにあげた。チップは「こんなもんいらねーよ子供じやねーんだから」と言いつつぽんと口に放り込んだ。

「急に飛び出してきたもん。轢いちまつかと思つたよ」

女の子は毛布にくるまつてもまだぶるぶると震えていた。すうぐ小さい。人間の子供くらいの大きさしかないチップよりもまだ一回り小さい。何かの獣人の子なんだろう。けど、全然種類がわからなり。

「ネコ？ネズミ？」

「こそつとチップに聞くと、チップも首をひねつた。

「ネコ・・・にしちやあ鼻が長いよな。耳のでかい犬系・・・？でも犬系つて一オイじゃないんだよな・・・」

毛布からちよつと出た耳は赤みがかつた茶色で、ネコの耳のよう

にぴんと三角だった。

「・・・・・・わ、わたし・・・南の教会の・・・かいもの、しないといけなくて」

「南の教会？」

「南の教会？」アルフはもう一度繰り返した。「ここの俺に心当たりがない！」

「ここの、街じゃないの。街のそと、の、コロニーの、きょうかい」

「コロニー？あの辺はもう無人の荒野じゃねーか。スゴいな、そん

な所に住んでるのかい」

「わたしと、牧師さまで、ふたりで住んでるの。前の牧師さまが、死んだから、去年来たの」

「どうする？」

アルフがストライクとハロウに向かつて言った。

「どうでも」とストライクが言うと、ハロウも微妙にうなずいた。

「じゃあ、お穰ちゃん、買い物は終わつたのか？」

うん、と言つて小さな彼女は持つていた袋を大事そうに抱えなおした。

「うん、でもね、暗くなっちゃつて、道、わからなくなつたの」

「じゃあコロニーの教会まで送ろうか。後ろのお兄ちゃんたちは怖い人だけど、俺は優しい一般人だから安心しなさい」

「おめーの外見が一番おかしくせによ」

チップがフンとハナを鳴らした。

(3)

コロニーはチップたちの町から東に10キロほどとのこりにつき捨てられていた。

かつてはドーム状の巨大な居住区だったはずであり、何万人という人間が暮らしていたはずだつたところだ。でもいまはだれもいない。

ドーム（だつたはずの部分）に踏み込むと（車は入れなかつた）、遺跡か豪華な墓場のように見える瓦礫の山が薄く雪を被つていた。ところどころ雪が下から発光している。

「あれは何が光つてるんだ？」

チップが聞くと、女の子は得意げに

「遺跡の、チクコウタイが光つてるのよ！」と言つた。

チク「ウタイってなんだろ?」

「昼の、おひさまの光を溜めて、夜光るものよ」

ストライクもハロウに肩を貸してもらつて、獸道のような、やつと人一人が通れる分だけ瓦礫が避けてある道を、どことこと歩いていた。

アルフに肩を貸してもらおうとしたら身長に差がありすぎたのだ。
「街にはどうやって行つてるの?歩き?」

「そうよ。今田も、お昼から、街にいったの。でも、帰るときは、暗かったの」

こんな小さい体では街までは相当だろ?」

「ぐるま、のつたの一年ぶりなの。楽しかつた!」

「そりやよかつた」

アルフは女の子の買い物袋を持つてやつていた。アルフが持つと買い物袋はあるでアメ玉の袋みたいだつた。

20分ほど歩くと正面にとても大きな教会が浮かび上がつた。チクコウタイとやらが外壁に埋め込まれてゐるらしく、本当に暗闇の中に薄緑色の細かい模様が光つてゐるのだ。

「す」「い

「す」「い」なあ

「綺麗ですね

「でかい」

小さな女の子はとても嬉しそうにふふふふふふ、と声を上げて笑つた。

「きれいでしょ。私も大好きなの。牧師さまが、いるはずだから、みんな、あがつていつて」

教会の中は見た目ほど荘厳とは思えなかつた。

外と同じくらい寒い。それに暗い。

「おかしいわ? 牧師さまが、いるはずなのに」

女の子がたたたと奥に走つていつた。何かにぶつかつて転ぶ音が

した。

「いたた・・・」

「明かりつけやろうか。マッチは?」チップが見かねて声を掛けた。

「右奥に、どびら、見える?」

「見えるよ。」

「その、どびらの、横の、棚のなか」

チップがまずその奥の扉の横のランプに火を灯した。小さな劇場みたいな、でかい教室みたいな部屋だった。正面はひらけていて、突き当りが舞台のように一段高く、両側に背の高い燭台が左右対称に置かれている。そしてその舞台までまっすぐに続く道の左右に、長く質素な机とベンチが何列も並んでいた。

天井が高い。上には何か装飾が施されているようだが、そこまで蠅燭の明かりは届かなかつた。女の子はいつしじうけんめい走つて奥のドアに辿り着き、

「じつちよ」とアルフたちを促した。

ドアの向こうは短い廊下になつており、女の子はすぐ左の部屋に入つた。

あの舞台のようなところの真裏だな、とストライクは思った。
その部屋は実に生活感あふれるこじんまりとした部屋だった。でもその部屋の壁には大きなタペストリーがかけられ、それもまた薄緑色に発光していた。六芒星が円に囲まれ、さらにそれを見たこともない文字が複雑に絡んで取り巻いている。女の子はその光を頼りに今度は自分で明かりを付けた。

部屋に手作りらしい小さな暖炉があつて、そこにも火を入れる。

「さむい、ね。牧師さま、どこに、いつちゃつたのかな」

チップが勝手にそこにあつたソファに座ると、女の子はよちよちとその横に腰を下ろし、チップの尻尾に埋もれた。

「あつたかーい」

チップも全く気にしない様子でソファにころりと転がつた。すぐ

に眠つてしまいそうな勢いだ。ハロウはストライクを、近くのふかふかとしたクッションが置いてあるいすに、こわれものみたいにそつと下ろした。

「すまねえ」

「牧師さまとやらは留守かあ」

「そうみたい。どうしたのかしら」

「アルフ、お前明日も仕事だろ。それに」

「それに？」

チップが伸びをしながら言つたので、まるで寝言のよう聞こえた。

「キヤリーとかほつたらかしはまずいんじゃね？さすがに。」

「そういえばそつかもね」

「まあ、お前は帰れよ。牧師さんが来たら『縁の頭の変なヤツがこのお嬢さんをひき殺そうとしたので保護しました』ってちゃんと言つておくよ」

「お前はどうするんだよ？あとストライクもハロウもビリする？戻るんなら乗せていくけどまずいかね？」

ハロウは少しだけ首をかしげた。

「だめ。俺は一人でなんとかするから行けよ」

ストライクが言つとアルフとチップが一人そろつてハナで笑つた。
「できるもんならやってみな」

「う・・・」

「まあ、俺は拾つてきた責任者だから残るよ」チップがペロりと右手をなめながら言つた。

「アルフはもう行きな。ルーとスウにヨロシク言つといて」

「まあそうするわ。何かあつたら電話しな。車で来られる範囲なら来てやるよ」

そう言つて、アルフはアルフの名前と電話番号の入つた名刺を人に一枚ずつ配つた。

「名刺なんかもらつたの初めてだ」とストライクが言つと

「5枚くらいやるよ」とアルフが言った。
そして本当にあと5枚くれた。

(4)

足は熱を持つていいようだった。

化膿したら面倒だな、とストライクは思いながら軽く服の上から傷口にふれた。熱い。自分の手がとても冷たい。

「この部屋寒いな」

ストライクが言つと、チップがめんどくさそうに田を開けて、「どうか?」と言つた。「お前は猫だからわからんねーだろうけどさ」マントを羽織つて丸まつてみても寒気は一向に收まらない。ハロウはコートを脱いで箱をいじくりまわしていた。

「ハロウ、寒くねーの?」

暖炉は確かにちゃんと燃えて、部屋は暖まりにくいほど広くはない。むしろ狭い部屋に、一人掛けのソファとロッキングチェアと背もたれのない低いいすと小さなテーブルがぎゅうぎゅうにしまつているという格好だ。ハロウがストライクが体を預けているロッキングチェアに近づいてきて、ふとストライクの額に手を当てた。

スウさんもこんなことをしてくれたな、と、少しストライクは目を細めた。今回は残念なことに相手がハロウだが。

「ストライクさん、熱があるんじゃないですか?」

どうやら面倒なことになつたみたいだ。

ハロウはストライクの返事を待たずに、チップと女子子にソファを開けてもらい、ストライクに肩を貸して寝かせると、毛布とストライクのマントと自分のコートを上にかけた。

「おにいさん、病気なの?」

女子子が心配そうに覗き込んできた。

「そんな大した事じゃねえよ。大げさだ」

とは言つものの、寒い。

「水分を取つた方がいいかもしない。何か頂けますか？」

ハロウが女の子に言つと、女の子は「こっちにきて」と言つてハロウをどこかに連れて行つた。

チップまで寄つてきて、「上に寝てやるつか」と言つた。

「いらない」

さすがに笑つてしまつ。でもチップはすぐ真剣そつだつた。下水道を歩かせた責任を感じているのかもしない。

「あとで包帯替えてやるよ」

「自分でやるよ。それに包帯の替えなんて持つてきてないだろ」チップのしつぽが力なく床に落ちた。なんだかチップがかわいそうになつた。ただの猫みたいだ。思わず頭に手を伸ばすと、チップは黙つて撫でられてくれた。やがてハロウが白いカップを持って女の子と戻つてきた。

「チップの中身は入つたままなんだろうな？」

チップが言うとハロウは

「おかげさまで」と言つて、チップに見えるようになりとお盆を下に下ろした。中身は紅茶だつた。たっぷり入つていて。

ストライクがちょっと体を起こすと、ハロウはその熱いカップを手元まで持つてくれた。

体にじんと温かいものが入つてきた。ハロウは背もたれのないすをソファの脇まで引きずつてきて腰を下ろし、また箱をいじくりだした。

「痛いとか、辛いとか、何か欲しいものがあつたら言つて下さい」おぼっちゃまのくせにずいぶん氣を回すじゃないか、とストライクは少し感心した。

その時、廊下を誰かが走つてくる音がした。

「ジロー？」

田を向けると、えらく綺麗な人間が息を弾ませて部屋に走りこんできた。ストライクと同じ黒い髪だが、背中まであるようだ。なん

と、うが輝きが違う。色が白くて田も黒く、金糸で縁取りされた、重そうな濃い紫色の法衣が雪のしづくできらきらしている。まるでつくりものの人形みたいに綺麗だ。

「牧師さま！」

小さな女の子がてててと走つて行つてその足元にしがみついた。「ジョー、心配したのですよ。どこに行つていたのですか

「街に、いったの。そしたら、日が暮れちゃったの」

「そちらの監さんは？」

「あたしを、送つてくれたの」

どうやらこれが女の子の言つていた「牧師さま」らしい。頭のてっぺんがハゲたおっさんを想像していたのでかなり驚いた。

「そうでしたか。どうもありがとうございます。私はイグナシオ。この教会で神にお仕えしているものです。ジョーがお世話になりました」

そしてこいつと笑つた。まるで彫刻だ。絵だ。

熱が高くて冷静に見えてねえのかも

「そちらの方は具合がお悪いようですが？」

牧師はストライクに近づいて屈みこむと、ストライクの頬にそつと触れた。

髪がさらさらとストライクのあいをくすぐつていいく。

「熱があるりのようですね」

間近で見てもやはり綺麗だった。ぜんぜん見間違いじゃない。むしろ肌のきめ細かさだと

まづげの長さだと今まで見えた。世の中にほんのがいるのかよ。

チップは、牧師とハロウとストライクを順番に見て、

「同じ人間とは思えない」とつぶやいた。

イグナシオは、ストライクの具合がよくないと見て、すぐに女の子（ジョーという子だつたらしい）と一緒にベッドを作りに行ってしまった。

「昔はかなり大規模な教会で、牧師もたくさんおりましたので、部屋はたくさんあるのです」

ハロウにはなんだか甘える気もなかつたというか、箱を手に入れからその先のことを全く考えていなかつたので、不思議な気持ちがした。そもそもこの箱が開かないなんて思つていなかつた。確かにヒントはあいまいだつたけど、きっとその箱を目の前にすれば、なんとなくわかるんじやないかと思つていたのだ。

ぜんぜんわからなかつた。

僕はきみと一緒にいて一体何を聞いて何を見ていたんだろう。ストライクがハロウの横でぼんやりとしていた。

「眠いですか？」

「だるい」

何かお話でもしましょうかと言つと、ストライクはははと笑つた。「どいつもこいつも何考えてんだよ」

でもそう言いながらもストライクの前髪は汗で湿り、顔は赤くて苦しそうだった。

辛そう。

ハロウはストライクの顔をきちんとはじめて見た。三日間も一緒にいたのになんだか全然わからなかつた。ずっと夢の中にいる。

ストライクは熱のせいかもしれないけどえらく幼く見えた。

もしかして17・8くらいかもしない。それでもしっかりして。僕なんかよりずっとしっかりして。

「まだ寒いですか？」

ストライクはちょっとだけ頭を横に振った。

「頭痛くありませんか？」

「だいじょうぶ」

あの子もよく熱を出していた。

最初の頃は熱が出たからと言わると、今日のお見舞いはまた今度、ということになつたけど、だんだん熱が出ても、ちょっと具合が悪くても点滴の管がついていても、僕にそのままお見舞いを許してくれるようになつた。

「なあ」

ストライクが真っ黒な目でハロウを見上げた。

「なんでそんな親切なの？」

「親切かな」

僕は親切じやないよ。

「親切なんでしょうか」

チップはロッキング・チェアの上で丸くなつていた。寝ているのかどうかはわからない。

「なんかいろいろしてくれてるだろ。紅茶とか。寝かしてくれたり」箱を手にとつてスイッチを押してみる。「パスワードをどうぞ」女の声が響く。

やつぱりわからない。

何も思いつかないまま赤い光がもうおしまいだと言つ。

「半年前まで、病人の女の子のところによく行つてたから」

もう何もかもおしまいです。あなたは何一つわかつていな

「それだけです。慣れてるだけ」

「最近は行つてないのか？」

「もう行きません」

はやくイグナシオとジョーが帰つてくれればいいのに

「どうして？」

どうして来れなかつたの、ハロウ・ストーム

「……………」

ハロウがストライクから田をそらすと、ストライクはまずいことを言つたと思つたらしく、「ごめん」と言つて背を向けた。

暖炉の薪がはぜる音と、雪が屋根から落ちる軽い音だけが、暫くその狭い部屋の空氣を震わせていた。

「こちらこそ謝らなければいけない。」

僕はこんなところで箱を開けることもできず何をしているんだろう。こんなちゃんとした人たちにいろんなことをやらせて。

そしてドアが場違いに朗らかに開き、天使のような笑顔でイグナシオ・ジヨーが戻つてきて

「ベッドの用意ができましたよ」と言つた。

ハロウがストライクに手を伸ばすと、ストライクはぱつが悪そうにその手を取つた。

「ありがとう」

ハロウが「ありがとうございます」と返すと、ストライクはとても不思議そな顔をした。

(6)

ストライクが目を覚ますと、辺りには誰もおらず、ただ質素な木の枠の窓から光がさんさんと降り注いでいた。ぽたぽたと氷が溶けて流れる音が聞こえる。のどがとても渴いていた。

窓と同じように質素なベッド（少しほこりっぽい）から降りてみると、頭がくらくらしたが、なんとか壁に手を付いて立つと、今度は右の足がぎくりと痛んだ。やれやれ。

部屋は昨日通された暖炉の部屋のもう半分くらいの大きさで、小奇麗な牢屋みたいだつた。檻が付いてないだけだ。

壁を伝つて廊下に出たら、牧師のイグナシオにばつたり出くわして、そのままベッドに連れ戻されてしまったので、仕方なくもう一度寝ることにした。

暫くするとジョーが、コップに一杯の水と着替えを持ってきてくれて、なんとストライクの服を（果敢にも）脱がしにかかったので、さすがにチップがハロウに頼むからと押し止めた。

やれやれ。

今度はチップがやつてきて熱いタオルをくれた。

体を拭き終わつた頃にハロウがやつて来て、足の傷にわけのわからぬなんか青緑色の薬を塗つて包帯を巻きなおしてくれた。

ハロウが出て行つたらイグナシオがオートミールを持つてやって来た。

次から次へとまるでパレードだ。

「今何時？」

まだ熱いオートミールをもぐもぐやりながら聞くと、イグナシオは「飲み込んでからになさい」と牧師くわここと言つた。牧師だけど。

ストライクが渡された着替えは、いかにも牧師が着ていそうな紺色のローブだつた。イグナシオがまるで苦難の聖母みたいな優しい顔をして

「よくお似合こですよ」と言つた。

やれやれ。

「まだ熱がああります。治るまでこじでござりやうなさつてください。部屋は余っていますし、ジョーも私も、このよひなところで退屈しておりましたので」

確かにまだ熱はあるらしかつた。

こんな部屋に一人で閉じ込められていたら、退屈で死んでしまうと思つていたが、いざイグナシオがオートミールの空になつたボウ

ルを持つて部屋を出てしまつと、何も考えられなくなつてすぐにまた眠つてしまつた。まだ口があるうちにもう一度起こそれて水を飲まれ、粥か何かを食べさせられた氣がする。でもだれがそうしてくれたんだろう？イグナシオだったようでもあるし、ハロウだったようにも思えた。誰かの手が額にそつと触れていた。冷たい乾いた手だった。夜になるともつと熱が上がってうまく眠ることもできなくなつた。誰かが明かりのついたランプを持って部屋に入ってきた。苦しくてふつと浮き上がるみたいに目が覚め、何かに引きずり込まれるみたいにまた眠つた。誰かが顔の汗を拭ってくれた。起きるたびに。

明け方、それがハロウだとわかつた。

「ハロウ？」

ハロウはとても驚いたようで、手に持つていた箱をからからと取り落とした。顔色がもう青白くて（明け方の頬りない光のせいかもしない）、ハロウのほうが病人みたいだつた。

まだ辺りがやつと薄明るくなつて來たといふくらいだつたが、ランプの明かりは消えていた。

「おはよう、ストライク」

「おはよう・・・」

「何か飲みますか。イグナシオもジヨーも寝ているので、お湯を沸かしたりはできないけど」

水でいいよ、と言つと、ハロウは水差しからコップに水をついで渡してくれた。冷たい水が気持ちよかつた。

「チップは？」

「彼は夜も昼も関係ないみたいで、2・3時間前に起きて廃墟を見に行きました」

猫だからなあ。

でもハロウはチップと違つて夜行性じゃないはずなので、寝てい

ないのは氣の毒だった。

「寝てないだろ？」

ハロウに言つと、ハロウはとてもそつけなく「氣にしないで下さ
い」と言つた。

「僕には何もできませんから」

「でもさ」

俺は助かったよ、とストライクが言つと、ハロウは窓を少しだけ
開けて空氣を入れた。

空氣は新しく、冷たくてとても攻撃的だった。風の音がひょいと
鳴つて、ハロウは窓を閉めた。

「僕は以前やり損なつたことを今やつてみただけなんです
ぜんぜんあなたのためにやつたのではないのです、ごめんなさい
とハロウは続けた。

やつぱりハロウはとても変なやつだ、とストライクはつづく思
つた。

まだ東の空から太陽の氣配しかなくて、おまけに曇つていたので、
窓際のハロウはモノクロームの写真のように見えた。

(7)

天井には予想通り豪華な細工がなされていた。天使や聖者の白い
彫刻がぐるりと礼拝堂を見下ろし、そのやうに上には創世のものが
たりが遠く描かれている。

「すごい」

ストライクは漸くひとりでも歩くのには困らなくなつた足で礼拝
堂を一周した。

「この教会は第4次大戦のすぐ後に建てられたものです。口口一一
から人が絶えてもこの教会にだけは絶えず牧師が送られ、ずっと守
つてきました」

「築500年ということですか」

ハロウは礼拝堂の中央に立つて天井を見ていた。イグナシオが長いベンチの向こうから「そのとおりです」と頷いた。

ストライクとハロウとチップは、結局あれから一週間、ストライクの熱がすっかり引いてしまうまでずっとこの教会にいた。なにしろチップはともかくあとの二人には行くところがなかつたのだ。「でもどうしてそんな無駄なことをするんだ? 無駄って言つか・・・。だつて誰も礼拝にこないだる」

ストライクが説明しているイグナシオを振り向くと、それでもイグナシオはやさしく微笑んだ。

「そう。もうここに礼拝にいらっしゃる方はおられません。でもここには『聖なる柩』が安置されているので、私たちは神のしもべとしてそれを永遠に管理し、守らなければならぬのです」

「せいなるひつき?」

「ストライクさん、この教会は『ミコステリオン』と呼ばれているのです。その意味は」

イグナシオが長いロープのすそを優雅に滑らせながら、まだ午前のやわらかい日差しの中に収まつた。

「神の恵みを人が手にし身に受けたといふことです。『聖なる柩』はその『人が手にした神の恵み』そのものであると伝えられています」

何言つてんだかぜんぜんわからないけど、イグナシオはまるでその天井から覗いている聖者の彫刻がひとつ降りてきたみたいだった。「だからこの教会はとくべつな教会なのです。礼拝に訪れる方がどんなもいらつしゃらなくなつても、たとえば私が神のみもとに召されても、また次のしもべがこの教会を守るでしょう。『聖なる柩』を『』見になりますか?」

「へ?」

「へ?」

イグナシオは、舞台のように一段高くなっている祭壇の燭台よりもさらに奥に一人を手で招いた。

初めて来た日に行き止まりの壁だと思っていたそこは白いカーテンで、3重のカーテンをくぐり抜けると、墓所のような狭い、天井がアーチ型をした部屋があり、その真ん中の台の上に、ちょうどハロウのトランクと同じくらいの、何か金属でできた箱が置かれていた。

(8)

箱はのつぱりとして、ただの金属のかたまりに見えた。よく見ると、薄い金属でまる一周封印されていることがわかった。

「これが？せいなるひつぎ？」

「そうです」

「何か入っているんですか？」

「神の恵みが入っていると伝えられています。その箱を開けば海が割れ、罪びとを焼き、天への階段が姿を現すそうです」

ストライクが恐る恐る触れてみても、それは本当にただのつるりとした箱だった。ただ、金属だと思つていたら何かもう少し違う。手に吸い付いてくるような感じがする。

「誰か開けてみた？」

イグナシオは黙つて首を横に振つた。

「それを開けることは禁じられています。それは神の力を疑う行いだからです。この聖なる柩についての記録は、この教会の建立と同時に始まり、ずっとここにあります。その来歴は伝えられていません」

「ふうん……」

ストライクがもう少し詳しく見ようと手を伸ばしたとき、教会の扉が開いて誰かが入ってきた気配がした。

3人で礼拝堂に戻ると、見慣れた緑の頭と、その横に黒いかちつとした上着と、計ったみたいにぴたりと膝の丈の高さ（計ったんだらうけど）のタイトスカートの女性がいた。

女性はしつとじとした上品なこげ茶色の髪で、服に合わせて顔を作ったんじゃないかと思つくらいきりつとした顔をしていた。

「アルフ！！」

チップがジョーと一緒に駆け込んできた。

アルフはハロウに向かつて「ほん」と両手を合わせると、「ごめん！」と言つた。

ハロウの方は糊付けされたみたいに固まっていた。もういちど洗濯したらしいかもしない。

「お久しぶりね、ハロウ・ストーム」

女性はこつこつとハイヒールの音を響かせてハロウに近寄り、上から下まで眺め回した。

「あなた自宅の窓をぶち割つてどこに消えたのかと思つていたのよ。隣町のカフュに追いかけたのに、もうになくなつてゐし、一体何やつてるの？」

「ウォラ」

ハロウはやつと自分を取り戻したようだつた。

「とりあえず、今はこの・・・教会にお世話になつてるので、あまり騒ぎ立てないでほしい。僕がお願いできる立場でないことはわかっているのだけど、たくさんの人じご迷惑がかかるのは一般的によくないと思つ」

「あなたいまさら何を言つているのよ」

ウォラという女性はよく見れば割と美人だったのだが、言い方に非常にとげがあるので、ハロウが取つて食われそうに見えた。

「あなたがカフュにいるつて連絡を受けてから、会社のカメラマンと車を借りて雪の中飛ばしてきたのにもういない！そもそもあなたは半年前から音信不通！今回だつてキャリエッタ・スワンクに何回電話したと思つてゐる。あなたが勝手をしているおかげでどれだけ

巻き込まれていると思つてゐるのよ

ハロウは両手で顔を覆つてがっくりとベンチに腰を下ろした。イグナシオは所在なげに様子を見守り、チップはそ知らぬ顔をして礼拝堂の隅で立ち聞きしていて、ジョーはイグナシオの足元で小さくなつてゐる。アルフは開けつ放しの礼拝堂の扉に身を隠している。隠れてないけど。

「あなたのお父様にも連絡したわよ。お父様の代理人が『無関係なのでコメントは控えさせていただきます』としか言わなかつたわ。勘当されたつて聞いたけど本当なのね？」

「…………本當ですよ。父と僕はもう関係ありません。僕はオルフェリウス家の次男ではなく、ただのハロウ・ストームです」
ウォラはさらさらと真つ赤な手帳に何かを書き付けると、それをぱたんと閉じ、「そう…」と言つた。

「もう一つ聞きたいことがあるのよハロウ・ストーム。あなた箱を知らないかしら?」

ハロウは少しだけ顔を上げてウォラ・デイモンを睨みつけた。

「知りませんよ」

そこはこのお坊ちゃまでも嘘をつくんだ。と、ストライクはなんとなく感心した。

(9)

さらにウォラ・デイモンは、顔を背けたまま石みたいに動かなくなつてしまつたハロウに、

ハロウの母親の女優のなんとかかんとか（とても長くて発音しにくい名前だったのでストライクにはさっぱり覚えられなかつた）にも電話してみたが、あなたなんて知らない一點張りだつたわよ、と言ひ捨ててアルフをドアの陰から引きずり出し、かかとの音も高らかに帰つて行つた。ハロウは彼女が帰つてしまつたあともぴくりとも動かず、頭を抱えたままベンチに固定されていたので、ストライクはそのまま教会のあちこちをひとりで見て回つた。

教会はかつてかなり大規模なものだつたというのがうそみたいに、ほこりまみれで蜘蛛の巣だらけで半分廃墟みたいになつていたが、そのほこりをちよつとはたいてみると、見事な細工ものの燭台やらお祈りに使うらしい杯やらどうやつて作つたんだかわからないような複雑な色味のガラスの器やらがころころ転がつていた。

チップはジョーとかなり仲良くなつて、二人で教会の裏にある畠で、冬でも取れる葉っぱの大きな野菜を取りに行つてきやあきやあやつている。結局ジョーはなんの獣人なのかまだわからない。

一周してもとの礼拝堂に戻ると、ハロウはまだ固まつていて、イグナシオが正面に腰掛けてハロウを見守つていた。

どんな気持ちなんだろうな。

ストライクはハロウの後姿を見て少し同情した。

勘当されたつてどういう事なんだろうか。

親に知らないって言われるのはどんな気持ちなんだろうか。

ストライクは親のことなんか覚えてなかつたけど、それでもずっと一緒にいる兄弟がいた。

こいつ次男で言うけど兄貴の話はぜんぜん出てこない。お金持ちで。家柄とやらもよろしくて

世間知らずでオシアワセに見えたとしても、こいつはきつつい美人に追い掛け回されて、帰る場所もなくここにこいつして頭を抱えている。

俺は帰る場所なんかなくて困らない。

俺は自分が根無し草みたいに、野良犬みたいにどこでどうなつた

つて仕方ねえと思つて生きていて、たまに食えないことも眠れないこともあつたつてどうにかしていけるけど、ここはどうするのかな。

「どうちが不幸せなんだろ？ よくわからない。」

イグナシオは静かに立ち上がり、ストライクを手招きし、奥の部屋に入った。

「そつとしておきましょう」

暖炉の部屋にも陽光がたっぷりと降り注いで、そこにだけ春が来たみたいに暖かかった。ストライクはロッキングチェアに座って、ハロウがまだいるであろう壁の向こうに目を向けた。

「あいつもなんだか難しいことになつてるみたいだね」

ストライクが言うと、イグナシオはソファに腰を下ろして頷いた。「ハロウさんは善き人だと思います。でも何かからお逃げになつているようですね。向き合われた方がよろしいでしょ？」

「でもさ、それはハロウのせいなのかな。俺ならあんな風にどこまでも赤の他人がケツを追いかけてきたら逃げるぜ、みんなのとも向き合わなくちゃいけないのか」

イグナシオは暫くのあいだ目をつぶつて何か考えていたが、やがて蝶が羽の具合を確かめるみたいにゆっくりとその目を開いて、ストライクを真正面から見つめた。

「ハロウさんが逃げているのはもつとほかのものからだと思します。そしてそれはたぶん」

次の言葉を待つたが、イグナシオはふっとストライクから視線を外し、思いついたように話を変えた。

「お昼になりますから、お昼ご飯の支度をしましょう。手伝つていただけますか？」

でもストライクの耳にはイグナシオの声が聞こえたような気がした。

あなたもね。

(10)

ひさしひりのよつたな気がした。

真つ暗な中を歩く。そつと。

俺は存在なんかしていない。ただの暗闇の一部。
夜の冷たい空氣と、俺は同じ温度。

田はすっかり闇に慣れていた。

窓から円と蓄光体の薄緑色の光とが、教会の中のものをぼんやり
と形作っている。

不用意に左の足に体重を掛けると、やはりまだぎくりと痛んだ。
でも走れないほどではない。たぶん。

ハロウはある後やつとネジを巻かれたブリキの兵隊みたいに、ぎく
しゃくと立ちあがり、

「長くお世話になりました。僕はもう行きます」と突然言つた。

イグナシオはそれでも「今夜くらいは」と言つてハロウをなだめ、
二人で何か暫く話していた。

ストライクはそれを見て、ああ、俺もそろそろ行かなくちゃ
と思った。

矢がここまで飛んでくることはないかもしれない。だってここは、
はるか昔に投げ捨てられて誰も住んでないと思われている廃墟なの
だ。ジョーを拾わなかつたら、こんなところに教会があつてしまも

人が住めるだなんてだれだつて思わなかつたろう。だれも俺がここにいることなんか知らない。でもだからつていつまでここにいればいいんだ。こんな不似合いな場所はない。それに俺はもっと違うところへ逃げなくちゃいけない。

もっと遠くへ。もっと、俺のあしあどが見えるよつなどこかく。

礼拝堂にたどり着くと何かが息を殺している気配があつた。気配を消し、足音を立てずに歩くストライクを、何かが同じように息をつめて見ている。

あまりの威圧感にストライクが思い切つて天井を仰ぐと、天井からおびただしい視線が降り注いでいた。

「・・・・・！」

月の光が、外に続く大きな扉の上の、丸い大きな窓からくつきりと礼拝堂の床を照らしていた。その光は灰色で、高い天井にさらによく不機嫌に照り返し、闇によく慣れたストライクの目には、そんな死んだ光の中でも、天使や聖者の群れが奇妙な微笑をたたえて自分を見つめているのがわかつた。

どん　と心臓が鳴つた。

ちがう。そんなんじゃない。こいつらはただの彫像だ。昼間見たじゃないか。でもぞつとしてドアに走り夢中で飛び出すと

今度は頭の上から何かがどんと背中に乗つた。

「やあ」

「・・・・・ストライクじゃん・・・何やつてんの？」

「・・・・・・・・・・」

ストライクが、思わず顔を庇つた腕を下げるときの前に緑色の

大きな目が見えた。お前にそこなところで何やつてんだよチップ・。

驚きすぎたので暫く声を出すことができなかつた。ほんの一時間前まで、チップは確かに暖炉の部屋のロッキングチェアの上に丸まつて気持ちよさをもつて眠つていたくせに、本当に猫なんて信用できしたものではない。

一瞬今すぐにこの猫の手を振り切つて逃げるかと思つたが、右足のことと、猫系獣人の敏捷さを考えてみたらばかばかしくなつた。逃げられるわけがないんだ。

開けっぱなしになつた扉が、風のない夜の空氣の中で、白く浮き上がつて見える。

「どうしました」

そして人影もまた、冬の月の光に白く浮き上がつてひかりに近づいてきた。

リンネルのローブを着たイグナシオだつた。

(11)

「よん、じ。」

ストライクの腰についていた小物入れの中からは、その入れ物のサイズからでは考えられないくらいさまざまなものが出でてきた。

金細工の望遠鏡。銀細工の燭台。宗教的な模様が彫り抜いてある首飾り、遠い国で作られたのが一目でわかる鮮やかな杯。指輪。溶けて消えてしまいそうな硝子の小瓶。

「だからゆるいってんだよ」

チップが、全部袋の中身を引っ張り出してしまつてから吐き捨てるように言つた。

「お前イグナシオがどんなにお前に親切だつたか忘れたのかよ？どれくらいここで世話になつたのかわからないのか？それなのにこんなことするのかよ」

最低だよ。とチップは、ストライクがふてぶてしく座つているベンチの足元を蹴つ飛ばした。

うぜえ。

なんでチップに怒られなきゃあいけないんだよ。うるせえ猫だな。お前からは何も盗つてないじゃないか。

イグナシオはストライクの正面に腰を掛け、じつとストライクの目を見ていた。

ランプの光を左側から受けてイグナシオの表情は読み取れなかつた。

ただ黙つてチップの声を聞き、ストライクの顔を見ているようだつた。

「お前、ルーやスウたちからまでなんか持つて行つてないだろ？ な？ ゆるさないぞ」

ストライクはフンとハナで笑つた。「そんなヒマはねーよ
大体めぼしいもんがなかつたじやねえかと言い終わるか終わらない
かのうちに、ざつくりとチップの爪がストライクの頬を切り裂いた。
「・・・・・」

下水道の中でやられた猫パンチなんてかわいいもんだ。
綺麗にぱっくりと頬は割け、ぱたぱたと血のしづくが長い机に零
れ落ちた。イグナシオがさつと立ち上がりてどこかに行つてしまつ
た。チップの毛は逆立つてしまはが倍くらいに太くなつている。

なんでだからこいつが怒るんだよ

頬に手をやると手が一瞬で真っ赤になつた。

「お前みたいなやつは最低だよ

チップがもう一度言つた。

チップの話を聞きたくなくて上を見ると、やはり天使たちがスト
ライクのことを見ていた。やっぱりただの彫刻だ。なんでさつきは

びびつちまつたんだわ。あんなに。

やがてイグナシオが戻ってきて、何も言わずストライクの頬を消毒し、ガーゼをあてて絆創膏をはった。

「い・・・」

「痛かつたですか。ごめんなさい」

最後に冷たく搾った布でそっと、ストライクの血まみれになつた顔と手を拭いてくれた。

「・・・・・そんなやつ、放り出しちまえばいいんだ」

チップがイグナシオにつぶやくと、イグナシオはストライクの正面に座りなおし、顔だけチップに向けて言つた。

「こちらのお品物は、私がストライクさんに差し上げたものです。ですから、いいんですよ。チップさん」

チップはそれを聞くと眉間にしわをよせ耳を伏せた。

「あんたなあ」

そしてもう一度ベンチの足を蹴つた。

「あんたそれでいいのか? こいつがやつたのは悪いことなんだ。そんな風にあんたが許しちまつてどうなるつていうんだよ」

そうですね、とイグナシオは応えた。

「でも責めてもどうにもならないと思いませんか」

「許すのと同じように、責めることにも意味がないのなら、私は彼のこの罪を一つなかつたことにしたい」

ストライクはイグナシオが自分の顔を見ているのがわかつっていた。だけどイグナシオの顔を見ることがどうしてもできなかつた。

ランプの明かりが左の壁にイグナシオと自分の影を作り、たまに芯が燃えるじりつという音にあわせて、ほんの少しだけ揺れるのを見ていた。目の端に、イグナシオの白いあごと軽く組まれた手とローブ、そしてローブに包まれた右の肩が少し映つていた。

「・・・・・あんたがそれでいいってなんらいいけどさ。

言つておくけどそいつそれが初めてじゃないからな
チップはしつぽを一度だけ大きく振ると、奥の部屋に足音も立て
ず行つてしまつた。

(12)

「お休みになりますか？」

イグナシオの声はいつもと同じだつた。それどころか、普段より優しいようにさえ感じられた。なんでそんなに俺に氣を使つんだよ。

「何が悪いんだ」

イグナシオが首をかしげたのが視線を動かさなくともわかつた。

「あるところから取つて何が悪いんだよ」

どうして俺はこんなことを言つているんだろう。

「なくなつたつてあんたは困らないだろ。なんだつてそうだ。余つてゐところから盗つて生きて、それの何が悪いんだ」

どうせ次の町でもその次の町でも誰から盗んで生きていくんだけよ。

「これまでだつてずっとそうしてきたんだよ。ずっとずっととだ。

「・・・・・」

まるで盜み見るみたいに横田でイグナシオを見ると、イグナシオは綺麗な顔を曇らせて、ほとんど泣き出しそうなとても悲しい顔をしていた。

なんでそんな顔をするんだろう。俺まで悲しくなつてしまつ。

天使の彫像が、聖者の彫像が自分の背中を見ていた。

人間につけなんか生えない。あれはただのつくりものだ。

「一つくらい盗んだことが無かつたことになつても変わらない。これからも俺は何か盗むし、これまでだつて数え切れないくらい盗んできた。それは無かつたことにはならない。でもそれは悪いことなのかよ？裕福なヤツは財布に金を余させてぬくぬくと暮らしてやが

るんだ。俺たちには家も親も金もないのにさ。お前らの持つているもの、一個でもあれば俺たちは生きていけるんだよ。どうして盗つちゃいけないんだ。欲しこって言つたらくれるのか？相手にもしないくせに」

「なんでこんなことを言つてるんだろ？。

「もう行くよ」

もうこれ以上天使や聖人たちやイグナシオに見られたくなかった。教会なんてところにこんなに長く留まるべきじゃなかつたんだ。

「待つてください」

立ち上がろうとして机についた手を、イグナシオがその華奢で綺麗な見掛けによらないすごい力で掴んだ。ストライクは驚いて、思わず思い切りイグナシオの顔を見てしまつた。

田の前で自分の顔を見つめているのもまた彫刻のような顔だつた。でもそれは悲痛で今にも泣き出しそうだ。

「これまでたくさん罪を犯した人が私の元を訪れました。私はどうすればいいのかわかりませんでした。でも今わかりました」

落ち着いた声だつた。

「私の持ち物で、あなたが欲しいものは全部差し上げます

「・・・・・え？」

イグナシオは手の力を緩め、もう一方の手もそつとストライクの手に重ねた。その手はすっかり冷えて、とても冷たかつた。

「あなたは何が欲しいですか？」

「・・・・・」

イグナシオは、ストライクが持ち出そうとしたもののなかから、聖印の首飾りを取り、ストライクの首に掛けた。

「私に差し上げられるもので、あなたが欲しいもの、何もかも差し上げます。それであなたの心が満たされるのなら。あなたにそれが必要なら」

もう夜明けが近いだろう。きっとイグナシオは、あと2時間もしたら朝の支度をはじめる。俺とハロウとチップのために。

「…………イグナシオ。どうして何もかも持つているヤツと、そうでないヤツがいるんだ」

「何もかも持つていて見えてる人にも、必ず持つていなきるものがあります。何も持つていない人も、何かしら持つています。そうではないですか？あなたは何も持つていませんか？どんなに何もかも持つている人でも、この世界のすべてのものを自分のものにすることができると思いますか？」

「不公平じゃないか。俺は俺の持つていてるものだけでは生きていけない」

「誰でもそうですよ。どんな人も一様に、自分の持つているものだけでは生きていけないのです。みな、誰かに自分の持つているものをして上げ、誰かの持つているものを受け取つていています。それがこの世界の成り立ちであり、神の定めた原則なのです。なぜ盗みが罪と言われるのかといふと、何一つ自分がその身を削らずに、誰から奪うだけ奪つていいからです」

「俺には何も誰かに『差し上げ』られるものなんてない。何も持つてないやつはそれじゃあ死ぬしかないじゃないか」

「そうでしょうか、ストライクさん。私は今、あなたに一つの答えを頂いたのですよ。だから私は、あなたにすべてを差し上げようと思ったのです。私が持つていてるもの、どれ一つとして、あなたから頂いた答えに勝るものはなかつたのです。あなたの苦しみに勝る持ち物などなかつたのです」

イグナシオの手がランプの明かりに照らされてよく見えた。

その手は白く、細い指はひび割れてあかぎれができていた。イグナシオはその手でストライクが盗もうとした品々をきれいに並べなおした。

何が欲しいですか？

ストライクには手を伸ばすことができなかつた。どれ一つとしてほんとうに必要な、それがあるだけで満たされるようなものなんかなかつた。例えばこの教会をまるごともらつたつてだめだ。それだけはわかつた。何が欲しかつたんだろう。自分がからっぽになつたような気がした。なんだか泣き出しそうだつた。苦しかつた。俺には何もない。答え？ 苦しみ？

持ち物とはそんなものも含まれるのか。

「・・・・・どうしたらしい？」

「あなたが知つてゐる、一番多くのものを持つてゐる人を思い浮かべてみなさい。あなたはその人と同じだけ持つてゐるのです。神は公平なですから。誰かは喜びと愛を持つてゐるかもしない。誰かは貧しさと悲しみを持つてゐるかもしない。しかし神の目から見れば、きっとそれらは同じだけ価値のあるものなのでしょう。あなたはこれからあなたの苦しみを差し出し、安らぎを受け取ればいいと思います。あなたの悲しみや寂しさを差し出し、喜びと楽しみを受け取ればいいと思います。今私にあなたが差し出してくださつたように」

「最初から何もかも欲しいものだけ持つていられないのは不公平じやないのか」

「生まれながらに喜びと安心を得た人は、成長するにしたがつてそれらを誰かに差し出さなければいけないのでしょうか。あなたはこれからそれを得ることができるでしょう」

「・・・・・」

「今日はもうおやすみなさい」

イグナシオは天井の天使たちと同じように柔らかく微笑んだ。

ふらふらと奥の部屋に続くドアを開けると、ハロウがそこに立っていた。

「うわ

「…………おはよう、ストライク」

なんでみんなよつてたかって俺を驚かせるんだろう。

「いつからここにいたんだよ」

ハロウは首をかしげて、いつものしれっとした顔で

「一週間くらい前からでしょうか」

と言った。

やつぱりこいつ一回死ねよと思つたが、ストライクはなんとか笑つてしまつた。

箱のなかみ（1）

（1）

騒がしい声にストライクは目を覚ました。すでに脛をまわつてゐるようだつた。でも窓から見える景色は雪で、実際に何時なのかさっぱり見当がつかない。

「研究に必要なのです」

「ですから、これは動かしてはいけないものなのです。お渡しすることとはできません」

珍しく厳しいイグナシオの声が聞こえた。

「もー！帰つてつて、いつてるぢやない。変なひとね」

礼拝堂ではジョーまでが小さなこぶしを振り回して怒つていた。「何・・・」

ストライクのねぼけた頭でも、誰だか知らない変なのが紛れ込んでいるのがわかつた。ハロウはイグナシオとジョーと変なのが言い争つているのを少し離れたところから腕を組んで眺めている。もうすっかり旅の支度を整えて、例の黒いコートにシルク・ハットだつた。ストライクはとりあえずハロウの隣に言つて声を掛けた。

「何あれ？」

「なんだか、先ほどある人が来て、聖なる柩を渡してほしいとイグナシオに言つてゐるんですよ」

改めてその誰だか知らないへんなのを見てみた。

それは一人の少年だつた。少年にしか見えない。13・4か。もう少し大きいか。明るい栗色の髪で、左の目にモノクルをつけてゐる。なんだつてあんな役にたたなそうなもんをつけているんだろう。左目だけ近眼なんだろうか。わかんないけど。目の色も髪の色に合わせたみたいな栗色だつた。あまりにその瞳が透き通つてゐるので非人間的なくらいだ。何よりストライクがその人物を不信に思つた

のが、白衣を着ていいことだつた。学校じゃないんだぜ。それとも学校のお勉強で聖なる柩とやらを借りに来たんだろうか。

「どうしても貸して頂けないのですか」

「いけません。それは決ましたことなのです」

「ペペシ これだから宗教などと言つ懸にもつかぬ妄想に従事している輩は頭が固くて困る」

「ちょっとおーあなた、失礼よ！ 牧師やまこ、どうして、そんなこと言うの！」

「ペペツ 何か条件があるなら提示してください。それが実現可能なものであれば検討いたします」

す

ストライクは隣のハロウに小さな声で「ひとつと言つた。

「なんかあいつ本当におかしくね？」

「条件も何もありません。できません。お引取り下さい」

「ペペツ 研究のために暫く貸してくれればそれでよいのだ。こんなところにそれを置いていたところで何の役にも立たない」

「ペペツ それを貸していただくことが科学の発展に繋がるのです」
イグナシオは頑として首を縦に振らない。

「駄目です。本当に駄目です。何と言われましてもお貸しすることはできません」

「帰つてちょうどいい」

「ペペシ Dr . A . A 、交渉は不成立」

「ペペツ 仕方がない。別な方法を取らつ。帰るぞ P . P 」

「ペペツ 了解しました」

「ちょっと変わりますよね」

ハロウが応えた。

ちょっとじやないだろあれは。

どこから出でいるのか、発話のたびに「ピピッ」という軽い機械音が聞こえて、まるで二人で会話しているようにその少年は一人で話している。

「おかしいって。気味わりいよ」

白衣の少年は扉から出ようとしてはたと足を止め、真っ直ぐにストライクを見た。

「げ」

「ピピッ複数の街で軽犯罪者リストに載つていてる少年を発見。D·r·

A·A、どうしますか」

「ピピッデータを開示せよ」

「ピピッ了解しました。登録名はストライク。北東部ケットローグで窃盗2件、同じく北東部ヴァンダルグ不法侵入一件、中央部ネイシスメント窃盗一件。ヴァンダルグまでは3人の共犯者と共に逮捕されていますが、ネインメントでは単独です」

「ピピッ他に情報は」

「ピピッストライクとはリンクが不明ですが、隣にいる黒尽くめの青年は現在、ロメオ・オーギュスト・オルフェリウス氏の部下のナニー・マーガレット・スミスから捜索願を出されている詩人のハロウ・ストームです」

「ピピッ興味深い取り合わせだ、P·P·他に」

「ピピッ窃盗犯ストライクの右足に刺創。増殖期に入っていますが、完治していません。また、左頬に切創が見られます。こちらは痴皮を形成」

「ピピッ他に」

「ピピッご報告すべきことはありません」

「ピピッよしわかった。サンプルがほしい。確保せよ」

「ピピッ了解しました。交渉を試みます」

変態だ。

でもその変態はつかつかと歩み寄つてストライクに向かつて言つ

た。

「あなたのその傷を完治させることができます。復元率は99.9%です。その代わりに体細胞組織を提供して頂きます。あなたのデメリットは〇です」

「はあ？」

少年は間近で見るとハロウみたいに無表情だったが、ハロウよりもずっと無機質な感じがした。機械仕掛けみたいにストライクの腕を掴んだ。

「行きましょう」

「ピピツ待て、サンプルは多いほうがいい。そこのメフィースト・フェーレスにもご同行願おう」

「ピピツ了解しました。ハロウ・ストームさん、ご同行願います」ハロウはちょっとだけ考えたようだった。
でもストライクにとつてはほとんど即答だった。
「わかりました。ご一緒しましょう」

「まつ・・・

「俺も行くわ」

そして天井からチップが飛び降りてきた。
なんで猫はいつも高いところにいるんだろう。

(2)

雪がぐんぐん後ろに流れていった。

速い。すごい。アルフの車より速い。（でも彼には秘密にしておいてやる）

「ピピツ 猫系獣人とはいっても収穫だな。欲を言えば、あの奇形の疑いのある獣人も連れてきたかった」
「ピピツあの獣人は齧歯目に近い骨格をしています。奇形ではない

かもしだせん」

車（じゃないけど）はどちらかといふと船のような形をしていた。車輪がなく、どうこう仕組みなのか、地面すれすれを浮かんで滑るように進んでいた。中は広く、小さな部屋といった方が近いくらいだ。テーブルまであって、硬いが布ばかりのベンチがそれを囲んでいた。なんだかしらぬけど暖かくて、やけに居心地はよかつたが、さつきからずつと白衣の少年が運転席で一人で不愉快な会話をしているので、ストライクは隣に座つて外を眺めているハロウの首を絞めてやりたくなつていた。

「・・・・・とつと逃げてりやよかつたな」

「すみませんね。お付き合ひいただいてしまつて」

「なんでこんな変態のところにお前は行きたかったんだ？」

「僕には特に行くところなかつたので。イグナシオさんにはだいぶお世話になりましたし、ウォラにも追いかけられてしまつて、そろそろ移動しないとな、という時にどこか連れて行ってくれそうな人が來たのでつい」

つい ジャネエヨこのクソほんぼんめ。人を巻き込むのもいい加減にしる。おかげでイグナシオとジョーに満足に挨拶ができなかつた。なにか彼らには言わなくちゃいけないことがあつた気がするのに。

チップは相変わらずマイペースに眠つたり起きたりしていた。景色は全くの真っ白でどちらへんを進んでいるのかわからない。

「今どのあたりなんだろうなあ」

はめ込みの窓の外を見ながらつぶやくと、チップが「教会から西に100キロつてとこかな」とあぐび交じりに言つた。

「わかんのか？」

「わかる」

そしてまた眠りだした。猫は便利だ。それにしてもこの車（船？）は一体どこに向かっているんだろう。教会のあつたコロニーから100キロあたりだとすると、そこもまた不毛の荒野のはずだ。薬物

汚染や重金属汚染で立ち入りが禁止されているのはどうだつただろうか。そんなところに行こうとしているのだろうか？あるいはそこをこえて、もつと遠くに？

少年に聞いてみたかったが、何しろ彼は「自分の脳みそと会話中なので、とても話しかけづらかった。やけくなつて寝ようと思つたら、すでにハロウはすやすやと眠つていた。ハロウもその白衣のガキも変態だ、とストライクは思った。

やがて乗り物はとても大きな、灰色の門の前に止まつた。門はよく見ると何かの金属でできいて、幾何学的に絡まりあつて施設を封印していた。

「ここは？」

「「」りやあ危険区域指定の旧プラン・コンプレクスじゃないか」「チップが言うなりひらりとゅうてメートルはある門の上に飛び

乗り、

「ぎゃーーー

前足が触れたところでボッタリと落ちてきた。しかも背中から。

「チップ！」「チップさん

チップはぐつたりと動かない。

「おいチップ！」

「ピピッ大丈夫です。侵入者を排除するため電流を流してあります
が、数mAですので気絶でしょう」

「ピピッふん、たかが愛玩用動物の分際で、わしの城に断りもなく入ろうとなぞするからだ。馬鹿め」

ストライクがチップの体を抱き上げようとすると、ハロウがそれを押しどどめ、代わりに自分のトランクをくれた。
「足がまだ辛いでしょう。僕がチップさんを」

白衣の少年はそれに目もくれずカーデをリーダーに通して門を開け、かつかつと中に入つていった。

「なんだよあいつはよ」

ストライクが遠くなつていく背中を睨んでつぶやくと、ハロウは

「とても変わった人だつたようですね」と言った。

「氣づくのおせえよ」とストライクは思った。

(3)

長い白い廊下を抜けると、病院のような部屋がどんと開いた。だけやたらに広い。ものすごく広い空間がついたてのようなものに区切られ、ちらほらと太い柱が天井に向かって伸びていた。

「ペペッ! その猫系獣人をそちらのベッドに置いてください」
ぐちやぐちやに配線が絡んだ床をなんとか通り、言われたとおりにハロウがチップをベッドにそっと寝かせた。少年はそれはそれで終わりというように、ストライクに向かって

「口を開けてください」と言った。

背もたれのないキャスターのついたスツールに座らせられ、仕方なくストライクが口を開くと、少年はいきなり何か銀色の柄の長い小さなスプーンのようなものをストライクの口にいれ、ぐりぐりとかき回し始めた。

「ひはー! ひょ・・・・

「痛覚神経が刺激されるはずです。動くと余計な刺激が加わります」

「・・・・・・・・・・・・・・

口から出てきたスプーンの先には、ピンク色をした肉の破片のようなものが、ちょこんとかわいらしく乗っていた。

「・・・・・いてーよ・・・・・口ん中に穴開けただろお前

「活発な細胞を採取したのです」

少年はそれを手際よくシャーレに移すと、何か薄い黄色の液体をたらし、銀色でぴかぴかのオープンみたいなものの中にしまいこんだ。

「移植可能予定期まで2時間13分。少々お待ちください」

少々お待ちください、と言つたきつ少年は身動きをしなつてしまつた。

あと2時間いつてるつもりか？

ストライクは少年の顔をじろじろと眺めてみた。

なんだこいつは？

よく見てみると、モノクルは左のこめかみに突き刺さった針金（
のようなもの）にくいついていた。どう見ても針金は皮膚にめり込
んでいる。でも血は出でていない。すくべきもちわるい。

うなごう」という音がずっとし続けていいだけだ。

「アーティストの個性」

少年は視線を動かすこともなく、ただそう言い放つた。

まあ細胞だけではなくお前に役に立かそーた
譽ぐるにいても

「…」 じなにまの舞を踊る所

「ピピッブースは4個作つておへ」とだ、P・P。

「アシ」了解しました

そして少年はすつと立ち上がると、3人をその部屋に残したままどこかに行ってしまった。

逃亡ノカノロト

ストライクが詰うとハロウは「その方がいいかもしませんね」と言った。

と言った

ストライクはとっさに側にあつた（何で作られていくのか）真っ白なメスを取つた。

「ハロウ」

ハロウはそれを受け取ると、トランクのどこだかわからないどこ

ろにスポットを入れた。

「お前それとつ サの時に取り出せるのか?」

「無理ですね」

文句はいろいろとあつたが、とりあえず逃げることに集中することにした。チップを置き去りにするわけにいかないので、試しにしつぽを思い切り握り締めてみたら、チップは条件反射的に噛み付きながら目を覚ました。「逃げるぞ」と声を掛けると、黙つて足音を立てずにベッドから飛び降りて付いてきた。

もとの廊下をひたひたと走る。廊下も長い。廊下はやけにしんとしていて、所々にあるライトが目にまぶしい。まるで悪夢の中みたいだつた。

でも廊下を半分くらい戻つたところでいきなり空中から少年が現れた。

「ひ」

「ここから出るには認証カードと生体データが必要です。戻つて検査を受けてください」

「ストライク、そこに入なんかない」

チップがとんと飛び出した。少年の胸の辺りをするりと通過する「なんだこいつ」

「この映像は3次元映像です。ここに私は存在していません。ですがこの研究所内は私の管轄下です。あなたたちの言動はすべて捕捉されています。脱走行為や破壊行為も無意味です」

知るかよ

ストライクは少年の体を通り抜けて（それはただの空氣と同じ感触だった）、自分たちを飲み込んだ幾何学模様の扉に辿り着いた。
「認識してください。あなたたちが外に出るすべは現在ありません」
少年はストライクの方にその場で振り向いて言つた。
そしてその通りだつた。鍵穴はもちろん、扉がどのようにかみ合つているのかすらわからなかつた。

(4)

チップとストライクが仲良さそうに並び、狭いベッドを横に使って上半身を投げ出していた。チップはそれでも全身がベッドにからうじて乗っている。

「一人ともふでぐされているのだ。

ハロウはさつきストライクが座ったスツールに座り、変な器具で口の中をほじくられながらかなり反省していた。「いたつ・・・・」

「攝取完了」

思っていたよりも融通の利かない、わけのわからないところに来てしまった。しかもストライクとチップまで巻き添えにして。

「検体1号の細胞移植が可能になるまであと1時間7分あります。どうしますか？」

「検体1号・・・・」

あのあと3人が仕方なく廊下を戻ると、すでに白衣の少年はもとの椅子に腰を下ろして、無表情にハロウたちを待っていたのだった。「まず、ここはどこで、あなたは誰ですか？」

ハロウが試しに聞いてみた。さすがにハロウにもあまりまともな反応が返ってこなさそうだということがわかつてきていた。

「南東部二ンヘレン、北緯52度西経127度、旧カンクターコンプレックスです」

「工業地帯跡地なんですね？」

「工業都市として稼動していたのは134年前までです、検体2号。その後は生物学者アレックス・アンテノワ博士の研究施設として利用されています」

「生物学者アレックス・アンテノワ博士の研究施設。この広い建物が全部ですか？」

「はい」

ストライクをちらりと見ると半分寝そうな顔をしていた。
「Jの建物のことはわかりました。（わかつてないけど。）ではあなたは誰ですか？」

「私はフィリップ・プロトタイプ3062号です。アレックス・アンテノワ博士の助手をしています」

「では、アレックス・アンテノワ博士はどういらっしゃるんですか」

「ピピッ Jにだよメフィースト・フューレス」

フィリップ・プロトタイプ3062号の顔がぐにゅりと奇妙に歪んだ。それまであどけないとすら表現できた少年の顔は、今や邪悪と言つてもいいほどに不気味に笑っていた。ハロウはその変わりように戸惑った。

「わしがアレックス・アンテノワ。Dr.A.Aだ。よく来てくれた。せいぜい楽しむがいい」

「ピピッ」

「Dr.A.A、メンテナンスの時間です。回路をシャット・ダウンします」

「ピピッ 了解。また会おう」

「ピピッ シャットダウンピッ 完了ピピッ」

フィリップ・プロトタイプ3062号は一瞬目を見開き、ぴたりと静止すると、2度ゆっくりと瞬きをした。

「今のがDr.A.Aです。毎日15時から17時までメンテナンスを行いますので、Dr.A.Aの稼動は2時間後になります。他に何か？」

ハロウは聞きたいことがありすぎてなんだか疲れてしまった。

ストライクはすでにうつらうつらと舟をこいでいて、チップも同様だった。

「ど・・・どうして・・・Dr.A.Aのメンテナンスとは何です

か? Dr . A . A は何かその・・・「病氣で治療をなさつて」ということですか?」

「文法が間違っています、検体2号。翻訳します。Dr . A . A のメンテナンスとは病氣治療のことであるか、とこいつことによろしくでしようか」

「(とりあえずは) よろしいです」

「Dr . A . A は高齢のため、一日に2時間肉体をケアする必要があります。特に感染症、腫瘍の形成を含む肉体の損壊がない場合も、代謝によって発生する老廃物の除去のため、同様の処置が必要です。それらの処置を正常に行つことを私たちは『メンテナンス』と呼んでいます」

「はあ・・・。高齢のため? 失礼ですが、あなたはおいくつですか?」

「私は14年前に心肺機能の活動を開始しました」

「それはわかりやすく言つと14歳といふことによろしくでじょうか」

「一般的な生物にあてはめるとかいつことになります」

「一般的な生物に当てはめると、14歳といふ年齢はその・・・『メンテナンス』をしなければならないほど高齢ではないと思つのですが」

「Dr . A . A は2545年生まれです。183歳です。十分に高齢です。参考までに現在の人間男性の平均寿命は57・6歳です」

「でもあなたは14歳ですよね?」

「はい。Dr . A . A は183歳です」

ハロウが頭を抱えると、フィリップ・プロトタイプ3062号は、助け舟を出すように言った。

「認識に齟齬があるようです。Dr . A . A は一時的に私の身体機能を支配しますが、Dr . A . A の肉体と私は別です」

「いちじてきに?あなたの身体機能を支配するというのは?」

「私の脳にはチップが埋め込まれており、そのチップでDr . A .

Aの意思を受信し反映させます。メンテナンス中にDr・A・Aの意識は睡眠状態となるため、受信機能を停止します

「そうですか。（何がそつなんだかわからないけど）」

「だつて、睡眠状態の意識を反映させたらどうなるかわかりませんからね」

フイリップ・プロトタイプ3062号はそう言つてにこっと笑つた。できのいい子役がやつてみせるような角度まで決まつてゐたいな笑顔だった。

ハロウはそこベッドの上で寝ている猫のチップが頭の中にいるのを想像した。受信機能つきのチップよりも、そっちのほうがずっとすてきなような気がした。

(5)

「のままにいたら寝るばかりだとストライクが言つて起き上がつたので、フイリップ・プロトタイプ3062号が施設を案内してくれることになつた。

まず自分たちがいた検査室。「主に検体の検査をするところです。精密な機械が設置されていますので暴力行為などは慎んでください」次に通されたのは小部屋がたくさん並んだ通路だった。(ここでチップが分流した)

「こちらは研究対象の生物を入れておくコンパートメントです」

小部屋は8個ほど横一列に並んでいて、一つ一つはとても狭い。手前の4つには病院にあるような白くシンプルなパイプベッドが一つと洗面台とトイレット(ストライクは本当に牢獄だと思つた)、奥の4つは本当のただの白い部屋だつた。それらの部屋の通路に面した壁はガラス張りで、その向かい側の部屋もまたガラス張りだつたが、こちらは大きな一部屋になつていた。

「ここにぶちこんだ研究用の生き物を向かいのガラスの向こうから眺めるわけか？」

ストライクが吐き捨てるように言つと、フィリップ・プロトタイプ3062号は「その通りです」とまゆ一つ動かさずに応えた。

「手前の4部屋は人間と獣人用です。あなた方のコンパートメントになります」

ストライクは思い切り舌打ちした。

廊下はそこで直角に左に曲がった。

曲がりきつてすぐに右に渡り廊下が見えた。でもフィリップ・プロトタイプ3062号はその渡り廊下をまったく無視して真っ直ぐ歩いていったので、ハロウたちもそれに従つた。いくらも歩かないうちにまた廊下は左に折れた。どうやらさつきまでいた広い部屋の柱の向こうあたり、おそらく中央部にぐるりと回りこんだのだろうと推測された。

「Dr.A.Aの部屋です」

フィリップ・プロトタイプ3062号は突き当たりで立ち止まってとても高い金属性の扉を見上げた。

「ピピッP.P3062。認証を開始」

「ピピッ認証完了。扉が開きます」

扉は異常にゆっくりと開いた。

まず「プールだ」とハロウは思つた。

部屋の中は液体の反射光で青く光り、ゆらめいていた。たくさんのが太く透明なパイプが天井に向かつて伸びていた。床の7割に液体が張られ、かなり深いのがわかつた。パイプと同じくらい太いコードがその床をくりぬいたプールの中から伸び、壁やパイプやあらゆるところに繋がっていた。右手の奥には、黒々と山のように大小の機材が積み重なつていた。

「・・・・Dr.A.Aはどこに？」

ハロウが恐る恐る尋ねると、フィリップ・プロトタイプ3062号は当然のようにプールを手で示した。

「こちらがD·A·Aです。現在はメンテナンス中ですが、
フィリップ・プロトタイプ3062号に続いて、3人がコードに
足を取られないように気をつけて中に進み、プールの中を覗き込む
と、そこにはまるで人間の干物のような老人が薄青い液体の中に浮
かんでいた。

ハロウはもしかして悪い夢をみているのかな?とふと考へ込んだ
が、チップがしつぽを太くして目にも止まらぬ速さで部屋を飛び出
し、ストライクが「なんだこれ」と言いながら後ずさり、しかも老
人が襲い掛かってくる気配もないのに、ちゃんとした現実のようだ
なと思い直した。

水中の老人の皮膚は灰色のような黄色のような、ひどく不愉快な
色をしていた。左目が半開きになっていたが、その瞳は白く濁りき
つて、きっともう何も見えないだらうと思われた。頭には細いコー
ドがまるで髪の毛のように緊密に植えられ、手も足も骨と皮ばかり
に細い。

「死んでる」ストライクがぼそっと言つた。

「脳波も心拍数も血圧も正常です。生命活動に異常はありません」
フィリップ・プロトタイプ3062号がストライクを否定した。

「183歳か」

ハロウは、その年齢の意味するところがどうしたことなのか、さ
つき話を聞いていてもぜんぜんわからなかつた。でも今その現実が
目の前にある。こういうことだ。

「本当はD·A·Aの感覚器はすでに機能不全になつており、私
の感覚を電気信号で送信し共有している状態なので、実際には脳し
か必要ないのですが、前例がないので、すべての臓器を保存してい
ます」

それがこの今ここにあるD·A·Aの肉体に関することだと気
が付くのに少し時間がかかったので、ハロウとストライクは先に行
ってしまったフィリップ・プロトタイプ3062号を走つて追いか

けなくてはならなかつた。チップは物陰に隠れるようにして付いてきた。

次の部屋はシンプルだつた。廊下の延長のようで、実際に扉もなく、通路がそのまま膨らんで部屋になつたみたいだつた。向こうにまた廊下が続いているのも見えた。

でも部屋の真ん中には太い柱が高い天井に向かつて伸びていて、右手にまた渡り廊下が繋がつていた。やはりフィリップ・プロトタイプ3062号はさつきと同じように渡り廊下を無視した。

ハロウがフィリップ・プロトタイプ3062号を追いかけてまつすぐに部屋を突つ切るうとした時、田の端にマネキンの腕が見えた。こんなところにマネキンが

ふつと振り向くと柱の半面が強化ガラスになつていて、中にマネキンがきれいに収まつていた。

しかもそのマネキンはフィリップ・プロトタイプ3062号につくりだつた。

「これは・・・

ストライクも足を止めてそれを見た。

「死体だ」

でもそれはそうだつた。フィリップ・プロトタイプ3062号が何と言つたとしても、これはほんとうに死体だつた。

よく見るとその柱は液体に満たされ、その体を包んでいた。Dr. A・Aの生きた肉体よりも肌は白く、柔らかそうで、瞳は今にも開きそうなくらいに穏やかに閉じられ、まるで微笑んでいるかのようにさえ見えたけれども、それはどうしても死体だつた。そんなことは世間知らずのハロウにだつてわかつた。

そしてその死体はフィリップ・プロトタイプ3062号よりも年をとつていた。

「フィリップさん、お兄さんですか？」

「まずはじめに」

「フィリップ・プロトタイプ3062号はすでに向こうの廊下に出ていてその場で立ち止まつた。

「私は『フィリップ』ではありません。『フィリップ・プロトタイプ3062号』です。そのように呼んでください。もし何か別な呼称が必要な際は、『P・P』か『3062号』としてください」

フィリップ・プロトタイプ3062号 P・Pはゆっくりと柱の側にいるハロウたちを振り返つた。

「次に、そのボディですが、兄ではありません」

「おやじだとか言つんじやねーだろうな」

ストライクが、これ以上ありえないことが起きても困るといった調子で言つた。なにしろパイプの中の遺体はどう見てもはたちかそこらなのだ。

「『オヤジ』が『父親』を意味する俗語といつ理解でよひしければ、わたしの父親でもありません。そのボディはフィリップ・オリジナルです。遺伝子的にはそれはわたし自身です」

やつぱり夢の中なのかもしれない、とハロウはもう一度思つた。

それにしてもずいぶん悪趣味な夢だ。イグナシオの教会で見るような夢ではない。

「じゃあ今僕はいつたいどこにいるんだう?」

僕は首吊り縄をぶら下げてみたあの部屋から、本当は一歩も出でいないのかもしないな。

箱のなかみ（2）

(1)

P・Pがあまりにも普通にズボンを脱がそうとしたので、ストライクは慌てて手を振り解いて椅子から転げ落ちた。

「あんな！お前・・・」

「そのままで処置できません。脱ぐのが嫌なら着衣を切断します」「そうじゃなくて・・・もう・・・」

ハロウとチップは笑って検査室を出て行ってしまった。

医者と二人きりなんだと思えば恥ずかしくもなかつたけど（とうかそもそも人に脱がされるのが嫌だったのだけど）、あの二人が出て行つてしまつと別な方向で不安になつた。

こんなガキに「処置」それで自分は無事でいられるんだろうかということだ。

さつき夢うつつに聞いていたところではこいつは14だ。14のガキに一体何ができるんだ？お医者さん！」この付き合いしている場合じゃないんだよ。

「麻酔を打ちますか？」

「は？」

「これからあなたの右大腿部の刺創に、先ほどあなたから採取した活発な細胞を注入します。当然ですが痛覚神経への刺激を伴いますので、神経を麻痺、あるいは脳への信号を遮断しますか？」

失敗されたら死にそうだったので（もののたとえではなく）、ストライクは少しきらい痛くてもガマンすると言つた。

「そうですか」とP・Pは、何か綺麗な桃色の液体が少し入った細い注射器を、逆手に構えてストライクの足、矢が刺さつてからやつと傷口に薄い皮がはつて、それでもまだ赤くじくじくと濡れている

直径1センチの丸いスポットに、ぶつすりと突き刺した。

「わああ」

「だから麻酔を打ちますかと言いました」「針はほとんど全部足に埋まつた。

P・Pは一気にピストンを一番奥まで沈めてしまつと、左手のゆびで傷口の周りを申し訳程度に抑えながら、刺した時と同じように乱暴に注射器を引き抜いた。手には薄いゴムの手袋をはめていたが、その手袋は大人用だったので、指先の部分がまだ余っていた。14歳だって。何かわけのわからない生き物が足から生えてきたりしないだろうな。

なんだか体から何かを抜き取られたような妙な脱力感に襲われて、ストライクがぐつたりと横のデスクに右ひじをつき、額を手のひらに載せると、P・Pはあらわになつたストライクの左の頬から、昨日（今日の明け方）イグナシオが当てくれた絆創膏をびりつと引き剥がした。

「ぎ」

「思つたとおり新しい傷でよかつた。これから痂皮を剥がします」「一聲かけるとかなんとかなかつたのか?と思つたけどもひ声を出すのにもくたびれてきた。

どうせ言つたつて無駄だ。

かひをばがしますつてどうこいつだ?

「かひ つてな・・・・い」

「動かないで下さい。器具で傷口を広げてしまつ恐れがあります」「いででででで何!?」

「動かないで。痂皮とは出血した際に起る、止血作用によつて血小板とフィブリンが凝固し固まつたものです。これです。痂皮がある状態ではデータが取れません」

「何それ!痛いって!また血出できてるじゃん

「かさぶたのことですよストライク、たぶんね」

ハロウとチップが頭だけ出して覗き込んでいた。

「ちょ・・・はがすなよむしろ！痛いつて！」

P・Pは長い大きい先の細いピンセットのようなもので、少しづつかさぶたを剥がしていた。痛いばかりではない。冷たいピンセットの先が傷口に触れるたび不快さに怖気が立つ。

「困りましたね」

P・Pはいったん手を止め、ピンセットを銀色のそら豆みたいな形をした皿にかちやんと放り込んだ。

「ただの刺激です。ショック症状が出るほどどの刺激ではあります。そもそも我慢できると言つたのは」

「俺だよーうるせえな！」

P・Pもつんざりしたようटースクに左のひじをついた。

「今から局部麻酔を打ちますか？それとも一気に剥がしますか？」

「一気にいこうぜ」

もうピンセットでつかれるのは本気で嫌だつた。でも麻酔なんか打たれたら、それこそどうなるかわかつたものじゃない。一度と起きあがれなくなるかもしれない。

「わかりました」

P・Pは半透明のポリ容器を持つてくるとガーゼにたっぷりその中身を含ませた。それはただの水に見えた。かなりびちゃびちゃになつたそのガーゼをストライクの頬の傷にぴたりと当てるど、

「暫くこのままにしてください」と言つてP・Pはどこかに行つてしまつた。

しみるかと思つたら液体による痛みはほとんどないようだ。むしろほじくられて熱を持つた傷口が休まるような氣さえした。

やがて小さなへらのようなものを持ってP・Pが帰つてきた。

まさか

P・Pはスツールに戻るなりストライクの手をのけさせ、ガーゼをばかに丁寧に取つた。そしてストライクの頭を『スクに押し付け

て、「ム手袋をしたままの左手で押され、右手で銀色にきらめいて、光るへらを傷口の最下部に当た、

なんの迷いもなく一息に、思いつきリストライクの頬をこじあげ上げた。

「ああああああああああああああ

その後もなんか痛いことをされたけど、ストライクにはもう声を出す体力が残つていなかつた。

(2)

何かやわらかそうで鮮やかなピンク色のゼリーが、たっぷり塗られている絆創膏を頬の傷に張られ、ストライクはどぎめの一撃を喰らつたみたいにぐつたりとしていた。

「痛かつたですか？」

ハロウが聞いてみるとストライクは非常に不機嫌に

「痛いなんてもんじゃねーよやつてみろつてんだ」と言った。

「お前、これでひどいことになつたらぶつ殺してやるからな」

そうだな、とハロウは思った。

本当に今ストライクの頬に張られていたり、足に注射されたものが危険なものだつたとしたら、僕はストライクにどう謝つていいのかわからなくなる。僕の個人的な「どうなつてもいい」という考えに、ストライクやチップさんを本来は巻き込んではいけないのだ。「ピピッ お前たちは自分の無能を棚に上げて P・P に文句を言ひ。自分たちがどんなに高度な治療を施されたのか知らうとする思わない。向上心のない人間など虫けら以下だ。口を利くだけで脳細胞が

破壊されそうだ

「なんだとこの」

ストライクがはねるように起き上がり、P・P(Dr.A.A)の白衣に手を伸ばし、襟を掴みあげたが、P・Pはまるで汚いものでも眺めるようにストライクの手に目をやつただけだった。

「ふん、暴力か。情報の処理速度が追いつかない、知性の劣る者は、自分の意見を瞬時に論理的に発言することができないために一種の身体言語として暴力を振るうのだ。そうやって短絡的に暴力を振るのは、自らの知能に欠陥があると叫びながら歩いているようなものだぞ」

「あ

ハロウが止めるまもなくストライクはP・Pを文字通りぶつ飛ばした。

「ピピッ回線を切断します。出血有り・・・検査・処置後すみやかに修復します」

「ピピッ了解した」

「ピピッシャットダウンピッ」

P・Pは左の頬をまともに殴られて椅子ごと床に転がっていた。そしてひじをついてよろよろと立ち上がると泣きながら氷嚢を頬に当てる。

「えつぐ・・・ひっく

鼻水と鼻血と涙でP・Pはかなりかわいそなことになっていた。ストライクのほうもうなだれて殴ってしまった右手を見ている。どうしよう。

とりあえずストライクは大丈夫だろうと判断して、P・Pの顔をみてみた。椅子を元の位置に立て直してみたら、P・Pはすとんとそれに腰を下ろした。

「何かお手伝いできることはありますか?」

P・Pは子どものように泣きじゃくりながら(子どもなんだけど)(び、びしゃつけ・・・びしゃつけ、が見られるので・・・しょ、

処置します・・・ヒック、ひょうのり、を、持つていて、もりえ、
ます、かヒック」

と言つた。

ハロウが言われたとおりに氷嚢を支えると、P・Pは鼻のひょう
と上あたりを、鼻血で真っ赤な手できゅっと押された。

「うひ・・・うええ・・・」

ハロウはそこらへんにあつた未使用らしいガーゼで涙や鼻血や鼻
水を適当に拭つてやりながら思った。どうしてこんなことになつち
やつてるんだろうなあ。

ストライクの隣にはチップが腰掛けていたが、ストライクは顔を
腕で抱え込んでしまつた。ストライクだつてこんなはずじゃなかつ
たのだ。

P・Pはやつと涙を流すのをやめて息を整え、咳払いをした。で
もまだしゃつくりが止まつていなかつた。ハロウが自然に背中をと
んとんと叩いたら、P・Pからすこい目で睨まれた。まだ泣きべそ
をかいしている上に、鼻をつまんだままの体勢で。

「せ、背中、や、ヒック背骨を、叩くヒック叩くといづみづな、治
療法は、根拠のないヒック迷信です。鼻出血の際は・・・」
「失礼しました。特に鼻血を止めたかったのではないのです、ただ
あなたが泣いていたのでつい」

ハロウはもう一度睨まれるはめになつた。

「これは、涙腺から分泌、される、ただの体液、ですヒック・・・
角膜や、眼球に、異常はみら、れませんので、ヒック
「お前を殴るつもりじゃ なかつたんだ」
ストライクがぽつりと言つた。

「痛かつたろ」

「・・・つ、痛覚神経、が、こんなにはげ・・・ヒック激しく刺激
されるのは、ヒック実際に経験して、ヒックいなかつたので・・・
驚き、ました」

「怪我とかしたことなかつたんですか?」

「ヒック・・・怪我・・・7歳の、時に、パパの・・・Dr.A.

Aの研究室で、転んで、左ひじを、9針縫いました。担当医は、ヒ

ューバート・レノート教授・・・2582年の、ことです」

「あとは、紙で、指に、切創、軽い打撲、裂創、熱傷も・・・19歳のとき、に、実験中に、289まで加熱したミーグレット溶液、を、倒して、左大腿部に、II度熱傷を」

「21歳の時、市販の、鎮痛剤を飲んで、アレルギーせ、性、ヒック、ショックを起こして、死亡、しました。でも、それらは

「すみません、ちょっと待つてください」

「・・・どうぞ」

「あなたは誰のことを話しているんですか?」

「わた、私です。私の記憶です」

「あなたは14歳ですよね?」

「はい。一般的に言うと」

「でもお話では19歳や21歳の記憶が出てきた上に、おしまいにはお亡くなりになってしましましたが、その・・・ちょっと合わなくなっていますか?」

「あわなくない、ヒックとは『整合性がないのではないか』ヒックという、理解でよろしい、でしょうか」「よろしいです」

P.Pは鼻からちょっと手を離してみて、鼻血が出でこないのを確かめ、氷嚢をハロウの手から取つて自分で当てなおした。

「私は、先ほども申し上げました、とおり、フィリップ・オリジナルの、同一固体です。フィリップ・オリジナルの、クローン体のうちの、一体です。Dr.A.Aは、自分の、息子である、フィリップ・アンテノワ、が、2596年の、5月、に、死亡してしまったことを、受けて、脳、から、記憶を、複製し、私に、移植しました。ですから、私には、フィリップ・アンテノワの、21歳までの、記憶が・・・・あります」

ハロウが自分の頭のなかを必死で片付けていた。P・Pは検査室の隅にある（でもかなり大きな）流し台で顔を洗い、もう一度咳払いをして呼吸を整え、ついでに髪の毛も整えた。

「ピピッ処置が完了しました。接続を再開します」「ピピッご苦労。必要なら検体1号には拘束服を」「ピピッ了解しました。経過を観察します」ストライクはベッドにじろりと横になつて

「病気になりそう」と言つた。

「でも病気になるときつとますます出られなくなるぜ」チップが言つた。たぶんその通りだう。

(3)

翌朝4面真っ白な部屋で目が覚めてみると、ここは毎日（射られてから毎日）感じていた、足が突つ張るような感じがいきなりなくなつていた。

「お？」

ためしに立ち上がりつてみても全く痛みがない。むしろ巻かれている包帯がくすぐつたくて邪魔なくらいだ。

「おおお？」

まさかきれいさっぱり治つてゐなんて言つんじゃないだらうな？と思つてズボンをおろすと、片方の壁が全面さつと透明になつて向こう側にP・Pが立つていた。

「うはつ・・・

「大胆ですね」

夕食もそつたが、朝食もまた分厚いクッキーみたいな何かぱ

さばさとした食べ物だった。それに薬臭い飲み物がつく。こんなもんで腹が膨れるもんかと思ったが、食べてみると意外なほど満腹になってしまう。

P・Pが検査室に来てくれと言うのに行つてみると、まず顔の絆創膏を剥がされた。今回は絆創膏の材質のせいか、あまり痛くなかつた。

「ふむ。上皮化していますね。良好です」

P・Pの頬は腫れていなかつたが、赤黒いあざができていた。「色素斑ができやすい状態になつていますので、暫く保護しておきます」

「それつてどうこいつ」と?

「紫外線によるメラニン色素の生成と沈着が起こりやすいとこいつ」とです

それつてどうこいつ」と。

ストライクがもう一度首をかしげると、ハロウが入つてきて「そこだけ日焼けしやすいことだと思いますよ」と言つた。

「ピピッピピッとして粗野で低脳な、口を利く価値もない者のレヴュエルに合わせて話をしてやらねばならんのだ。全く時間の無駄だ」

かちんと来たが殴つたらまた痛い思いをするのはP・Pだけなんだろう。ストライクは今回はこらえることにした。なんでこのDr・A・Aとやらはたまに出てきて嫌味ばかり言つんだろう。

「ピピッ足の方を見せてください」

足を出すると、P・Pは変な形のはさみで包帯を切つてしまつた。脚が剥きだしになる。朝の感じの通り、もう傷穴は塞がつて、ほんの小さな桃色の跡を残すだけになつていた。

「すげえ」

「良好ですね。こちらは衣服に保護される部位なので、もう衛生材料で覆うこともないでしょう。細胞の状態を検査したいので大腿部の皮膚片を少し取りますが、それもすぐに治癒するはずです」

「なにこれ?俺ずっとこのまんま?怪我してもすぐ治るの?」

「いえ。顔の切創に関しては、あなたの活発な細胞と、細胞の活性化を促す薬剤をませてドレッシングしただけですので、もつそいつた治癒力はありません。右大腿部の刺創に関しては、その部分だけなら2週間ほど効果は持続すると思います。もしかしたらもっと長いかもしだせんが」

「顔はもう普通、足もちょっとしたら普通になるってこと?」

「そうですね」

ストライクはでかい流し台まで歩いて行って鏡を見てみた。昨日の明け方にチップに引き裂かれてできた傷口は、ちょっと白いだの線になっていた。

うそだろ。昨日だぜ。あんなに血が出たのに

触れてみたけど傷口は嘘でしたなんて言わなかつたし舌も出さなかつた。ちゃんと繋がつて、やわらかい新しい皮膚がすぐすべくと育つていた。

「すごい」

ふらふらとスツールに戻るとP・Pは、厚めでとても柔らかい白衣テープを頬の傷に張ってくれた。子どものようにとても嬉しそうに笑っていた。

だけどその笑顔は長くは続かなかつた。

「ピピッして。ところで昨日わしは調べものをしていたのだが、興味深い事実が2・3あつてね。まずハロウ・ストーム。君にはとも熱心な覗き屋がついているよつだ。君に関してデータを取つたところ、あらゆる項目にウォラ・デイモンという若き女性記者がついて回つている。そうだね?」

「そうですね」

「そして君はその記者の紹介で、ある少女の家を定期的に訪れていた。そうだね?」

「そうです」

「そして君はスキャンダルを起こしているね。その件でだ。ところ

が肝心のスキヤンダルの中身が　　」

「消えているはずです。公式には」

「その通りだ。オルフェリウス氏の手際はよほどよかつたようだ。スキヤンダルの中身に関するあらゆる情報が消されている…大したものだ」

「知っている人には消しても消さなくとも知られていることです」「わしはそういう文型の人間がよくやるような言葉遊びが大嫌いなんだよ、ハロウ・ストーム。单刀直入に聞くがね、これは何が起こったんだね？」

ストライクがハロウを見ると、ハロウはストライクとP・Pの両方からきつかり等間隔の場所に立つて、はじめて見るような、挑戦的な（としか言いようがない）顔をしていた。単にむかついてるだけかもしれない。何しろこのDr・A・Aの話し方といつたら、内容がたとえ自分に無関係であつてもどことなく神経を逆なでしてくれるので、ストライクはさつきからすでにうんざりしていたのだ。P・Pのほうがずっとかわいげがあるつてものだ。何言つてるのか6割くらいわかんないけど。人間は年を取ると丸くなるんじやなかつたのか？

「何が起つたんでしきうね？」

ハロウがそう言って口角をちょっと上げると、Dr・A・AであるところのP・Pは、眉間にしわを寄せて椅子から立ち上がり、ハロウを「生意気な小僧が」と今にも言い出しそうな顔で見上げた（実際身長差が20センチほどあった）。

「そういうつもりならいいだろ？ こちひで勝手に調べさせてもら

う

「ピピッ 接続解除」

戻ってきたP・Pは、何事もなかつたかのように、ストライクの

脚からピンセットでぴとほんの少し皮を剥ぎ取つてつきつけヒシヤーレに入れ、そのまた断片でプレパラートを作り出した。

「ハロウ、あのじじい嫌いだろ？」

ストライクが言うとハロウは

「少しね」

と言つた。絶対ウソだ。

(4)

チップがぎやあと叫んでしつぽを太くして走つてきたのはその日の午後だつた。また電気ショックでも受けたのかと思つたら、そうではなかつた。

「ひと、ひとひとひとがいつぱいいる」

チップの大きな縁の目は8割が真つ黒な瞳孔になり、耳がぎゅつと伏せられている。

「ひと？」

「すげえきもちわるい人がいつぱいいる」

その時検査室にはハロウとストライクしかいなかつたので、二人はチップについて白い廊下を歩いていった。

「ひとがいつぱいぎゅうぎゅうにつまつてる」

「なんだそれ」

昨日案内してもらえなかつた渡り廊下を下り、倉庫のような扉を開けると、中は灰色でひどく寒かつた。目の前はいくらか開けていたが、両側に5・6メートルにもわたつて何か大きな箱のようなものが積み上げられていた。ちょうど人が一人分入るくらいの大きさで、側面のガラスが白く曇つている。

「よく見てみな。この箱の中身」

ハロウがすつと右横の箱の腹を撫でて霜を払い、中を覗き込んだ。

「ああ。本当だ。人間ですね」

「まさかこれ全部？」

ストライクが倉庫の中を走り回ると、倉庫はまるでどこかの劇場くらいあって、何列もガラスの棺おけが連なっていた。箱の中身はあらゆる人種の人間で、みな一様に若々しかった。

「うわあ。気持ちわりい・・・」

「獣人が一人もない」

「作り物ではありませんよね」

「それらは移植用のストックです、検体2号」

突然空中にまたしてもP・Pが現れた。

「気温調整が狂つてしましますので検査室に戻つてください」

3人が検査室に戻ると、P・Pはぽかんと空中を見つめていた。
「結構です。温度・湿度ともに戻りました」

「わかるんですか？」

「昨日も申し上げましたが、この研究所は私の管轄です。この研究所のどこで何が起こつても、情報は速やかに私に伝達されますし、どこにでも私には3次元映像を中継して警告を与えることができます」

「なんでわかるの」

「私の脳には2枚のチップが入っています。一枚はD・A・Aの意識を受信するチップであり、もう一枚は、この研究所のメインコンピュータにデータを送受信するためのチップです。その2枚目のチップによって、私は常時メインコンピュータとそこから繋がるネットワークにアクセスすることができます」

「俺には入つてないね」

チップが体をまるめながら言った。

「それによつてこの研究所の中の出来事はすべて私の知るところになりますし、私とメインコンピュータにアクセスできるD・A・Aの知るところでもあります」

「ということは？この研究所のどつかで例えばハロウと一人きりで

話をしても、P・PやD・A・Aにはつづけになることがありますか？」

「いつもです。多少のタイムラグはあるかもしれません、基本的にすべてログを取っていますので、数時間後には確実に伝達されます。まあ全てのログを長期保存するわけではありません。ログは保護されたもの以外は1ヶ月で破棄されます」

「気持ち悪いなあ。さつきの氷漬け？の二ングンもさあ、そーいう盗み聞きもさあ、気持ち悪いよこい。なんだよ」

チップはベッドの上で後足をせゅーっと伸ばし、もう一度ぐるりと体を丸めた。文句を言しながらも寝ることにしたらしく。

「先ほどの倉庫にあるのは、申し上げましたとおり移植用の人体です。この研究所ではクローンでああいうものを作り、移植できるまでに成長し、異常が見られなければ倉庫に冷凍保存します」

「ペッジ お前たちはこれほどの施設がわし一人の蓄財で130年も運営できると思うのか？お前たちがさつき見たものは金のなる木だ。あれは各国の金持ちのクローン体だよ。あれを保存してやっている限り、奴らは無尽蔵にわしに金を払い続けるのだ。自分の新しい臓器の保存料金としてな。他ではクローン体すら満足に作ることはできんのだからな。ハロウ・ストーム、貴様の父上はまだクローンを作っていないようだが、これからは臓器不全に備えて作ってやってもいいぞ。無論高くつくがね。ははは」

「ペッジ」

P・Pが戻ってくると、心なしか悲しそうな顔をした。

「昨日」案内しなかつた、フィリップ・オリジナルの部屋から続いている倉庫の方は、私たちの倉庫です。あの倉庫には、私と同一の個体がストックされています」

「はあ？」

「私はP・P3062号です。3062体目のクローン体です。倉庫の中には、部分的に異常があつて私のように覚醒状態に入れないと、N0・3063から3100までの成長途上のクローン

体が合わせて300体ほどあります

「どうしてそんなに？その・・・どうしてなんですか？」

P・Pは目を上げてちょっと正面を見た。ストライクはやつとそのしぐさが、P・Pの左の目にあるモノクルを見つめているのだとわかった。たぶんあれにいろいろなお知らせが写るんだろう。ただ今のお時間とか。明日のお天気とか。

「Dr・A・A、メンテナンスのお時間です。回線をシャットダウントします」

「ピピッ了解。また後ほど。ああ、ストライク、面白いことが起ころよ。楽しみにしておくといい」

「は？」

「ピピッシャットダウンピッ」

「何だ今のは？」

P・Pはストライクの言葉を無視して話を続けた。

「なぜ私と同一の個体が300もストックされているかという話でしたね。長い話になると思います」

P・Pは憂鬱そうにちょっとこじめかみを触り、話し始めた。

「・・・・Dr・A・Aが、フィリップ・オリジナルの死に際して最も重要視したことは、記憶の引継ぎという点でした。フィリップ・オリジナルが死亡した際、Dr・A・Aは直後に遺体を研究所に運び、記憶を複製しました。なぜならDr・A・Aには、新しい健康な肉体をいくらでももう一度生み出すことができたからです。クローンでフィリップ・オリジナルの体を複製し、記憶を移植できれば、それはフィリップ・オリジナルそのものです。しかしこれまでクローンから臓器の移植を受けて若返り、あるいは長く生きた人はいても、記憶の移植を受けたものはいませんでした。また、フィリップ・オリジナルの死はあまりにも突然だったため、移植可能なクローン体が作られていなかったのです。だからDr・A・Aは記

憶の複製をデータ化して保存した一方で、クローン体を作り、移植可能になるまで成長を待ちました。

2616年に一体目のクローンが完成し、Dr.A.Aはまず、フィリップ・オリジナルの保存してあつた脳そのものを移植しました。これが一番確実な方法と思われたからです。しかし手術は失敗に終りました。正確に言うと手術の失敗ではありません。オペレーションは完璧でした。その頃はまだDr.A.Aはクローディア・ゲールアカデミーの教授でしたので、その時に成し得る最高の助手と外科医と機材によつて、奇跡とも言える脳の移植が完成しました。その時のオペレーションの様子は、今でも国立情報博物館で映像データとして閲覧できます。閲覧には医師免許が必要ですが、しかしフィリップ・プロトタイプ1は目覚めませんでした。

なぜなら移植された時にすでに脳は死んでいたからです。脳死状態の脳を移植しても、脳は生き返ることはありませんでした。術後3ヶ月でP.P1号の延命装置は切られ、肉体の方も生命活動を停止しました。その後Dr.A.Aは、残されたフィリップ・オリジナルの記憶データをクローン体に復元することを模索し始めました。時を同じくしてDr.A.Aは大学を離れ、クローン技術によって莫大な資金を得て、この研究所を立ち上げ、独自に研究を進めました。P.P2号～1200号までは脳に記憶の一部なりを移植する練習代となりました。その段階で、脳にフィリップ・オリジナルの脳が生きていく間に受けた刺激を、そのまま電気信号に変換して複製する技術が確立されました。2000番台からはそれを本格的に取り入れて、実際にフィリップ・オリジナルを複製する段階に入りました。しかしやはりプロトタイプの脳にインプットされた記憶は完全なものではありませんでした。その頃にはこの研究所は、常時10人ほどのP.Pで管理されていました。また、その時期にDr.A.Aは肉体の老化による衰弱を予防するため、現在のようにDr.A.A自身が2684年に開発した、代謝を極度に抑制

するティターン溶液の中で生活するようになりました。そして27年、私がフィリップ・オリジナルの記憶の複製を完了したのを受けて、その他のP・Pたちは分解されました

P・Pはそこで一度話を区切った。遠くから生き物みたいにワゴンがコップを載せてやって来て、忠実な犬みたいにP・Pの横にぴたりと止まった。P・Pは疲れたようにコップを取り一口飲んだ。

「分解？」

「処分されたということです。彼らはやはり完全な記憶を持つていなかつたのです」

「私は俗に言う11歳の時に、フィリップ・オリジナルの21歳までの記憶の移植を完了しました。私の記憶は、これまでのP・Pたちの記憶が比較的不安定で、整合性が保たれなかつたのに比べれば完璧でした。私は何月何日にパパどこで何をしたのか、例えば2582年の8月2日はどうにいてどんな授業を受けたのか、友達の名前は誰だったのか、全て答えることができました。またそういう出来事による刺激の強弱も正確に引き継いでいました。脳の刺激する部位の研究が進んだことと、フィリップ・オリジナルの記憶データだけによらない、客観的なデータ・・・例えばフィリップ・オリジナルの通つていた大学の外見や友人の写真など・・・を交えて移植したことが、より明確な引継ぎを可能にしたのです。ですからDr・A・Aはこの研究を終了し、それまでのP・Pたちすべてを破棄しようとしたしました。しかし、Dr・A・Aと暮らすうちに、私がDr・A・Aが理想としていたような記憶の引継ぎには成功しなかつたことが明らかになりました。

「フィリップ・オリジナルと同じ反応を私は返すことができなかつたのです。Dr・A・Aはもう一度研究を再開しました」

P・Pはもう一口液体を飲んだ。

「だから、倉庫にはまだたくさんのクローン体があるのです。ただ、私と作成日が近いクローン体がおらず、まだカプセルの外に出せるほど成長した個体がないので」

私が今のところは研究所を統括しているのです

とP・Pは口を閉じた。P・Pは隈のできた不健康な顔をしていた。

「つまり、息子さんをもう一度新しく作りだすために？」

ハロウが聞くと

「私も遺伝子的には同一なのですけれど」と言ひて、P・Pは色素の薄い目を伏せた。

(5)

その時突然ポンポンと、耳慣れない高く澄んだ音が響いた。

「通信です」P・Pが言つた。

「恐らく検体2号への通信だと思ひますよ。回線を開きます」
P・Pはきっと顔を上げて虚空を見つめた。(モノクルを見ているんだろうけれど。)

「接続しました。お名前どり用件をどうぞ」

「…………ゴージーンといつ者です。そこにハロウ・ストーム
はいますか」

「います。ハロウ・ストームとの通信をじょ希望ですか？」

「ええ。お願ひします」

「じゅうど」

突然水を向けられて、ハロウは明らかに面食らったようだった。

「どうぞ。どうすればいいんですか？」

「そのままそこでしゃべってください。私の耳に入った音声が、そのままあちらの方に向ります」

「あなたが受話器とこうじですか？」

「そうです。どうも」

「何を？」
「ハロウが死ねばよかつた」とつぶやく。

ストーム

ストライクはその声でその電話の向こうの女のことを思い出した。ルーの家にいたときに電話をかけてきて、ハロウに死ねばよかつたのについて言つた女だ。すごい。そんなにハロウがキレイなら電話なんて掛けこなればいいのに。

音は先ほどのポンポンという音がそうであったように、どこからともなく聞こえてきた。きっとこの研究所のどこかにいたって聞こえてくるんだろう。ひどい話だ。ここではひみつの電話もできたりしない。

ハロウはひとつため息をついて口をひらいた。

「久しぶりだね、ゴージーン」

「久しぶりじゃないわよ、あなたやつぱり箱を盗んだのでしょうか?どうやったのか知らないけどあなたなんでしょう?どうしてそんなことをするの?これ以上うちの家族を傷つけてしまうつて言つたのよ?あの箱があなたあの箱だつていつ証拠もあるの?あなたにはあの箱が開けられた?」

「…………まだ開けられていませんよ」

「そうでしょうね?あなたはあの子のことなんて、なんとも思つていなかつたんでものね?あの子は本当にあなたのことが好きだったわよ?それなのに、あなた妹が危篤のときに他の女の家に行つていたのよ?わかってるの?それはあなたが選んだことなのよ?わかつてゐるの?」

「いまさらあの子のことを理解してたふりするんじゃないわよ。あなたなんて絶対にその箱は開けられないから！」

ガランガランとものすごい音がしてストライクは耳を塞いだ。チップがうるさそうに耳を伏せて眉間にシワをよせた。まるでかみなりが落ちてきたみたいだった。暫く広い研究所にその音がこだまして、P・Pはこめかみの両側を指でさすつた。

「回線切断。相手が接続を切ったようです」

ハロウがもう一度ためいきをついた。

「それにしてもどうやってここのことがわかつたんだろう」

「Dr・A・Aでしょう。あなたの『スキヤンダル』に関して、かなり広範囲にアクセスしていましたから。次のP・Pたちが育つまでDr・A・Aは退屈しているのです」

ハロウは「それであなたは平氣なんですか」と言った。

でもストライクは「人の気持ちを考えている場合か」と思つた。

「今のが『スキヤンダル』の骨子ですか」

P・Pはとても单刀直入に聞いてきた。Dr・A・Aの息子だからなのか、単にハロウの気持ちを慮る気がないだけなのかわからなかつた。

でもハロウは意外と気丈だつた。

ストライクがここ2週間近くハロウと一緒に過ごして発見したのは、ハロウはちょっと（かなり）ズレてる部分があるにせよ、うるさいことは言わないし、とても辛抱強いタイプの人間であるということだつた。金持ちの息子なんてみんなすぐに我慢を言つて泣き出するものだと思つていた。

「そうですね。『スキヤンダル』の骨子です。むしろ今ので全部です。骨子どころの話ではありません」

「でも色々な想像の余地が残されていますよね？ 今のお話だけでは。そうではないですか？」

「そうでしょうか」

ハロウは検査室のすみに置かれていたトランクから、例のパンドラ・ボックスを魔法のように取り出して、デスクにことんと置いた。

「僕は僕を慕つてくれていた少女が死のふちにあるのをわかつた上で、他の女の家に行つたのです。それだけです。どこに想像の余地があるんでしょう？」

P・Pは恐れを知らぬ瞳でまっすぐにハロウを見つめた。

「例えば」

「現代がいかに情報を制限されているとしても、公式な記録に一度でも取り上げられた事件をすっかり消してしまるのは、一般的ではありません。あなたの父親がそれを行つたのには、何か理由があるはずですね」

「では想像してください」

ハロウが箱に視線を落として言つた。

「どうぞ想像してみてください。あなたたちが思つほど、複雑なことでも面白いことでもありません」

ハロウの手がそつとパンドラ・ボックスのスイッチを押すと、箱からはいつものように「パスワードをどうぞ」という女の声が聞こえた。

その女の子の箱か。あの子ども部屋は、ハロウを好きだつた女の子の部屋だったのか。

でもストライクは想像するのをやめようと思つた。今のところは、勝手に想像すればするほど、ハロウが傷つくような気がしたからだ。

(6)

P・Pは何気なくそのパンドラ・ボックスを手に取つた。

「これが先ほど通信に出でてきた箱ですか？」

「そうですね」

「開けられないんですか？」

「パスワードがわからないので開かないのですよ

P・Pはその箱をぐるぐると手の中で回しながらしげしげと眺めた。

「中身を見てみましょうか？」

「そんなことができるんですか？」

「X線映像を撮ることができます。ただし、X線に感應して中身によつては正常な状態が保たれないかもしません。どういったものが入っているかわかりますか？」

ハロウは力なく首を横に振った。

「まるで見当もつきません」

P・Pがためしにスイッチを押してみると、やはり機械的な女の声が聞こえた。

「やめておいたほうがいいかもしませんね」
軽く箱を振つても何の音も聞こえない。P・Pはもう一度手につかりと箱を持って、観察を始めた。やがてある一箇所をモノクルごしに見て何度も指でこすつた。

「ここに微細な凹凸があります。人為的なものだと思われます」「わかるんですか？」

P・Pが注視しているところは、ハロウやストライクから見れば全くの平面だつた。

「モノクルはサーモグラフィ機能もあります。ここだけ温度が違います

「どこ？」

P・Pは、まるでキャンディ・ステイックみたいに真っ白でつるりとしたペンを、デスクの中から取り出して、箱に直接注意深く薄く線を引いた。

「Lの部分です。Lの直角に線が入っています。外れるのかかもしれません」

「ちょっと貸してみな」

ストライクが腰の小物入れから出した古いナイフで、P・Pのペンの跡を丁寧になぞつた。ナイフの刃が当たるたび、ペンのラインはペンキがはがれるみたいに落ち、3センチほどのふたが現れた。指を乗せるとふたはほんの少しだけめりこみ、しゅっと内側に滑つて行つてしまつた。

「なんだこれ」

「よく見つけました！スタート！」

そして箱は初めて言葉を話した。よく見つけました、スタート。その声はこれまでのよつたな女の機械音ではなくて、弾むよつた少女の声だった。

「リリイ」

ハロウはストライクから箱を奪い取ると、もう一度その新しく出てきたスイッチを押した。でももう箱は何も言わなかつた。

「りりい？」

そしてハロウも何も言わなくなつてしまつた。

「何かの仕掛けがあるようですね。パスワードとは別の開ける方法があるのかもしれません」

P・Pは、デスクの上に直接さつきのペンで立方体を描いた。

「それは一種のジョークボックスのようですから、例えばからくり的な趣向を凝らしてある可能性があります。ある一定の手順を踏めば箱が開く、あるいは別な仕掛けが稼動するというような」

ハロウは一番最初に出会つたときのよつた、とても切羽詰つた青白い顔で手の中の箱を見ていた。

P・Pが書きなぐつた箱の絵は、薄青く光つてゆつくりと消えて

い
つ
た。

それでは次のヒント（一）

（一）

そのまた次の日になると、もつ傷は頬も足もほとんどなくなつてしまつていて。しかしP・Pには頬にテープを張られた。

「なんだ。もう治つてるじゃん」

「昨日もお伝えしたとおり、色素斑ができやすいんですよ。あと一ヶ月はこうやって保護しないと、この傷の形に一生色素が沈着してしまいますよ」

「一ヶ月も貼つてたらテープの形がほっぺたに付いちまつよー。」
でもP・Pはテープを剥がしてくれなかつた。

「テープによつてかかる圧力、テープの素材、紫外線量、あなたのアレルギーの有無を考えても、そんなことはありません」

P・Pの診察が終わると例によつて何もやることがなかつたので、研究所の中を歩き回ることにした。P・PもDr・A・Aも止めないから問題ないのだろう。単にどこで何をしていても筒抜けだからかもしれない。

ハロウは昨日の夜に自分のコンパートメントに入つてから全く出てこなくなつてしまつた。

途中から見るからにヒマそうなチップも合流してきた。
「よ。めぼしいものはあつたのかよ」

「ばか。盗んでねーよ」

「いつまでもつかな」

やれやれ。この猫には最初から信用されていない。

ストライクは自分の首にかかつたまま、イグナシオからつけられた聖印の首飾りに軽く触れた。とても古い銀細工の首飾りだった。いびつなトンボ玉がいくつか入っている。

箱を開けにかかっているハロウの邪魔をしないよう、コンパートメントを迂回して、P・Pのオリジナル フィリップ・アンティノワの遺体の部屋を通る。

どうして死体をこんな風に飾つておくんだらう?

Dr.A.A.だつて見ていて不気味だけど、あつちは少なくとも生きている。

渡り廊下の向こうで「ポン」と音が聞こえたので、チップと一緒に入つてみた。どうせだめだつたらP・Pがゆうれいみたいにポツと出でくるんだ。こちらの部屋はP・Pが自分と同じ個体がストックされていると言つていた部屋だつた。ストライクはちょっと想像してみた。部屋の一面を埋め尽くす死体みたいなP・Pが入つた箱。それが一体どういうことなのか考へる前にチップが扉を開けてしまつた。

中はストライクが想像していたようなものではなくて、ちょっとした実験室みたいになつていて。病院とそつくりな検査室に比べれば、ずっと本物の実験室に見える。でもやつぱりただの実験室ではなかつた。入つて2メートルばかり右手にガラスの壁があり、その壁で部屋は一分されていた。ガラスの奥にはやはり昨日の「ストック」たちのように、ガラスの棺おけがずらりと積み重なつていたが、一番向こう側の奥には、昨日の「ストック」の倉庫にはなかつたよう、とてもでかい試験管みたいなものが並んでいて、中に何か入つていて。遠くから見たらピンク色のボールのようなものだつた。

ポン、とまた音がした。音は左側から聞こえた。
チップが左の耳をくるりと向けた。

その左側の部屋、ガラスの壁のこっち側は、一番奥に5人は掛けられるような横に広い机があり、キャスターと背もたれと肘掛のついた椅子が一脚あり、机の上には普通の大きさの試験管と、気まぐれに捨てられたような注射器、半分ほど入つた液体が少し蒸発して濁つてしまつているフラスコが載つていて。なんだかずいぶん長い

ことほつたらかしにされたみたいだ。机のはしに、昔は白かつたんだろう紙ががさがさと積み上げられていた。今は黄ばんで端が丸まっている。そのまた左の奥にはまるでピザ屋にある窯みたいな、でも白くてステンレスのふちがついていてまるで

「豪勢な棺おけ」

チップがくんくんと鼻を動かしながら言った。そんな感じだった。またポンと音がした。音はこの棺おけから出ているらしい。その3倍サイズの棺おけは、黒い大小の箱で囲まれて、たくさんのコードで繋がっていた。黒い蜘蛛の巣の上に棺おけが載ってるみたいだつた。横っ腹に10センチくらいの丸い穴が5センチ感覚で3つ並んでいて、中が見えるようになっている。ちょっと覗き込んでみると、中にはとても小さい体があった。子どもの体が液体に沈んでいる。

「うわ・・・」

チップが中をちらりと見てまさに一瞬で扉に駆け戻ってしまった。ストライクも逃げたかったが、それがどうなっているのか理解できなくて逃げそこなった。中の子どもは、顔がぐっちゃりと潰れている。スイカが割れたような赤い肉がこちらを向いて揺れていって、顎くらいまでをすっかり隠している。そしてその皮と肉と骨の隙間に、がつちりと金属の薄いプレートが差し込まれて、頭蓋骨があるべきあたりをヘルメットのように覆っていた。ヘルメットには太いコード、細いコード、あらゆる色のさまざまなもの「コード」が繋がっていて、頭を棺おけの奥に固定していた。

「う・・・」

ストライクが吐きそうになつて屈みこむと、P・Pが予想通り空中に現れた。

「ここで嘔吐するのはやめてください。その棚の3段目にガーグルベースがありますので、その中に吐瀉してください」

ガーグルベースって何だよ

ストライクはなんとか吐き気を押さえ込んだ。

「なんだこれ。病氣？死んでる？頭割れちまつてるぞ」

チップが恐る恐る戻ってきて、屈んだままのストライクの背中をしつぽでばんばんと叩いた。介抱してくれているつもりらしい。

「昨日も申し上げたと思いますが、ここはファーリップ・プロトタイプのストックの倉庫です。つまり」

「つまりその頭割てるのもP・Pなのか」

「そうです。それはP・P3065号です。3063と3064は、それぞれ身体的に異常が見られたので移植用ストックとなりました。今、P・P3065号はファーリップ・オリジナルの記憶を脳に移植しているんです」

「それでなんなんだな、頭剥いてんの?」

「記憶の移植は脳の対応する部位を刺激することによって進行します。脳に直接電流を流す必要があるのです。だから頭蓋骨を外して脳を露出させ電極を」

ストライクはもう一度吐きそうになった。その時本物のP・Pが後ろから近寄ってきて、そら豆の形をした深い洗面器みたいなやつを差し出した。同時に田の前に浮かんでいた方のP・Pがぱつと消えた。

「これがガーグルベースです」

「・・・いや、いい。だいじょうぶ。うつぶ。こうやって記憶を移植してるってこと? 顔がぐちゃぐちゃだぜ」

「こうやって約11年かけてファーリップ・アンテノワの21年の記憶を移植します。皮膚を筋肉組織から剥離し、引き下ろしています。時が来れば別な場所で培養している頭蓋骨をはめ込み、皮膚を元の位置に戻します。成長によつて足りなくなつた分の皮膚は遺伝子的・肉体的に欠損が見られたP・Pから移植します」

そしてやはりストライクはP・Pの手からガーグルベースを奪い取つて吐いた。

「私がそうやってできたP・Pの3年目です」

言われて落ち着いてよくその棺おけの中の子どもを見ると、ちょ

つとだけ見えて、る顎のラインはP・Pに似てこるよつた気がした。
「つまりこの子どもはあと何年かしたら、お前と全く同じになるつ
ていうこと?」

「あるいはフイリップ・オリジナルと全く同じ」
P・Pは手を伸ばして棺おけの窓に触れた。窓はさつと白く曇り、
中でだれかの記憶を植えつけられているP・Pをほんのつかの間隠
した。

その指は細く幼く、P・Pの顔だつてたつたの14歳だった。

(2)

またポンと音がした。

「ペペッ」

P・Pのゆびが今つけたばかりの、ガラスの白い曇りをぐりぐり
と拭き取った。そして右の目をきゅっと寄せて中を覗き込み、ぐに
やと唇を歪ませて笑つた。

「やあストライク。元気そうだね? 実は君に折り入つて頼み」とが
あるんだよ」

ストライクは顔をしかめて白衣のP・Pの横顔を眺めた。

「そんな顔をするな。君にならきっと簡単にできることだ。まさか
傷を治してもらつてそのまま出て行こうなんていう恩知らずでもあ
るまい」

ねちつこに蛇のような話し方にストライクはぞつとした。見た目
は変わらないのに、中身がD・A・Aになつただけでどうしてこ
んな落ち着かない気分になるんだが?」

「箱があつただろう、ストライク

「・・・箱?」

ハロウの箱? 箱? どの箱のことだ。

「察しが悪いな。やはり頭の回転がよくないよつだ。わしが言つて

いるのはあの教会にあつた箱のことだ」

「そー言えばあんたたちが教会に来たのはあの箱のことでだつたなあ」

チップが腕を組んで扉のすぐ横によりかかった。Dr.A.Aはチップの言葉を無視した。

「あれを手に入れてほしい。方法はお任せしよう。準備が必要なものがあればP.Pに言え」

「は?」

「君になら簡単だろう。引き受けてくれ」

「何を言つてるんだ?」

「君はわしが思つてゐる以上に頭が悪いらしいな。しかし能力といふものは学術的な事象にのみ發揮されるものではない。例えば君の窃盗の技術がそうだ。知能指数がわしやP.Pよりも低くても、わしやP.Pよりも技巧的に技術を習得し行使することができる。無論使用している脳の部分が異なつてゐるからだが、君に説明してもわかるまいな。あの箱を盗んでここに持つて來てくれ」

俺がチップならとっくにしつぽが太くなつてゐるころだ、と、ストライクはゆっくり呼吸しながら思つた。猫のしつぽを羨ましく思つたのは初めてだ。

「なんであんたみたいなやつのためにあれを盗んでこなくちゃなんねーんだよ。絶対やらねーからな。大体P.Pには恩もあるし感謝もしてゐるが、あんたにはずっと罵倒しかされてねーよ。あんたのために動く義務はないね」

「罵倒か。これは失礼。わし自身に二〇〇年ほどP.Pとしか口を利いていないのでね。わしの話が理解できないような人間との話し方を忘れてしまつたのだよ。ところでストライク、君は『ドミニ倒し』という遊びを知つてゐるかね。全ての文明を破壊したと言われる、第4次大戦の中にも生き残つた数少ない古き善きゲームだよ」

Dr.A.Aは手前にあつた椅子を引き寄せ、どつかりと腰を下ろした。椅子はきゅうとさび付いた声を上げた。生つちろい小さな

顔は、白い棺おけ（3065号が入っている装置）の覗き穴から淡い青緑色の光を受けて満面の笑みを浮かべている

「知らんかね。ドミノという牌をいくつも並べ、最初の一つを倒せば連鎖で全ての牌が倒れるようにする遊びだよ。ただ全てが倒れればいいのではない。その連鎖はある一定の軌跡を描かなければならない。その軌跡は複雑であればあるほど、その連鎖は長ければ長いほど美しい」

「それがなんだって言うんだ」

「例えば一つ目の牌。君がケットローグで捕縛された時の3人の共犯者だが、そのうちの2名がその後別な場所で逮捕されている。一人は自分たちがある集団に属していたと自白している」

D r . A . A は面倒くさそうに白衣のポケットから布切れを取り出し、左のモノクルを左手で支え、右手で挟むようにして拭いた。

「一つ目の牌。さて、その集団について調べてみると、どうやら窃盗を始めとした犯罪組織らしい。ただし小規模で犯罪としても軽度のものだった。だがどうやらここ一年で、それまでとは異なった事業に手を出し始めたらしいね」

「三つ目の牌。残る君のお友達の最後の一名は、ミストハウバーンの街で死亡が確認されている。名前を知りたいかね？君の友達だと思うよ。プロウドという男だ。その遺体には特徴のある凶器が使用された痕跡があった」

扉がゆっくりと開いてハロウが亡靈のように滑り込んできた。でもD r . A . A は話をやめなかつた。

「4つ目の牌。死亡が確認された君のお友達、憐れなプロウド氏の死体に残された凶器は、他の事件でも同型のものが見つかっていた。3件ほど犯罪組織の上層部と言われる人間が暗殺された事件だ。とても特殊な凶器だからね。間違えようがない。時代錯誤もはなはだしに、それは弓矢だ。ちょうど君の大腿部にあつた傷と同様のね。ただすべて一撃で絶命させていため・・・・無論君を除いてだが。暗殺者には『魔弾の射手』などという小さかしいあだ名が付

いている。元となつたオペラにおける『射手』とは銃の射撃手のことであると言つのにだ」

「5つ目の牌。ブロウド氏はどうやら属していた組織の私刑として殺された可能性が高いと見られている。それがなぜ他の暗殺事件に使用されたのと同じ方法なのか?つまりブロウド氏及び君の属していた組織の新しい仕事は暗殺だということだ」

「6つ目の牌。14年前のある記録が残つている。一人の人間男子の兄弟がハンナ・ウォルスキート養児院に引き取られたという記録だ。兄弟の年齢は不明であつたらしく、年齢欄には「一人とも5~7」と書き込まれている。二人の呼び名はストレインとストライク。二人とも黒髪、黒い瞳、健康体。白人と見られるが、黄色人種の混血の可能性あり。そしてその3年後の記録。ストレイン、ストライク、脱走により所在不明。ふふふ、このハンナ・ウォルスキート養児院は7年前に児童虐待と不正労働で告発されて消滅したよ。実際はどうだつたかね?」

ストライクはその黒い目でDr.A.Aを睨み付けた。

「7つ目の牌」

Dr.A.Aはそんなストライクに向かつて歯をむき出しにしてにっこりと微笑んだ。

「二人は公的には未だに行方不明のままだ。だがここに不思議な記録がある。9年前の記録。これは町内新聞の記事だ。『サークスがやつてくる ドーラ・グランガーデン。来る7月23日、各地を旅する高名なサークス、ドーラ・グランガーデン一座がやってくる。綱渡り、空中ブランコはもちろん、人間ピラミッドや軟体美女など見たこともない夢の出し物が目白押し!中でも注目は若干9歳のストレイン君による射的。小さな体から繰り出される矢は決して標的を過たない』稚拙な記事だが内容はわかる。ここに射的の名手、ストレイン君が現れる」

「そんなんの偶然かもしれないだろ」

「問題はこの後だ。その2年後にこのドーラ・グランガーデンは路

上生活をしている孤児を拾つては芸を仕込み、それに向かない子供にはスリの技術を教え込んで町で財布を取つてこさせる、サークスを隠れ蓑にした犯罪者育成機関だったことが発覚し、団長以下成年12名が捕縛、18歳以下の少年少女13名が保護されている。その保護された少年少女の中に、ストレイン・ストライク兄弟が含まれている。彼らは慈善院に送られたとされているが、その後の記録はない」

椅子がきりきりと音を立てた。D·r·A·Aは長い机にひじをついてこめかみを少し触つた。そのしぐさはP·Pによくやるのに似ていた。

「本当はどこに連れて行かれたのかね。それとも逃げ出したのか？まあどちらでも大差ないが」

白い棺おけがまたポンと鳴った。

「次の牌。その2年後、ストライクという少年がたびたび補導されるようになる。主に窃盗罪。身元引受人はアルヴィル・ドーという人間男性ということになっているが、実際にはこの男性は存在しないな。そうだろう。戸籍も出生証明書もないのに運転免許証を持っている男がこの世界にいるわけがない。このころからすでにストライクはどこかの組織あるいは集団に拾われていたわけだ。さて、この軽犯罪常習犯のストライクとドーラ・グランガーデンで保護されたストライクは、君の反論も空しく同一人物だ。指紋を取られたらどう？そして無能な犬の警官どもが見事に見逃したようだがね、その指紋は14年前にハンナ・ウォルスキート養児院で指紋を採取され、11年前に失踪届けが出された当時8歳前後のストライクとも一致するのだよ。そして先日殺された哀れなブロウド氏もまた身元引受人にアルヴィル・ドーと書いていた。偶然だろうか？つまり君は巷で『魔弾の射手』と呼ばれている暗殺者と同じ集団に属していたと言つことだ」

「さあ。次の牌だ。P·P。あの写真を投射してくれ」

「ピピツ了解しました。25倍に引き伸ばして投射します」

「ピピッ」

空中に横3メートル、縦2メートルほどもあるスクリーンが突然現れた。そこに一枚の写真が写っている。それは一人の青年、あるいは少年の全身を遠目の俯瞰から写した写真で、ピンぼけな上に画質が悪く、細かい表情はちつとも読み取れない。だがそんなことは本当にささいなことだった。その立った感じ、鼻の形、髪の色

「ストライクじゃん？」

チップがすっとんきょうな声をあげた。

「そう。そつくりだ。さすが兄弟と言うべきかね。実際に2727年の9月にストライクはこの写真の主と間違われて事情聴取されている。まぬけなことに、事件の当日、ストライクが留置場に入れられていたのが証明されたので別人とわかつたのだが。これが『魔弾の射手』の現在唯一の写真だ。彼がストレインだね？」

「あんた何が言いたいんだ？ 勝手に人のことをかぎまわってくれたみたいだけどな。俺は何も言わないよ。あんたの調べたことは俺には関係ないね」

D r . A . A はにやにやと笑って「そつくりてくれて嬉しいよ」と言つた。

「さつきも言つたとおり、ドミノ倒しというゲームは手が込んでいるほど充実感が増すのだ。まだ牌は続いている。楽しみにしておくことだ」

「ピピッ」

ポンとまた音がした。

P . P はにやにや笑いが張り付いたままだつた表情を戻し、こめかみを指でさすつて目をつぶつた。

「昼食にしましょう」

4人がぞろぞろと廊下を歩いている間も、誰も一言も口を利かなかつた。

もぐもぐといつもの堅いケーキのよつな、ぱわぱとしたものを食べていると、チップがぱつりと「ルーのメシが食いてえ」と言った。チップは半分ばかり食べたところで食欲をなくしてしまったようだ。確かにルーの作ったご飯がとてもおいしかったことをハロウは思い出した。ストライクに半分食べられてしまつたハンバーガーだったて感動的だつた。あれは一体どういうわけなんだろう。ハンバーガーなんて材料をバンズに挟むだけみたいに思うのにね。

「どのような食事をしていたんですか」

P・Pは薬品臭い液体をストローで飲みながら言った。

「なんでもさ。サンドイッチ、ハンバーガー、ピザは生地を買ってきてたけどさあ、スペゲティ、オムライス・・・あー、ルーのチキンライスが食いてえ」

「そういうものは栄養価が偏つています。Jのーノートリシャス・バーの方が携帯性に優れ、腐敗しにくく、必要な栄養素を過不足なく摂取できます」

「だからさー、栄養がどうたらこうたらはどうでもいいわけよ。こんなのは味気ないだろ? あつたかくて肉とか野菜の味がするもん、食いたくなんないわけ?」

「味のするもの?」

「まさかこんなパサパサしたトリのエサみたいなもん毎日食つててうまいと思つのかよ? たまには生の野菜でも食つてみろつてんだ」

P・Pはどうしたわけか頭を抱えてしまつた。

「おい、どうしたんだ?」

チップが声を掛けてもぴくりとも動かない。

「そんな真剣に悩まなくていいだろ? ちょっと言つてみただけなんだからさあ・・・・なあ?」

「いや、今のが誇張表現だつたところ」とは理解しているんです。
ただ、少し混乱してしまつたんですね。」

「コンラン?」

「はい、ちょっと落ち着いて考えたいので出てください」

あまりに率直に出て行けと言われてしまつたので、3人は仕方なくそれぞれのコンパートメントに戻つた。

ストライクはすぐに自分の部屋に入つてしまつたが、チップはハロウの部屋にするりと潜りこんできてハロウが腰掛けているベッドのわきの床に腰を下ろし、顔を手で何度もこすつた。

「雨が降るんですか?」

「違うよー。確かに雨が降る前は落ち着かないけどさあ、それどこのとは関係ないよ。いつもやつてるよ」

ハロウはちょっとと頷いて箱を開けにかかりた。少しだけ前に進んだようだつた。まず最初のボタンを押すと隙間ができるので、そこをちょっとこじ開けるようにして側面を押すと、ある一面がざつとずれるのだ。そしてそうやって側面がずれた部分につまみが埋まつていて、起こして捻ると、端っこから6センチほどの削つたばかりのえんぴつみたいな形の棒が出てくる。そして・・・
そこからが全然わからない。この棒はどうして使うんだろう?朝からやつていてどうしてもわからなかつたから、もう一度P・Pに見てもらおうと思つて追いかけてみたらストライクとDr・A・Aの対決ー(とこうように見えた)にかち合つてしまつた。Dr・A・Aはどういうわけかそういうのがお好きなようだ。

「P・Pが考えたいことつてなんだろう?」

チップが壁に寄りかかつて目を細めながら言つた。

「なんでしょうね。こちらは色々と込み入つててわからないですね。もしかしたらあの食事しか取つたことがないのかも知れませんし」

「あり得るな」

「こここの奴らはおかしいよ」

壁越しにストライクが言った。

「頭がおかしくなりそうだ。『ストック』って一体何だよ？息子と同じものを作るってなんだ？183歳って何だ？あんなプールの中で何かの標本みたいに生きて、人のこと勝手に嗅ぎまわって何が楽しいんだよ」

壁からどん、と音が聞こえた。たぶんストライクが壁を殴つたんだろう。

「そうですね。なんだか違う世界にいるみたいだ」

「いるだろ。違う世界に。俺たちが一週間前まで住んでた世界には一日で傷が治っちゃう絆創膏もなかつたし、死体も飾られてなかつたぜ」

ストライクはだいぶ腹を立ててているようだった。D·R·A·Aの長い話がよほど頭に来てるんだろう。

「もうセー、そしたら帰ろうぜ」

チップが目をしょぼしょぼさせて言った。

「ここ居たつてつまんないしさー、俺まともなメシが食いてーよ。飽きたよ。もういいだろ。ストライクの足も治つたんだしさ。もうここやだよー」

「そうだな」

ストライクが壁の向こうで起き上がる気配がした。

「ちょっと探してくる」

その時ハロウの手の中で、ぱち、と軽い音を立てて一枚金属がはがれ、六角形の穴が現れた。

響いた。

「がんばりました！ それではヒントをあげましょ。合言葉はあなたが私にくれたものよ。もつとがんばったらもう一つヒントをあげまーす」

チップが目を丸くしてハロウの手元を見ていた。歩き出しかけたストライクが声を聞いて足を止めた。

「あなたがわたしにくれたもの？」

ハロウが確かめるように言った。

なんだろう。そもそも僕は何か彼女にあげたことがあつたんだろうか？ 彼女が喜ぶようなものを？

「なんだろう？」

チップが耳をくるくる動かしてハロウを見上げていた。

「なんかあげた？ 思い出してみなよ。適当に言つてりや当たるよきつと」

「…………花は行くたびに持つて行つたな…………ほとんど毎回違う花だつたから、何を持つて行つたのかと言われても思い出せないです。ナニーが…………僕の教育係なんだけど…………用意してくれたものだつたし」

「前に色々言つてたじやないか。もつと思ひ出してみろよ」

気づくとストライクまでがハロウの部屋のドアの近くに立つていた。そうだった。前に思いつく限りバスになりそうなものを試してみたことがあつた。

キャンディ、オリオン、スイートピー、ベンジャミンの木、天使のランプ。

彼女の家族の名前。

僕があげたもの。

「ぜんぜん思い出せないです。何かな……」

「誕生日に何かあげたとかさ。何かあるんじやねーの？」

「誕生日…………僕、彼女の誕生日はなんというか、経験していないんですよ。彼女が12歳になつてすぐの時に初めて会つて、

それから一年も経たずに・・・・・

「ふーん・・・でもなんかあるはずだろ。花のついでに小物をあげたとかさ、お菓子でももつてつたとか。覚えてない？」

小物。お菓子。あげたような気もするし、僕があげたんじゃなかつたような気もする。彼女は花を受け取つただけでもとても嬉しそうに毎回にこにこして、いつも一度細い腕に抱きしめるように匂いをかいでいた。『ありがとう、ハロウ。いつもこれが楽しみなのよ』でも彼女の部屋は僕が持つていくまでもなく、彼女の家族や親戚や家庭教師が持つてきた花で埋まっていた。僕が帰る時は『枯れる前にまた来てね！』と手を振つた。何の花だったのかなあ。どうして僕はそんなに漠然と彼女に接していたんだろう。

「どつかに一緒に行つたとかは？その時買つてあげたんじゃない？」

「一緒に出かけたのは何度か・・・・・あの・・・この箱があつた家があつたでしょう。あそこの商店街でお祭りがあつて、・・・・・」

・・そうですね。確かにその時何か買ってあげた気がします。なんだつただろう

「思い出せ！」

「思い出すんだ！」

チップとストライクが一人で声をそろえた。

二人の応援は有難かつたが、祭りのこと自体は全く覚えていなかつた。

「彼女は体が悪くて、本当はお祭りなんか行かない方がいいって言われてたんですよ。しかも夜店を見に行きたがつたから、余計心配でね。何があつたのか他のことを覚えてないんですよね」

「ふむ」

ストライクが腕を組んで唸つた。「あの辺の祭りね。夏のだろう？」

？」

「そうでしたね。そうだった気がします」

「夏の夜店にあるようなもんだろ？お面？ワタアメ？そうだな・・・安物のアクセサリーも売つてるよな。おもちゃとか。でも女の子

つて何を欲しがるのかな？人形？ひよことか金魚とかも売ってるし、風船もあるだろ？なあ。ペラペラの民族衣装とか

「力キ氷も売ってるぜー。手品のタネとか。俺は焼きイカが好きだよ。腹壊すけど」

「おもちや。かな。そういうえばこまごましたものがたくさん並んでるところで何か話した気がします」

これとつてもきれい。きらきらしてゐる

見て！こんなのはじめて見たわ

そう、どこか・・・夜店というよりは小さな店のようになつたブースに一人で暫くいた。

ほらハロウ、生きてるみたい！でもこれ作り物なのよね？

明かりがランプだけで薄暗くて、カーテンで囲まれた店だつた。スノウボールや小動物の置物、子供だましのバッグや妙にキラキラと光を乱反射するガラスの宝箱・・・そんなもので棚が全部埋まっていた。彼女はそれでもとても喜んで、棚の一つ一つを踊るように見て回つた。

「そう、それで、『ハロウ、どれか一つ買つて』と言われました。じゃあ好きなものを選んで、と。そしたら」

彼女は真顔でもう一度品物のすべてを検分し始めた。あまりに彼女が熱中するのでハロウは彼女が熱を出してしまわないか本当に気が気ではなかつた。

指輪・・・だめね。私、つけるとかゆくなっちゃうのよね。
髪飾り・・・ちょっとといいかも知れないわ。

レースのショール。きれいだけどママにテーブルクロスにされそうね

オルゴールはパパが作ってくれたののほうがいい音だわ。

お人形・・・これもパパが作ってくれる方がすてきね

彫刻が入ったペン・・・これでハロウに手紙を書くのはどう？

水晶の丸いボール、宝石の小さな原石がざらざらと入った小瓶
何に使うの?これ

ポストカード。手帳。筆入れ。宝石箱。小さな金魚鉢に入つた作り物の魚。

でも彼女が最後に手に取つたのは小さな小箱だった。

「ハロウ、私これにするわ」

それはガラスでできた5センチ四方のガラスの箱で、ふたの表面にゆりの花が彫つてあった。

「そんな小さなものでいいの?」

彼女は目を輝かせて「いいの!」と言つた。

「ふたをあけてみて!」

ハロウが言われたとおりに開けてみると、箱の中からはふわっとゆりの香りがした。箱の中には透明のビー玉のようなものが入つていて、それを転がすたびに香りは強くなつた。匂い玉なのだ。

「ね、ハロウ、いいでしょ?これを買ってちょうだい」

買ってそのまますぐ彼女に手渡すと、彼女はハロウの腕にもたれかかつた。すっかり疲れてしまつたようだつた。軽く熱い体だつた。「辛くなつてきたかな。おうちに帰ろつか?」

「そうね。そろそろ帰らないとパパやママやお姉ちゃんに怒られるわ。でも楽しかつた。お土産も買つてもらつちやつた!」

「お土産なんて大層なものじゃないよ。本当にそんなのでよかつたの?」

おもちゃ一つ買つたくらいで、と思つくらい彼女は頬を真つ赤にして喜んでいた。あるいはその時もう熱が出ていたのかもしれない。「ふふ、私ゆりの匂い大好きなの。それにこれ、ゆりの花でしょ?私の名前よ。リリイってゆりでしょ。そうでしょ?」

そして彼女はやつぱりその次の日から当分安静にしなければならなかつた。やつとお見舞いの許可が出て会いに行くと

「私は平氣だつたのよーお祭りに行つたせいなんかじゃないんだか

とものすごく憤慨していた。後で彼女の父親であるリショーリュー・エウリディクから手紙が届き、無理を申し上げて娘の相手をしていただいているあなたには誠に恐縮であるが、あまり娘を興奮せたり、外に連れ出したりしないで下さらんかと言われた。

でも僕は

「それってなんて言つものなんだりつへ匂い箱？」

「なんだろうなあ」

「確かに彼女はそれをすごく氣に入つていました。香り玉からゆりの匂いがしなくなつても、ずっとベッドサイドに置いてありましたから」

「他には？」

「ちょっとと思い出せないです……でも一人でどこかに行つて特に買ってあげたのはそれだけだと思います。お菓子くらいは普段でも持つていったでしょうが……」

3人で悩んだ末、結局その小箱をなんと呼んだらいいのかさっぱりわからなかつたので、もつとがんばつた先にあるはずのヒントを聞いてから考えようということになつた。

もしかしたら僕あの箱じゃないのかもしれない。こんなに全くわからないなんて。

ハロウがあまりに落ち込んで見えたのが、チップはハロウの足をしつぽでぱんぱんと軽く叩き、ストライクは手近にあつたハロウのシルク・ハットを俯いたハロウにすっぽと被せた。

「開くつて。」

それでは次のヒント（2）

(1)

でかいブラシの頭のよつなもの（あるいは程度のいいムカデのようないもの）がかさかさと廊下を通り過ぎていった。きっと掃除の時間なんだ。

P・Pはそれをクリーナーズと呼んでいた。形と動きは不気味だけど、毎日そこらじゅうを走り回って磨いて周り、いつも研究所にはしみ一つ、ちり一つない。

築130年でも綺麗なわけだよなあ。

ストライクはP・Pを探しながらつづく思つた。でもP・Pは検査室にもいなかつたし、P・Pの私室らしきところ（ストライクたちのコンパートメントの向かいだが、広いし廊下側の窓は全面ガラスだし、とても居心地がいいとは思えなかつた）にももちろんいない。

「P・P、どこにいるんだ」

さつきから呼んでいるのだが、例のゆうれいみたいな虚像のP・Pさえ出てこない。どこに行つてしまつたんだろう。

そもそもD・A・Aのメンテナンスの時間だつた。あれが口を挟めない時のほうがいい。

入りたくなかったけど他になかつたので、P・Pのストックの倉庫を覗いてみた。

白衣の子どもが埃の積もつた机につづپしていた。

「P・P？」

全く身動きをしないのでストライクが回り込んで顔を見ると、P・Pは呆けたように口を半分開き、目を見開いていた。

「なあ、P・P、目が乾くし・・・怖いよ。起きろよ」

「邪魔しないで下さいよ。思い出そうとしていたのに。出してくれ

と言つ氣ならだめですよ。あなたたちにはもう暫く滞在してもらいます」

「なんでだよ。俺の脚も顔の傷も治っちゃつたじゃん。もういいだろうよ」

P・Pがむづくりと起き上がりにまばたきをした。

「あなたたちは、私が生まれて初めて長時間接觸しているオリジナルの人間なんです。もちろんDr・A・Aを除いての事ですが。もう暫く研究させてほしい」

「Dr・A・Aのことでも研究してろよ。口が達者で面白いだろうよ」

ポン、と棺おけが例の音を立てた。P・Pは大きなため息を一つついた。

「Dr・A・Aの肉体はもう老化が進み、細胞の増殖力も、研究対象から除外せざるを得ないほど落ちています。今私が知りたいのは、あなたたちオリジナルの人間、オリジナルの獣人のことです」

「じゃーさー、俺とハロウのクローンでも作つてそれで遊んでろよ。それでいいだろ?」

ストライクは、P・Pがさつきから食い入るように自分の「ストック」の列を見ていることに気が付いた。なんだって言うんだろう。ストライクが視線を追つて300人のP・Pを眺めると、3062号のP・Pがけだるそうに口を開いた。

「駄目なんですよ。クローンじや駄目なんです。クローンとオリジナルの人間は別物なんです。クローンは確かにオリジナルと全く同じ遺伝子情報を持つて生まれます。それなのに、そのクローン体がオリジナルと同様の健康な人体に成長する確率は40%程度しかない。そして無事カプセルから出てなお、クローン体には、オリジナルにはなかつた欠陥が現れやすいのです。全ての人間男性のクローン体には生殖能力がなく、自己治癒力が比較的低い。臓器不全にも陥りやすい。なぜなんでしょうね。それはまだDr・A・Aにもわかつていません。だからもう暫くいてください。あなたたちと私の

「一体何が違うのか」

「俺にはわかんねえよ」

「でも何かが違うんですよ」

ストライクは、ちょっと机を触つただけの自分の指が、埃で真っ白になつていてことに気が付いた。

「どうしてクリーナーズが来ないんだ？この部屋だけ？」

「この部屋は昔からP・Pたちが掃除していたのです。私もいわゆる12歳まではここを片付けました。でも他のP・Pたちが処分されて、ここを一人で片付ける気がなくなつたのです」

P・Pはびくりとも視線を動かさなかつた。ずっと「ストック」をガラスごしに見ていた。

白い横顔は無表情で、言葉には抑揚がなかつた。彼もまた、クローンのP・Pの一人だつた。

でもストライクには余計にクローンと人間の何が違うのかわからなくなつた。

(2)

駄目だと言われても言つことを聞く気がなかつたので、ストライクはチップと研究所の中を歩いてみることにした。逃げようと思えば何か見つかるかもしれない。驚いたことにハロウまでついて來た。「箱はもういいのか？」

「ちょっと休憩させてください」

天井は高い。イグナシオの教会といい勝負だ。でも天使も聖者の彫刻も天地創造の絵もない。

軽く一周しても出入り口は最初の門のヤツしかなかつた。火事になつたらどうから逃げる気なんだよ？

でももしも火事になつたら、火災を感知したP・Pが天井中から雨を降らせるのかもしない。火はすぐに消し止められてしまう。気持ちの悪い世界中のストックたちの部屋にもこつそりと入つた。長居するとP・Pに气温がどうたらこうたら怒られてしまうので、かなり手早く見て回つたけど、それでも十分なくらいきちんとその部屋は密閉されていた。

「なんだかなあー」

検査室はいつも明るくて白いイメージだったの、窓の一つもあるんじゃないかと行つてみたが、やつぱりただの白い壁だった。

「す」いですね。僕たちは大きな箱に閉じ込められて『いるみたいだ』

「閉じ込められているんだよ。実際に。」

「換気扇とか通風孔とかないのかなあ？俺通つていくんだけどな」

チップが床近くの壁をノックしながら言った。

「そうですね。酸素はどうしてるんでしょうね。窓も通風孔もない」と酸欠で死んでしまいますよね、そのうち

「死にませんよ」

空中にP・Pが不機嫌な顔をして現れた。

「あなたたちはお気づきでないと思いますが、換気は毎日行われています。そしてまた、その換気口はあなたたちの通れるものではありません」

言つてP・Pの映像はすつと天井を指差した。指のはるか先には白い丸い円盤みたいなものが光つている。

「あれが換気口ですよ。研究所内の空気を廃棄し、外気を取り入れ、循環させています。いくつもついています」

てつきり照明だと思っていたので、ストライクは驚くと共にがつかりした。あんな高いところにカバー付きであつたら手が出せない。「空氣くらいの粒子になりさえすれば、あの換気口も通れるかもしれませんね」

P・Pは言い捨てて消えてしまった。言い方がものすごくてD・A・Aに似ている。とりあえず肩を落として3人はコンパートメン

トに戻った。珍しくチップも自分のコンパートメントに入ってしまった。寝る気なかもしれない。壁の向こうでハロウがベッドの上に腰を下ろす氣配がした。

「開きそう?」

「いや、全然進んでいません。次のとつかかりが掴めないです。P・Pに見てもらえればいいのかもしないんですけどね」

あの箱のおかげでこんなに変なところまで来てしまったなど、ストライクはベッドに寝転びながら考えた。

あんなおもちゃの、女の子が作った他愛ない箱一つのために。「なあ、どうしてその箱にそんなに拘るの?あのゴージーンだつける電話の女も拘つてたよな?」

ふう、とため息が聞こえた。

「これを作ったのはリリイといつ女の子でね、彼女はこれを作り終わってまもなく亡くなってしまったんです。この箱を誰にあげるために作つたのか言わないうちにね」

「形見?」

「そうです。彼女の家族は『これはあの子が私たちに作つて遺したものだ』と言いました。

でも僕は僕にリリイが作つてくれたものだと思いました

「・・・・・」

「だからどうしてももらおうと思つたんです」

「なあ、待てよ。その根拠は?リリイちゃんがお前なんか眼中に無かつたんだつたらどうするんだよ」

「リリイが生きている時に約束したんですよ。僕の誕生日に素敵なものをあげるって。彼女が息を引き取つたのは僕の誕生日の1週間前でした」

ストライクは少し頭がくらくらしてきた。ハロウは思つていたよりもずっと頭がいかれているかもしれない。

だつてそんな、だつて

「そんのは根拠にならないだろ?」

「そうですね」

しかもハロウがとても素直にあつさりと認めたので、余計にこいつの頭のねじがはずれそうになつた。

「そうですね。だから僕は確かめたかつたんです。どうしてもこの箱を開けたいと思つたんです」

「あのさー、恋人だつたとかさ、そういうなの?なんのそれ?ぶつちやけどういう関係?」

「恋人ではなかつたですよ。僕は最後まで彼女の保護者のうちの人でした。遊び友達かな。リリイはまだ12歳でしたからね。彼女をかわいらしいと思うことがあつて、一緒にいて楽しくても、やはり女性として見ることはありませんでした」

ストライクにはますますわけがわからなくなつて唸つた。

「それでどうして家族から娘の形見をかっぱらつ話になるんだよ?」

「だつて僕への形見だつたとしたら、僕が受け取らないといけなくないですか?」

「・・・・・だからさー、その自信はどうからくるわけ?お前、その箱が本当にご家族宛の箱だつたらどうするんだよ」

ハロウの気配が突然すうっと薄れたので、ストライクは一瞬ハロウがP・Pの宙に浮かぶ映像みたいにすうっと消えてしまふのを想像した。

「だめだ。俺の頭はほんとうにこんがらがつてているみたいだ。でもハロウはちゃんとそこにいた。」

「本当はね、誰に宛てた箱だつて構わないんですよ。正直に言つて箱の中身が庭のみみずく宛てた最高の木の葉だつて僕はぜんぜん構わないんです。ただ僕はこれを何があつても絶対に開けようと決めたんです。僕はこの箱の中身がただ知りたいだけなんです。彼女が最後に作つたものがね」

次の日も朝からハロウは箱をいじっていた。だからハロウだけは結構暇ではなさそうだったが、ストライクとチップは本当にやることがなかつたので、P・Pに言つて昔のシネマをスクリーンに流してもらつていた。

「こんなのあるんだつたら最初から出してくれよ」

「これは歴史的な資料ですから、まさか今でも娯楽として見る人間がいるとは思つていなかつたんですよ」

シネマには美しい白黒のドレスを着た茶色の髪の女性と、ハロウみたいな服の男が出てきた。でも男の髪は金色に近い茶色だつたし、コートも帽子も灰色だつた。

「獣人がぜんぜん出てこねえよ」

「獣人が誕生したのは2216年です。このシネマは1964年のものです」

ハロウがよろよろと出てきたので、4人で（P・Pも暇だつたようだ）そのシネマを眺めた。

「この女性は綺麗ですね」

「うん、カワイイな」

「背高い」

「ヒッダ・ヴァン・ヘムストラ」という女優ですね。この当時16歳です

「そういうハロウのお母さんも女優じゃなかつた?」

「そうですけど、僕彼女の映画を全く見たことないんですね」

「データを探しますか?」

「いらないです」

やがて夕食の時間になつたが、P・Pは一緒に食べなかつた。これはとても珍しいことで、例の犬みたいに律儀なワゴンが3人のための乾燥ケーキと配合を間違つた風邪薬みたいな飲み物を運んでき

た。

「P・Pはどうしたんだろ?」

「呼んでみれば来るんじゃねーの」

「P・P・」

言つなり空中にP・Pの映像が現れて、

「ちょっと今手が離せないので先に食べていてください」と言つて消えてしまった。

「おかしいな」

ストライクがさくりといつものましいバーを齧つた。チップは気乗りしないらしく、嫌々椅子に腰掛けると眉間にシワを寄せていつもの「食事」を見た。

「ん?」

「どうしたチップ。ルーのメシはないぞ」「違う。これいつものと違つぜ。これ・・・何か変なものが入つて

る」

「カビ?」

「違うけど、いつもよりもっと薬臭いよ」

その時すっとP・Pの実像の方が入ってきて、右手を背中に回すようにして真っ直ぐにチップを見た、

「チップさん」

「P・P、これは」

ショパン、という風を切るような音がして、チップの腹に注射器のようなものが突き立つた。P・Pの右手にはとても大きな、狙撃手が持つような銃が握られていた。

「チップ! おい、P・P!」

ストライクがP・Pに走り寄ろうとするが、足からがくりと床に崩れた。どうして。

「ハロウさん、食べましたか」

「食べてしましましたね。どうしてこんなことをするんですか」
「食べてしまいましてねじやねえよ

どうしてそんなに落ち着いているんだよ

ストライクはゆっくり前のめりに倒れながら、やつぱりハロウは一回死ねと思った。チップは大丈夫なのか？

「ピピッ」

ハロウが椅子からがたんと落ちて倒れるのがストライクの田の端に写った。

「次の牌だよ、ストライク。でも薬の量を調整してあるから、一番面白い部分は君にも見られるだろう」

嫌な予感がした。

(3)

P・Pはベッドに乗せるなんてほど親切ではなかつた。

何しろハロウもストライクも、生まれて14年のP・Pよりは一回りも大きかつたのだ。ストライクは、自分のコンパートメントの中に、台のようなものからどすんと落とされた衝撃でうつすらと目を開けた。

ドアが閉じられ、がらがらと何かが廊下を横切つていく音が聞こえた。自分が床に投げ出されているのを上から見ているような気分になる。体が重すぎて動かないのだ。こんなのは俺の体じゃない。やがてもう一度がらがらと音が近づいてきたが、今回の音はさつきのよりもずっと重そうだった。ときどききゅつ、きゅつとキヤスターの鳴る音が混ざる。隣のコンパートメントの扉が開けられ、どさつと何か重いものが打ち捨てられ、ドアがぴしりと閉ざされて、また人の気配は遠くなつていった。きっとP・Pがハロウをハロウの部屋に投げていつたんだろう。

「・・・う・・・」

声も出なかつた。どうなつてゐんだよ。接着剤で床に貼り付けられてゐるみたいだ。チップはどうなつてゐるんだろう。注射器が刺さつていた。殺されてなきやいけど。

それにしてもこんなことをして何になるつて言うんだろう。
倒れる直前に「次の牌だ」というD·r·A·Aの声を聞いたような気がする。昨日の話の続きのつもりなんだろうか。
だとしたら

本気で指先に力を込めた。右の指が魔法を解かれたみたいにぴくりと動いた。深呼吸を一つ。手のひらとひじをついて、じりじりと起き上がる。体が重すぎて潰れそうだ。重力の違うべつな星に来てしまつたのかかもしれない。

どうしても上体を持ち上げられなくて、結局這つてドアに近づき、ノブにぶら下がるみたいに手をかけたけど、案の定ドアには鍵がかつっていた。おまけにカギ穴がない。

「・・・クソツ」

ずるずるとその場に転がつてドアに背中をつけた。

「P·P·・・聞いてるんだろ？開けろよ」

「聞いているよ」

ガラスの壁の向こうにふつとP·Pが現れた。映像だ。その顔は実に嬉しそうににやにやと笑つていた。

「お前D·r·A·Aだろ。何する氣なんだよ。チップは平氣なのか」「あの薄汚い獣人なら別なところにいるよ。獣人なんて何をやるかわからないからな。拘束服を着せている。まだ眠つているがね。さて、わしの推測が正しければ、今夜あたり客が来るはずなんだ。君がよく知つている人物だよ。リアルタイムで見せてあげよう」
言つだけ言つてD·r·A·Aは姿を消した。
「おい！開けろよ！P·P！開けてくれ！P·P！」
でももうD·r·A·AもP·Pも来はしなかつた。なんにしろチップはとりあえず生きているらしい。よかつた。

「・・・ト・・ライク」

ハロウのうめくような声が壁越しに聞こえた。

「ハロウ、大丈夫か」

「・・・全然体が動きません」

「何かやる気らしいな、Dr.A.Aは」

「こういう暴力的な・・・身体に訴えるようなことは、しない人た
ちだろうと思ってたんですけど。わからないものだね」

「・・・どうしてそう思つてた?」

「『そんなことは野蛮だ』って言ひそつじゃないですか
「なるほどね」

「すぐに人に殴りかかるような野蛮人に、なぜ人間的な対応をしな
ければならないのかね。自分の立場も理解できない人間に。話して
も通じない人物に対話による理解を試みることは、純粋な時間の無
駄なのだよ、ハロウ・ストーム。君のような文型の人間には突きつ
けられたくない事実かも知れないがね」

映像のP.Pがドアを通り抜けてつかつかと歩いて来て、ストラ
イクを見下ろした。

「言葉など何の役にも立たない。知能程度の低いものは感情や本能
に従つて行動し易い。説得は無意味だ。どんなに噛み砕いて説明し
てやつたとしても、扁桃体の反応そのままに受け入れ、あるいは拒
否する。言語によつてそれを覆すことは難しい。つまりストライク、
君のような粗暴で教養のない人間を動かすには、どのような方法が
最も効果的であるかといつと、言語によらない直接的な刺激を与え
るということだ」

Dr.A.Aはしゃがみこみ、壁に背中を預け床に手足を転がし
ているストライクを、不気味に笑つたまま透明すぎる栗色の目で覗
き込んだ。

「犬のしつけと同じだよ、ストライク。言つてもわからないから叩
くのだ」

ストライクはペッとDr.A.Aの顔につばを吐きかけたが、つ

ばはDr・A・Aの体をすり抜けて向こうの床に落ちた。

(4)

やがてチップの体を台車に乗せた本物のP・Pが前を通つていった。

「いてつ・・・」

チップの声と扉の閉まる音、そして足早にP・Pと空になつた台車が通り過ぎていった。次の瞬間、正面のP・Pの部屋のガラスが一面真っ白になった。8部屋ぶち抜きのスクリーンだ。

「・・・・・なんだよこれは」

もう体はだいぶ動くようになつていたが、閉じ込められたままだつた。廊下側のガラスの壁に張り付くようにして、向かいに現れたスクリーンを見ていると、ふつと大きく引き伸ばされた写真が写つた。

違う。写真じゃない。右下に小さく年月日が入り、時を刻み続けている。その日付は今日で、その時刻は今だった。

映像はこの研究所の唯一の出入り口である門を写していた。やがてゆっくりと門が開いた

「門が」

ハロウのつぶやくような声が聞こえた。

門が開いて暫くしてから、様子を伺うように一人の男が入つてきた。一瞬ストライクはもう一度床に吸い込まれるような奇妙なめまいを感じた。

どうしてなんだ。

ハロウはそのスクリーンに映つている人物を見て首をかしげた。門が開いて暫くしてから、様子を伺うように一人の男が入つてきた。でも入ってきた男はどうみても服の違うストライクだった。他に何

一つ違うところはなかつた。髪の長さが少し違うかもしれない。でもそれ以上に同じすぎた。ストライクの「コンパートメントからどんと大きな音が聞こえた。

チップが隣の「コンパートメントから声を上げた。

「おい！おい！おい！ストライク！あれは誰だ？あなたはそこにいるのか？」

そしてハロウはあの箱を盗んだ日、あのリリイの家の路地裏でストライクの足を射た人物のことを思い出していた。

あの時は逆光で顔が見えなかつた。でもあの体つき、じぐさあのひとだ。

画面の中の男は長い白い廊下をひたひたと歩き、どうやつて撮つているのか、映像もその速さに合わせて追いかけていった。

「・・・・・どうするつもりなんだ」

「・・・・・まあ、ストライク、懐かしいかね？嬉しいだろ？」
ストライクの部屋の中央にひゅっとP・PのDr・A・Aの映像が現れた。

「お前・・・一体何をするつもりなんだよ？呼び出したのか？」

「君たちがこの研究所に来て何日になるかね？君たちはこの研究所でどれくらいのデータを落としたと思う？君たちの映像はあらゆる方向から撮影され、君たちの声はあらゆる語彙がサンプルとして録音されている。だからこんなこともできる」

Dr・A・Aはふと姿を消した。目の前に広がるスクリーンによりに足を止めた。

「ここにストライクという男がいるはずだ。合わせてくれないか」「ではついて来てください」

P・Pは研究所の奥にその外から来た男を導く。だがもう少しで検査室に辿り着くといつといふでP・Pは空気に溶けるように消えた。

「な・・・

その次の瞬間、男の真後ろからストライクの声が響いた。

「おい、どこにいるんだ」

男は弾かれたように振り返った。振り返った先には、いつものフードのマントを着てこちらに向かつて歩いてくるストライクがいた。

「うそだ」

コンパートメントに閉じ込められているストライクは、本物のストライクは、割れてしまうんじゃないかというくらい力任せにガラスの壁を叩いた。でももちろん壁は割れてくれなかつた。男はその廊下に忽然と現れたストライクの方に一步一歩近づいていく

「違うんだ！ それは俺じゃないんだよ！」

いくら叩いても、叩いてもガラスは割れなかつた。

「お願いだから・・・」

映像のなかでストライクが立ち止まり、辺りを見回すそぶりをする。男は険しい顔でストライクの腕を取ろうと手を伸ばした。その時、検査室でさつきチップを撃つた、あの体に不釣合いな銃をもつたP・Pが、その男の背中に発砲した。

「レイン！－

両手をガラスに叩きつけてストライクは床に膝をついた。

映像の男は半身をひねつてP・Pのほうを見たが、そのまま死んだようになれた。

「おい、どこにいるんだ」

スクリーンの中で映像のストライクがもう一度同じことを言つた。P・Pがそのストライクをひと睨みすると、そのストライクは煙のように消えてしまった。

「完了しました。ストレイン捕獲」

「ピピツ よし、彼にはティターン溶液の中で過ぐしてもらおう。処置を開始せよ」

「ピピツ 了解しました」

そこでスクリーンはもとのただのガラスの壁に戻った。

「どうかね？ 楽しかつたかね？ いい牌だらう。この牌が倒れれば君も動かざるを得まい」

ストライクは片手と額をガラスの壁につけて、向かいの壁に反射しているDr·A·Aの顔を呆然と眺めた。

「それにしてもまさか双子とはね。興味深いものが手に入ったものだ。さあ、どうするかね？ ストライク。ストレイン氏は低体温状態でティターン溶液に漬け放置する。そうするとどうなると思うかね？ 実はオリジナルの人間をティターン溶液につけ他の処理をせずに保存した場合、何日間生命活動を維持することが出来るのか、まだ実験したことがないのだよ。恐らく2週間はもつだらうと思つたのがね」

「・・・・・どうしろつて言つんだ」

「君がどうしたいかだよ、ストライク。君のためにここまでやつて来たストレイン氏を、見殺しにしたいのならそのまま我々に実験をさせてくれればいいし、もしストレイン氏を生かして出してほしいところのなら、君はそれなりの対価を我々に支払わなければならぬ。わかるかね？」

「人質にとるつて言うのか」

「その通りだ。少しは賢くなつたようだな。ハロウ・ストームと獣人を人質にしようかとも思ったのだがね、どうもそれほど強い結びつきではないらしい。仕方がないからより確実な駒を使うことにしたよ。ハロウと獣人が人質では、君を外に出したとたんに逃げられるだけだからね」

「・・・そんな・・・」

「不確定要素は少ないに限る」

Dr·A·Aは、口のはしが耳まで届くんぢやないかと思つくりいの不気味な顔で終始笑つていた。

「君がいけないんだよストライク。最初に盗んでこいと言われた時に先を見越して頷いておくべきだつたな。・・・まあそれでも逃亡

を防止するなんらかの手を打つだろ？」「がね」

ストライクは放心したようにじっとガラスに反射する白衣の小さな体を見ていた。

「痛いだろ？君は自分の考えを改めざるを得ない」

白衣の体は粘着質な笑顔のまま言い捨ててふと姿を消した。

月に映る（1）

（1）

ストライクが昨日の夜から口を利いてくれなくなつたので、ハロウはやはり箱に取り掛かっていた。実際のところ、ハロウもストライクもコンパートメントに閉じ込められたままだつたし、チップに至つては「寝袋に入れられたまま」だつた。

「なーんで俺だけこんななんなんだよーーー！」

チップがとても不満そうに声をあげた。もつともだ。

昼になると、P・Pがチップの部屋に入つて行つてチップをワゴンに乗せ、どこかに連れて行つた。ハロウとストライクには、いきなり部屋の真ん中に、天井からぼとつとケーキの箱みたいなものが落ちてきて、開けてみたらちゃんといつものクッキーのようなものと、液体が入つてストローのついたプラスチックのコップが入つていた。食事を取りだけとつてまた箱に触つていたら、チップが寝袋から出されワゴンに乗せられてがらがらと戻つてきた。チップは眠つてゐるらしく、ぴくりとも動かず、P・Pは無表情でチップを部屋に放り込んで出て行つた。

「うえつ。体が動かねえ。ヒゲがびりびりする」

暫くしてチップが目を覚ましたようで、ぶつぶつ言つている。
「なんか俺もでかい棺おけみたいのに入れられたぜ。すつごいうるさいやつ。あーでも寝袋から出られた」

ハロウは少し目を上げて正面のP・Pの部屋を見た。ライトの消えているP・Pの部屋のガラスに、比較的鮮明にストライクの部屋は映り込んでいた。ストライクはベッドの上に横になつてゐるよう見える。そしてその姿はハロウの記憶が確かならば、昨日の夜から変わつていない。

何か声を掛けるべきなんだろうか。

聞きたいことはあるよつたな気がした。昨日捕まつたあの彼はあの夜ストライクを射た本当に本人なんだろうか。ストライクは彼をとてあの夜怖がつていたと思う。たぶん本当に殺されると、彼は僕たちに危害を加えるはずだと、ストライクは思つていたんだろう。それでも昨日のストライクはとも・・・・・とても今P・Pに捕まつているはずの彼の兄弟のことを案じていた。とてもじゃないけど彼に殺されると思っている人の様子ではなかつた。

どうして？どういうことなんだろうな。

僕には踏み込めないことだけれど。

小さいころから一緒に過ごしてきた兄弟なら、たとえ自分を殺そうとして来たとしても、やはり死んでほしくないのかな。僕にはよくわからない。

ハロウは自分の兄のことに少し思い出した。いつも頼もしい笑顔で、いつも僕を気に掛け、毎年僕にカードやプレゼントを贈ってくれる、ナニー以外の唯一の人。

でもどこかでやはり兄はハロウとは隔たつた人だった。兄とはいつもいつも違う世界に住んでいた。精神的にも、肉体的にも。たぶん兄と一緒にいた時間を全部足しても、一年分にはならないだろう。だからあんな風に、もし僕が兄の目の前で捕まつたとして兄は昨日のストライクのように取り乱したりするだろうか？

するのかも知れない。兄はとても優しい、明るい、「まともな」人だから。あらゆる手を使って僕を助け出してくれるだろう。「正しい」人だから。でもそれは少しストライクと彼の兄弟の気持ちとは違うような気がした。恐らく兄は、目の前で捕まつたのが赤の他人であつたとしても、同じことをするだろう。それが正しいことならば。

そして僕はするんだろうか？叫んで手を伸ばし、このガラスの壁を割ろうと？

「がんばったのね。次のヒントです。私の名前を呼んで」

一瞬ハロウにはその意味がわからなかつた。

さつきまでの思考の余韻がまだあたりに散らばつていて、まるで目覚まし時計にだしぬけに起こされたみたいだつた。反応したのはむしろチップの方だつたくらいだ。

「おいハロウ！今箱がなんか言つただろ！」

「……何か言いましたね。『私の名前を呼んで』……？」

「呼べ！早く呼ぶんだ！」

チップは壁の向こうで飛び跳ねているらしく、たんたんと軽い音と振動が伝わってきた。ハロウは深呼吸をしてからそつとスイッチに指を置き、押し込んだ。

「パスワードをどうぞ」

「リリイ」

(2)

間もなく冷たい女性の声が響いた。

「パスワードエラー」

「なんで？」

チップがいかにも不満そうに壁の向こうで言つた。もう一度。

「パスワードをどうぞ」

「リリイ・エウリティク」

だけどやはり同じ声が聞こえた。「パスワードエラー」

「…………実は真ん中にもう一個名前が入ってるんじゃないのか」

ストライクは半口ぶりにハロウに声を掛けた。なんのかんので半

月もストライクだつてあの箱に付き合つてゐるのだ。中身のことは多少気になつた。もう宝箱だとは思つていなければ。でもハロウはリリイのミドルネームがあるかどうかさえ知らないようだつた。

「わからないですね……」

「誰かに聞けねえの?」

ハロウには非常に気が進まなそつて、それでも他に方法がないので、P・Pをとりあえずコンパートメントの中から呼んだ。P・Pは検査室の方からすたすたと歩いてやって來た。ガラスの壁はほんの少し廊下に張り出していたので、ストライクの部屋からは、うまく体を寄せれば、P・Pとガラス越しのハロウの青白い顔を一つとも見ることが出来た。

「どうしました?」

「あの……電話を掛けさせていただいてもよろしいでしょうか?」

「どなたに?」

「コーディーン・Hウリディクに」

P・Pは暫く自分の左目のモノクリルとにらめっこして、3回まばたきを音がしそうなくらい正確にやつてから口を開いた。

「その名前は番号の登録がありません」

「ああ、そうか……では……ウォラ・デイモンを」

今度はすぐにP・Pは顔を上げてガラスの壁¹にハロウを見た。女の声が研究所中に響き渡つた。

「はい。こちらウイークリー・グリップス」

「接続が完了しました。どうぞ」

心の準備といふものはP・Pには存在しないようだ。ハロウは、いきなり電話が繋がつてしまつたらしいことに軽く動搖した様子だつたが、すぐに(見た感じだけは)落ち着いて話し出した。

「こんちは、ウォラ。久しぶりだね」

「…………ハロウ?」

「そうです。えー・・・と」

「久しぶり久しぶりってあなた毎回言つけど全然久しぶりじゃないわよ。あなたまだあそこにいるわけ? 一体なんの用なのよ」

「聞きたいことがありますして」

「何よ? また妙なこと聞くんじやないでしょ? うね。ねえ、あなたから電話に応えるのも結構苦痛なのよ、わかる?」

ウオーラの声は、横から聞いていてもイライラしていくくらい棘があつた。でもハロウは例によつてへこたれずに話を続けた。

「あの、ね、リリィのことなんだけど」

「何? 今さら電話口で土下座でもしてくれるのは? ねえ?」

「いや。リリィのフルネームを教えてほしいんだ」

「あなたね」

女の声は氷のようにならかつた。

電話口から(つまり研究所のそこかしこから)何かよく冷えた、空気の塊が流れ込んで来そつた。でもハロウはまゆ一つ動かさなかつた。

「そんなことも知らなかつたの? 失礼にもほどがあるんじゃないの? よくもそんなことを今さら聞けたわね? ねえ? あなた最低よ。一度と掛けにこないで」

がごんと音がしてP・Pが顔をしかめ、

「回線が切断されました」と言つた。

「質問の解決が望めなかつたようですが、もう一度接続し直しますか?」

「絶対に掛けなおさないで下さい」

P・Pは不思議そうな顔をして戻つていつた。

「すゞい」

ストライクは思わず呻いた。

「ひどい」

チップが言つた。

「なんでハロウはあんな扱いなんだ？」

チップが屈託なく尋ねたので、ハロウはちよつと黙つてから答えた。

「ウォラは・・・もともと僕の取材に来る記者の一人だつたんですけどね、僕にリリイを紹介した張本人です。でも僕は彼女の期待に応えられませんでしたから・・・仕方ないですよ」

よくわかんねえ、とチップの声がした。

「・・・たぶんミドルネームとかはないと思つんだけどな・・・。どうして開かないんだろ？」

セツキの箱の言い方だと、これで最後のヒントみたいだ。でも開かない。

「リリイって言つのは誰があげた名前なんだろう？」

ストライクが思いついたように言つた。

「それは、『両親か何らかの血縁者の方じゃないでしょうか』

「一番田のヒントがや、『あなたがわたしにくれたもの』だろ？」

次のヒントが『わたしの名前を呼んで』。つまりさ

「つまり」

「ハロウ、お前彼女をなんて呼んでた？あだ名か何かつけてやつたらじやない？普通に考えると」

「あだ名」

ハロウはガラスの向こうに目をやつて、ずいぶん長い間空中を眺めていた。P・Pでも浮かんでるのかと思つくらいだつたけど、もちろん誰もいなかつた。

「心当たりがないですね」

「じゃあお前が箱のあて先じゃないんじやね」

チップがころつと言つた。そつかも知れない。ハロウは思いのほかがつかりしたようで、ずるずるとガラスの壁に背をつけた。あま

りに明らかに落胆しているので、ストライクは少しハロウが氣の毒になつた。

「まあ、思い出してみるや。名前だら。リリイちゃんの名前。俺はストライク、チップはチップ、P・Aはフィリップ・プロトタイプ・・・何鄂だっけ」

「はは。D・R・A・Aはなんだっけ?」二人は本名がわからんねえな

「あ」

ストライクとチップがハロウに耳を澄ました。

「なんか思い出したのか?」

「本名・・・の話ををして・・・あの時僕は・・・」

「思い出せ!」

「思い出すんだ!」

ストライクはついこの間もこんな会話をしたのを思い出した。

(3)

あの日僕はリリイにピンク色をしたゆりの花を持っていった。

ハロウは冷たいガラスの壁に額と両手を付けて自分の脳みその中を歩き始めた。脳みその中には、たくさんの回廊とたくさんのドアがあつて、どれも少しずつ似ていてどれも少しずつ違っていたので、その扉にたどり着くのにかなりの寄り道をしなければならなかつた。それはたしか5月のことだったはずだ。そう。とても暖かい日でも窓を閉めた。風がとても強かつたから

「窓を開けていたいお天気なのにね」「リリイは口を尖らせてそう言った。

彼女の母親が窓を閉めて部屋を出て行つた後、ハロウとリリイはさんさんと初夏の日差しが降り注ぐ中庭を眺めていた。天使のランプが気持ちよさそうに、強い風の中を口にラッパを当てたまま飛んでいた。風はびょうと鳴つて窓を揺らし、暴力的なほどに青々と葉を茂らせた木や草を激しく波打たせていたが、その太陽の光の中でそれは不安を感じさせるものではなかつた。ベッドの横に飾られたゆりの花の一輪を、リリイは病的に細く白い腕でそつと取つた。

「ねえ、ハロウ、あなたの本当の名前はなんていうの？」

「本当の名前？」

「ハロウって本当の名前じゃないのでしょうか？お姉ちゃんもお仕事で別な名前を使つているでしょう。それと同じなんでしょうか？」

「そうだよ。ペンネーム…だね」

そのときハロウはすでに自分の本当の名前を全く使わなくなつていたので、彼女がどういったことを聞きたかったのか一瞬わからなかつた。

「本当の名前。

「私はリリイでしよう。生まれたときからそう呼ばれてるわ。ねえ、ハロウは？」

「僕も生まれたときからハロウと呼ばれていたよ」

「でもそれはほんとの名前じゃないでしょ？私知ってるわ。ハロウのパパの苗字はオルフェリウスだもの。ハロウだけ苗字が『ストーム』なんてないわ」

そこでやつとハロウはリリイがハロウの、市民として登録されているような名前のほうを聞きたいのだとわかつた。

「ハロルド。だよ。僕の本名はハロルド・オルフェウス・オルフェリウスだ」

リリイは大きくてとても上品な茶色の瞳をぱちくりさせて、もう一度ハロウにその名前を繰り返させた。そしておかしそうにくすく

すと笑つた。

「長いわ。覚えていられない」

「うん。僕もそう思う。実際にさつきまで忘れていた」

「魔法の呪文みたいね」

リリイはすっと窓に手を伸ばして開け放つた。ハロウは慌ててリリイの体と窓に手をやって、風に煽られるのを防いだ。リリイはまだくすぐすと笑っていた。

田差しのにおいをいつぱいに含んだ風が吹き渡り、リリイの甘いにおいのする、背中の真ん中くらいまである長い髪の毛が舞い上がった。

「いいなあー私の名前は短すぎると思わない?ねえハロウ、私に名前を付けてよ。忘れてしまはうくらい長くて、素敵な名前をつけて。私の本当の名前をつけて」

それで・・・・

僕は腕を組んで暫く外を見ながらそれについて考えたはずだ。彼女の名前はリリイだから

だから

ハロウは一つ大きく深呼吸した。そつと箱を探り、スイッチをそつと押した。

「パスワードをどうぞ」

「リリアノーラ」

「パスワードを確認。ブロックを解除します」

円に映る(2)

(1)

箱はまるでぼぐれるよつこひらりと開き、中から光があふれだした。まぶしやに目を閉じ、また開けると、そこにはちょうど親指くらいの大きさのリリイがにつこつと微笑んでいた。ハロウは何度もまばたきをしてその光景を見つめた。

『ハロウ』

ゆつくりリリイが呼びかけた。その高い声はか細かつたが、それでもストライクとチップとそのほかの白い部屋があるこの一続きの廊下にいれば、必ず聞こえるだろうといつくらういしんとして、厳かだつた。

『ハロウ、こんこちは。お久しぶりね。お誕生日おめでとう。本當は自分であなたに渡したかったのだけど、わたし、具合が悪いのでママに頼もうと思つています。ちゃんとあなたに渡してもらえてるのかしりっ。』

「リリイ」

『ねえハロウ、私本当にあなたとお誕生日をお祝いしたかったのよ。でもいけませんって、ママにもパパにもお姉ちゃんにもお医者さんにも言われたの。元気になつたらねつて。でもね、私たぶんもう少しで神様のところに行く氣がするのね。私、もう元気にはならないと思うの。あなたにももう会えないと思うのよ。だからどうしても、そこに行つてしまつ前にあなたに聞いたかったの。私あなたに会えて本当に嬉しかったし、あなたからもらったもの、何一つ忘れない

わ。神様のところに持つていいくわ。あなたの詩集もね。あなたは自分の詩集のことが好きじゃなかつたみたいだけど、私はあなたの詩がとても好きよ』

小さなリリイはハロウの手のひらに乗つたまま、少し首をかしげてはにかむようにうつむいた。髪の毛がさらりと流れ、骨ばつた首筋をちらりと見せ、そのまま白い寝巻きに包まれた薄い胸の上に落ちかかつた。白い額には青く血管が浮いて、目の周りに茶色にくまができているのがわかつた。

『もつとたくさん言いたかつたのだけど、忘れちゃつたわ。お誕生日おめでとう、ハロウ。お見舞いにいつも来てくれてありがとう。あなたのことが大好きよ』

そして箱はいきなり光を放つのをやめ、今までホログラムでそこにリリイの残像を写していたレンズを、天井からの白い光に晒しながら沈黙した。

(2)

ハロウは今どんな気持ちなんだろうな。

ストライクはベッドに体を横たえたまま、隣のコンパートメントを壁越しに見た。あの箱が開いてから、隣の部屋からは何一つ物音が聞こえない。箱の声と一緒にハロウまで消えてしまつたみたいだ。とりあえず箱がハロウ宛のものだつたことで、ストライクは少し安心していた。

よかつた。のかな

渡るべき物を渡るべき人へ。

そしてP・Pがやって来た。

「ストライクさん、どうしますか」

「行く」

ストライクはむつくり体を起こして、久しぶりにその小さな白い部屋を出た。体がなまっているのが、ドアまでのそんな数歩でもよくわかった。だりい。

「今何時?」

「午後11時13分です」

「何時間で着く」

「2時間17分での到着が想定されていますが、トラブルがあつた場合はその限りではありません」

「…トラブルって起こりそなのか?」

「今までのデータでは100%トラブルは発生しております。しかし確率を考慮しますと、路上で何らかの危機に直面する可能性は、いかなる場合も必ず存在します」

ストライクは例によつてP・Pの口をなんとかして閉じさせてやりたくなつたが、黙つていた。

小型の船みたいな、ハロウとストライクとチップをイグナシオの教会から運んできた乗り物に乗りながら、ストライクはぼんやりと外を眺めた。久しぶりに外の世界を見たと思った。

だけど外はやっぱり雪で、この無人の立ち入り禁止区域を、夜の闇の中にいくらかしてみても何一つ見えなかつた。空気だけが冷たく、雪のにおいがしていた。

「何も用意していないのですが大丈夫ですか」

「うん」

あとは無言だった。

密閉されているはずの船内だが、ストライクには、外の凍るよう
に冷えた風が、どこからか吹き込んでいるように思えた。耳を澄ま
せばその風の音や、船の進む音や、人の声さえ聞こえてきそうな気
がした。でもそんなのはぜんぶ気のせいにすぎないとよくわかつて
はいた。丸い窓にぴたりと手のひらを押し付けると、窓はさつと白
く曇り、少しだけ汗ばんだ手を取り残した。切り取ったようにぼつ
かりと開いた手のひらの形の闇の中に、見慣れた顔が映りこんでい
た。黒い髪は外の景色に埋もれ、黄色人種特有の奇妙な強さを持っ
た肌が、不思議なくらいに生氣を失つて浮かんでいる。ストライク
は確かめるように何度も瞬きをしてみた。その世界で一番見慣れた
顔はそれに倣つて瞬きを返した。

自分の傍らにはいつもこの顔があつた。鏡なんか見る必要がない
くらいに。こんな雪の季節も一人だつた。風邪を引くのもいつしょ。
治るのもいつしょ。気がついたら一人きりだつた。寒かつたよな。

最初の記憶は路地裏。季節は覚えていない。誰か女の人が手を伸
ばしてきたので、レインがその手を取つた。広い車に乗せられたよ
うな気がする。すごく大きな灰色の建物の中に連れて行かれて、女
の人とはそこで分かれた。あの人は誰だつたんだろう。行った先に
は、顔だけ出た灰色の服を着たおばさんたちがたくさんいるところ
だつた。今思うとあれは何かの宗教の尼さんたちだつたんだろう。
よく覚えていないけど、すごくひどい目に会つて、夏の夜に一人で
窓から逃げた。

気がついたらサークスの子になつてて、レインは弓を始めてめき
めき上達してステージに立つようになつた。

俺は何もできなかつたから、ほかにもたくさんいた子達と泥棒になつた。

見つかると財布の持ち主と警官から殴られる。サークスに戻つて
親方からも殴られる。

「お前なんかレインがいなきやぶつ殺してやるのに」 つて何回言わ
れただろうな。いつもレインが俺を庇つた。

だんだんうまくなつて、鍵開けが誰よりも得意になつて、へまをしなくなつたころに今度はサークルが駄目になつた。あの時は二人で話をしただけな。どうする?つて。どつかに連れてかれららしいぞつて。レインはすぐ落ち込んでた。だつて…

「だつて俺は普通のことは何にもできないよ」

「俺だつてできない」

「どうせちつこころに入れられてたみたいなところに行かされるんだろ」

「よく覚えてないけどな」

「俺は覚えてるよ」

「どんなとこだつて?」

レインは言いたくない、と言つて顔を背けた。お前は忘れたつて言つのか?

「本当に覚えてないんだよ。飯食わせてもらえなかつたのと……鞭で叩かれたな」

「ふん」

「……まあとにかく……そんなに嫌ならまた逃げ出せばいいじゃん」

「だからそうしたところでさ…」

「いいよ。これまでなんとかなつて來たじゃねーか。大丈夫、大丈夫」

だいじょうぶ、だいじょうぶ。

ぜんぜん大丈夫じゃなかつたけど。

(3)

遠くにぼんやりと光る建物が見えはじめても、まだストライクは6年前の記憶の中に入つた。あの夜そのまま逃げ出したんだつた。あ

の時は楽に逃げられた。いつも見張りをしていた大人たちはみんなどこかへ（たぶん警察へ）連れて行かれて、子供たちだけがテントの中へ一塊になっていた。警官か一人テントがある敷地にいたけど、犬系獣人だったから、いくつもあるテントの穴をくぐる分には、あまり警戒しなくてもよかつた。ウサギか猫ならうつくしかなかつたかも知れない。

よく覚えているよ。

俺たちよりも三つ年上だつた……なんて言つたつけな……
ウォルト……だつたかな。が俺たちよりももつと小さい子達をぎゅつ
と抱いて一緒に泣いていた。

俺たちは少し離れた所から、ひとつ毛布にくるまつてそれを見ていた。俺たちはもうどこかに逃げるとか、そんな話を小さな声でしていたけど、ウォルト兄は世界が終わるみたいに声を殺して泣いていた。不思議だつた。

俺たちは12でウォルト兄は15だつたはずだ。

面倒見のいい人だつた。茶色い髪とそばかすの多い、ひょろつと縱に長い顔を覚えてる。心配させたくなかつたから、いよいよ抜け出すつてときに、ウォルト兄の肩を叩いて声を掛けていつたんだ。とてもやさしくしてもらつたから。俺たちのお兄ちゃんみたいだつたから。

「ウォルト兄、俺たち抜け出すよ。もう施設とか嫌なんだ」

ウォルト兄は、声を押し殺してひとしきり泣いた。あんまり泣くから見張りの警官が回つてくるんじゃないかと思つたのを覚えていふ。そして涙で濡れた手を伸ばして、俺とレインの頬に交互に触れ、涙をもう一度ぬぐつて真正面から俺たち一人の顔をじいつと見た。

それから「さよなら」と言った。

テントのほころびを潜り抜けるとき、ちょっとだけ振り返ると、ウォルト兄はまだ俺たちを唇をかみ締めて見ていた。

「ストライクさん、着きましたよ」

ふらふらと外に出ると、いきなり冷たい空気が顔にぶつかって来た。それでもなおストライクの思考は記憶の中に留まつたままだった。

P・Pは訝しげに眉間にシワをよせてストライクを見上げ、Dr・A・Aが一言三言嫌味を言つたが、

ストライクの耳には全く入つて来なかつた。

P・Pに促されて、ほとんど無意識に教会の正面の扉の鍵穴にちよつとした耳かきみたいな工具を突っ込みながら、まだ頭の中では当時の映像が、P・Pに見せてもらつたシネマみたいに際限なく流れっていた。

今になつてみるとあの時のウォルト兄のことがわかる。たぶんウォルト兄は俺たちとはまた違つたことを考えて涙していたのだ。だから俺とレインの頬に触れ、穴が開くほどに顔を見つめて俺たちを送りだしたのだ。

それは恐らくきっともう一度と会つことは無いということだ。

ウォルト兄は、こんな風にいなくなつてしまつんだということを思つて泣いていたんだ。

そんな当たり前のことを、

今俺はやつとわかつている。「さよなら。」

俺はウォルト兄がしたように、もつと真剣にもつときちんともつと正確にウォルト兄や他の人たちのことを覚えておかなくちゃならなかつたんだ。

あの時自分たちのことしか考えなかつたから、今俺はあんなに面倒を見てくれたウォルト兄の顔すらよく思い出せない。

もしも

「…くないですか」

「……え？」

「暗くはないですか。見えますか？」

「…あ」

ピン、と高く澄んだ音がして、硬く閉じていた大きな扉はふつと緩み静かに開いた。

「……注意力が散漫になっていますね。出直しますか？」

「いや。大丈夫」

足音を殺して一步中に入る。P・Pがぎこちなくそれに従い、どうにうわけか壁にへばりつくようにして、そろそろと奥の、イグナシオやジョーが眠っている部屋へと続く扉へと向かつて歩いていつた。

「おい」

「あなたは柩を確保してください。私はまた別に確保しなくてはいけないのです」

P・Pはひそひそとそれだけ言い残すと、奥の部屋へと見るからに拳動不審に入り込んでいった。

さて。

ストライクはしばらくその真夜中の暗さに目が慣れるのを待つて、真っ直ぐに祭壇の奥へと足を向けた。何層かの大掛かりなカーテンをたぐって潜り抜けると、そこには以前見たときと全く変わらない様子でとても無防備に、静かに、何でできているのかわからない箱が横たわっていた。一つ違っているのは、箱が安置されている部屋の突き当たりに、大きく五芒星と、それを囲むようにびっしりと書き込まれた見たことも無いような文字と数字が、部屋が明るく見えるほどに輝いていたことだつた。

昼間に見たときにはわからなかつたらしい。

ストライクはほんの少しの間それを眺め、かじかみそうな指を何度もこすり合わせた後、そつとその緑の光に照らされて白く見える

箱を手に取つた。

(4)

箱は見た目よりもずっと軽かつたが、ストライクにはそれを実感している余裕がなかつた。箱をほんの少し持ち上げたその瞬間、いきなり耳をつんざくようなブザーのびいびいという不快な音が教会中に、あるいはこの近辺の崩壊した都市の中に鳴り響いて、それどころではなかつたのだ。

ストライクが反射的に柩を抱えたまま祭壇から飛び降りると、またそこには思いもかけない状況が広がつていた。

さつきまで真っ暗で、しかも明かりだつてランプや蠟燭で灯していたはずの礼拝堂に、いきなり天井から、数々の天使や聖者の彫刻の隙間から、ライトの光が真昼のように明るく一斉に降り注いでいたのだ。

「な

大きな正面の扉に、天使たちの視線とまばゆいばかりの光線をいっぱいに浴びながらたどり着くと、扉もまたびつちりと堅く閉じられ、鍵穴すら何かが中に詰まつて何者も受け付けなくなつていた。なんだこれは？

「ピピツシステム22976解除」

「ピピツ扉が開きました」

その時背中からP・P（だかDr・A・Aだかどつちかの）声が聞こえ、教会の居住区に続くドアがばたんと開いた。

「ストライクさん、その扉も解除します。柩を手放さないように」

P・Pは息を切らせて何か小型のテントのような、ここに来たときには持つていなかつたものをぶら下げていた。

「牧師に発見されました。この扉を解除するまで・・・・予想される秒数を、Dr・A・A」

「あなたがたは一体・・・・・」

扉の奥からイグナシオの声が聞こえて、P・Pは背中で今自分が通り抜けた扉を閉めた。

「ピピツ想定では304秒」

「ピピツ了解しました。ストライクさん、この扉を抑えていてください。その正面の扉はあなたには開けられません。D・A・Aが処理に当たります。処理が完了するまで、あなたは何らかの妨害が入らないように状況を保全してください」

「開けてください！ストライクさん？そこそこいらっしゃるのですか？お願いです、開けてください…」

「P・P、お前…」

「ストライクさん、ご協力下さい」

ストライクは四角い箱を無意識に力いっぱい抱きかかえながら、言われるままに扉を背中で押された。

P・Pは当然のようにすっとストライクを置き去りにして、背筋を伸ばして大きな扉に近づいていった。

その時ストライクはやつとP・Pに、いつもの左耳のモノクルがなく、その代わりに銀色の一本の一メートルほどの長さのコードがこめかみに開いている穴からぶら下がっているのに気がついた。P・Pは扉に着くなり跪いて、その銀色のコードを鍵穴に詰め込んで指で押された。ストライクは、背中で自分が支えている扉がどんどんと叩かれているのを感じながら、ぼんやりとそれを眺めていた。

「ピピツ接続成功。シリアル確認。4500661NY。コードを解読にかかる」

「ストライクさん？そこにいらっしゃるんですか」

「どうしてこんなことになつてるんだろう？」

まばゆいほどに照らし出された真夜中の礼拝堂の中で、俺は何も悪くない人の邪魔をしている。

「…イグナシオ」

「ストライクさん！？お願いです、開けてください…どうしてです

か……これは……どうしてしまったのですか……聖なる柩を動かしたのですか？

『聖なる柩を揺り動かす時、聖なる鐘が知らせ、鋼の天使が罪びとを掴み

神の目が罪びとを見据え、神の手が罪びとを焼くだらつ』と言われています……お願いです、元に戻してください……』

「……」

「神の手と来たか。ふん、ただのレーザー銃じゃないか。随分と安っぽい神の手もあつたものだな」

「その人は……誰なんですか……ストライクさん、どうして……あなたは……わかつてくださつたのではなかつたのですか！」
彫刻の天使たちの顔は、ライトの光がまぶしすぎて見えなかつた。
でもストライクの体中を何かがちくちくと刺していた。

「『めん』

「……ストライク……さん……」

もうイグナシオは扉を叩いたりはしなかつた。ただストライクにはその扉のあちら側に、イグナシオが手のひらを当てて語りかけているのがよくわかつた。

「……ストライクさん、あなたのような人はたくさんいるのですよ。一度、あるいは何度も罪を犯してしまって、そして二度とはしないと誓つて……それでもまた罪を重ねてしまう。あなただけではありますせん」

「……」

「今勇気を出して、繰り返さないで下さい。今まで多くのそういう人たちを私は見てきたのです。何人も何人もです……また罪を重ね、二度と私のところに尋ねては来ません。あなたはそうしないでください……私を……裏切つたりしないで下さい……あなたは……あなたはなぜあの時、自分が犯した罪のことを語つたのですか。それはあなたが本当はそんな罪を犯したくなかったからではないのですか」

「……『めん、本当にごめん……』

「どうか…ストライクさん！」

「システム停止。60秒後に復帰する」

「ピピッストライクさん、60秒以内に脱出します。早くこちらへ」
ストライクは弾かれたようにドアから背中を剥がして礼拝堂の扉に一直線に走り、冷たい雪の世界へ滑り込みながら後ろをわずかに振り返った。

ほんの一瞬、閉じつつある大きな扉の隙間から、リンネルのローブを着て直立しているイグナシオが見えた。
彫刻のような非現実的な美しい無表情で、ストライクを凍りついたように見ていた。

「…」めん！

「早く」

扉がぴたりと閉じるのとほとんど同時に、一人とも船に乗り込んだ。P・Pはアルフなみに急発進して教会を後にした。

(5)

船はどんどん教会から遠ざかっていった。

だつて、イグナシオ、仕方が無かつたんだ

俺だつて何も盗むつもりなんかなかつたんだ。ほんとうにあの日から、自分に言い訳しながら、天使の彫刻や、目の前の視線に後ろめたい思いをしながら生きていくのはもうやめようつて思つたんだ。こんなこと好き好んでやつたんじやないんだ。

イグナシオに前に捕まつたときもそう言つたんだ。
こんなことしなくとも生きていけたんなら。

どうしてよりもよってイグナシオをまた傷つけないといけなかつたんだろう。

「ピピッストライク君。その柩を渡してくれ。君にはなんの価値もないものだ」

ストライクはそう言われてやつと、自分がまだ固く四角い冷たい、そののつぺりとした箱を大事に抱えていることに気がついた。反射的に手を開くと、『聖なる柩』は船のリノリウムの床に落ち、『ひつんと鈍い音を立てた。

「おい！乱暴に扱うんじゃない。拾つていこままで持つてくれるんだ」嫌だつた。もうそれに触りたくなかつた。

ストライクが真つ青な顔でゆるゆると首を横に振ると、例の機械音がしてP・Pがそれを拾い上げ、D r · A · Aが指示した運転席の横のごつい入れ物の中にしまいこんだ。

「ピピッどうしたんだ、大泥棒のストライク君。ずいぶん顔色がよくないが後悔でもしてると言つのか？君はこんなことの専門家じゃないか。胸を張るべきではないのかね？実際わしは君のそのプロフェッショナルに大いに助けられた。あの教会はその柩の保管場所であるためか、あの古さにしては驚くほど保存状態がよく、施錠も行き届いていてね、わしだけでは壁を破壊でもしなければ、それを盗み出すことはできなかつたのだ。君は君の技能を誇りに思つがいい」「……」

「不満なのかね？君の兄弟の殺人犯も生かして返すし、君も自由の身になる。自分の技術を生かす場も持つことができた。わしもP・Pもそれを評価するよ。一体何が不満だというのかね

「……」「報酬に不満があるのなら相談に乗ろつ。ただあまり高望みすると、君の双子の殺し屋もどうした加減か死んでしまうかもしないがね

「…そんな話したくないんだ。イグナシオは知り合いなんだぜ。それ…目の前で盗んだりして…」

D r . A . A があの不気味にゆがんだ顔ではははと笑った。

「君のこれまでの犯罪歴を見ると、君がそういう感傷を抱くとは考えがたいのだが、わしの理解する範囲で個人的な意見を述べてみよう。先ほど不法に家宅に侵入され、管理下にある物品を持ち出された氣の毒な牧師は君の友人かもしれない。でもだからどうだとうのかね。君がこれまで盗んできた数々の品々に持ち主がいなかつたと思うのかね？どんな品物一つをとってもやはり同じように持ち主がいて、他人に奪われたいとは思つていなかつたはずだ。例外はあるだろ？がね。君が先ほど犯した窃盜と、これまで君が犯してきた犯罪は何一つ変わりはないのだよ。『知り合いだから心が痛む』などというのは無に等しい。偽善に過ぎない。ほんとうの偽善だ。わかるかね？知り合いから盗むことに胸を痛めるくらいなら、最初から誰からも盗むべきではないのだ」

「だつて今回は…今回はあんたがやらせたんじゃない！俺は盗もうとなんて思つてなかつたんだ。あんたがレインを人質に取つて、ハロウやチップを閉じ込めて、こうしなきゃいけないようになんじやないか！」

D r . A . A は再びゆがんだ微笑みをストライクに向けた。

どうして中身が変わつただけであんなに気持ちの悪い顔ができるようになるんだろう？

「そう。そうすればいいじゃないか。ストライク君。そうやつて自己弁護したまえ。それはとてもよい解決法だと思うよ。自分を正当化して現実問題から遁走することは、精神の安定を保つのにとてもいい方法だ。簡単でね。君の言うとおりだ。君が窃盜に手を貸したのは、わしが全部仕組んだからだよ。君が動かざるを得ないようにな。君は君の人殺しの兄弟と、友人と呼べるのかどうかもわからな。いような旅の仲間のためにものを盗んだのだよ。仕方なくね。君は

何一つ悪くない。君には何も罪はないよ。満足したかね。ではおとなしく到着を待つことだ」

Dr・A・Aはそこまで言つと、運転席から前に向き直つて箱をいじり始めたので、ストライクは力なくぐつたりと布張りのベンチに腰をかけた。

なぜ盗みが罪と言われるのかといふと、何一つ自分がその身を削らずに、誰かから奪うだけ奪つてこるからです

Dr・A・Aは正しい。イグナシオと同じことを言つていふ、んだ。たぶん。でも、正しいのはわかるけど、でも、

「吐きそう」

「酔い止めがありますが服用しますか。あくまで予防の段階で摂取してあくべきものですが

「……いらない」

P・Pはじつもの調子で「あと81分で到着です」と言つた。そしてこめかみから生えていた銀色の線を引き抜くと（少なくともストライクにはそう見えた）、白衣の胸のポケットからいつものモノクルを取り出して、線を引き抜いた穴にぐさりと突き刺した。P・Pの顔はその一連の動作に少しも動かなかつた。

ストライクは思わずそれに見入つてしまつて声を掛けた。

「痛くないの？」

「配線用のバイパスに繋がる合金のソケット部分に接続しているだけですので、接続の際に異物を感じることはありますが特に痛みはありません

「それ付け替えできるんだな」

「必要に応じて」

「ほかにどんなものがつけられる？」

「端子が合つものなら何でも」

「街灯とか？」

「車もですね。繫がるだけですけど」

「繫がつてどうする？」

「電源を入れたり消したりでしょうか。車ならエンジンを掛けられるかもしませんね。繫がつた端子によつては」

「便利？」

「使用法によります。たとえば電子ロックでないと私には開錠できません。あなたにはできますが」

ストライクが黙り込むと、P・Pは運転席から少しだけ振り向いた。

「あなたの技術を高く評価します」

「ありがとうございます。でも俺は取り返しのつかないことをしてしまったような気がずっとしてる。Dr・A・Aは偽善だと言つけど…」

「私にはそういう概念がよくわかりません。Dr・A・A本人かハロウ・ストームさんに意見を求めるをお勧めします。私は今夜法律に反する行為をいくつか犯しました。しかし私たちにはこのくらいの犯罪行為を追及させないことが可能です。ですから私たちには実質的には無罪です。おわかりですか」

「……罪がなかつたことになるつていうこと?」

「そうですね。一般的に法律というものは他者の心身や名誉、財産を守るために作られたもので、それらを侵害したからといって自動的に適用されるものではありません。しかるべき手続きが必要です。つまり、その手続きが取られない限り、どんな犯罪行為を何度も犯しても、法的には無罪なのです」

「なあP・P」

「なんでしょうか」

「それはうそだろ?」

「事実です」

「じゃあP・Pは何も悪くないのか?俺も何も悪くないのか?」

「そうです。法的には無罪です。イグナシオさんがどこにいる警察あるいは弁護士に掛け合つたとしても、どこかで必ず我々の犯罪行為は立件を見送られることになります」

「じゃあ今夜のことは罪ではないのか？家をひじ開けて？箱を盗み出して？」

「無罪です」

「イグナシオを裏切つて？お願いだから裏切らないでくれと言つた人の約束を破つて？それでも罪ではないのか？」

「それはもともと違法な行為ではありません」

「じゃあどうしてさ、どうしてどうして

「じゃあどうして約束を破つた人たちはイグナシオに会えないんだ！」

「その発言は意味不明です。脈絡がありません」

そして船はゆっくりと研究所に収まった。

(6)

白い廊下がとても長かった。こんなに長かつたつけ。足音もえら
く響いた。もう夜明け近いはずだ。P・Pはあの柩を胸に抱き、右
手で白いテントのちっこいやつみたいなのをぶら下げて、あごを上
げてすたすたと歩いていく。

これでレインは助かるのか。

ストライクはP・Pのだいぶん後をのろのろと追いかけていた。
レインは果たしてそれを喜ぶんだろうか？そもそも俺はレインを助

けるべきだつたんだろうか？
また射掛けられたりして。

もう半年もレインと追いかけていた。

どういうわけかどこに逃げてもちゃんとレインは追いかけてきたし、自分もレインが近くに来たことがわかった。不思議なものだ。あるいはそれはレインが近づいてくるという予兆ではなくて、ただの焦燥感だったのもしれない。

でも事実として

やつ。じさんとにじみ出でちゃんと追いかけてくる。

廊下は長く、静まり返っていた。レインなどの部屋に入れられているんだろう。

レインは小さい頃から俺に比べて真面目だった。現実的だったと言えてもいいのかもしれない。だいじょうぶだいじょうぶって言う俺をいつもいつもたしなめた。サークスにいた時だってそう。真面目で親方に従順で、おまけに誰もできたから、いつも俺はレインに言われた。

ストライクだつて真面目にやればいいのに。泥棒なんかのほうがいいのかよ、親方だつて殴るばっかりじゃないよ。

できなかつたんだよ、レイン。俺にはね。

必死で訓練してもものにならなかつたんだよ。できないやつに優しくするような親方じゃなかつたんだよ。簡単にできるよ、がんばればいいのこつて言うレインが嫌いだつたよ。

どいでだつてそつだつた。真面目にやれよストライク。やつてるよレイン。双子なのにどうしてこんなに違うんだらうつてな。

泥棒やって拾われたといひでも、レインはすぐ上方に気に入られて俺とは別格。

どうしてなんだろうな。

大嫌いだったよ、レイン。しかも俺のことを本気で殺しに来るし。お前はそんなことを平氣でできるやつだつたんだな。どうしてイグナシオを裏切つてまで、そんなお前を助けなきゃなんなかつたんだろう。

P・PはあたりまえのようにP・Pたちの貯蔵庫に入つていった。ストライクが後を追うと、久しぶりに入つたその部屋には、脳みそに記憶を送り続けられているかわいそうな小さなP・Pの棺おけの横に、白くてとても簡素な、申し訳程度にマットが敷かれているベッドが置かれていた。

そのベッドには誰かが布団も掛けられないままに裸で横たわっていた。そしてそれはまるでマネキンのように硬直して、白く、そしてそれは

「レイン？」

P・Pはきしきしと音を立てるキャスターつきのいすに腰掛けて、くるりとストライクに背中を向けた。ストライクはゆっくりとそのベッドに悪い予感とともに近づくと、そつとその横たわっている男を覗き込んだ。

レインだつた。でも

「レイン？」

肩に手を当てて揺らすとその体は、まるでゴムでできた人形のようにぐらぐらと不安定に揺れた。奇妙な感触だつた。その皮膚は、ストライクの手のひらの熱さを吸い取るみたいに奪つていつた。血の氣のない唇は乾き、皮膚がめくれ上がりつていて、そして目は閉じられたままだつた。恐る恐るストライクがその体の首筋に指を当てるど、指はただその青白い皮膚に沈むばかりだつた。何も触れない。

「……P・P、どういうことだ？」

「それは機能を停止しています」

「死んでるつていうこと？」

「ありでこにいえばそういうこと」です。生体としての機能をすべて停止しています

「どうしてだ?」

「実験のためです」

「生き返るのか?」

「その固体が生体としての機能を回復するのは不可能です。でもまた新しくクローン体を作れば」

ストライクはP・Pを椅子ごと蹴り飛ばした。

椅子はキャスターが途中で床に引っかかり、乗っていたP・Pはまともに壁に激突した。

「どうしてだ!!俺はちゃんとやつただのうへお前ら箱を手に入れただじゃないか!…そしたら…そしたらレインは返してくれるはずだつたじゃないか!」

「い……」

P・Pが鼻血を出しながらひじをついてようよようと起き上がりつたといりを、ストライクはもう一度突き倒した。

「ちゅ……」

「どうしてレインが死んでるんだよーおい!」

「やめてください……」

レインなんか

レインなんか大っ嫌いだったよ。憎くて憎くてしようがなかつたんだ。俺と同じ顔をして。俺と同じ声をして。ぜんぶ俺と同じくせにどうしてこんなにも違うんだ。

レインなんか

「どうして!」

P・Pの鼻血まみれの白い小さな顔をもつ一発殴りうつとして、振り上げた腕を不意に誰かが掴んだ。

「もうやめな。ストライク」

レインなんかどこで死んでたって構わないよ。俺を普通に殺そうとするやつなんか

「 もう、やめな。」

レインなんかこんな風にこんな風に死んじゃつたって俺は

「 レイン……が……」

「 ストライク」

腕を下ろすと涙がこぼれてきた。何だつて言つんだ。
「俺なら生きてるよ」

「は？」

振り返るとちゃんと服を着て弓を背中に差し、矢筒を足につけた
レインが、少しだけ笑つてストライクを見ていた。

「レ」

「馬鹿だね相変わらず」

「れいん！」

レインに勢いに任せて抱きつくと、レインは小さな子供をあやす
ようにぽんぽんとストライクの背中を叩いた。
ストライクは暫く声も出なかつた。

「く……う……」

でもなんだか知らないけど涙は出た。

「 ……まつたく……」

P・Pがとても撫然と立ち上がりて鼻血を止めにかかつた。スト
ライクに殴られて鼻血を出すのが一度田だつたおかげで、今回は泣
かなくても処置ができた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2016g/>

ハロウ・ストームの冒険 色鳥飛行

2010年11月28日06時15分発行